

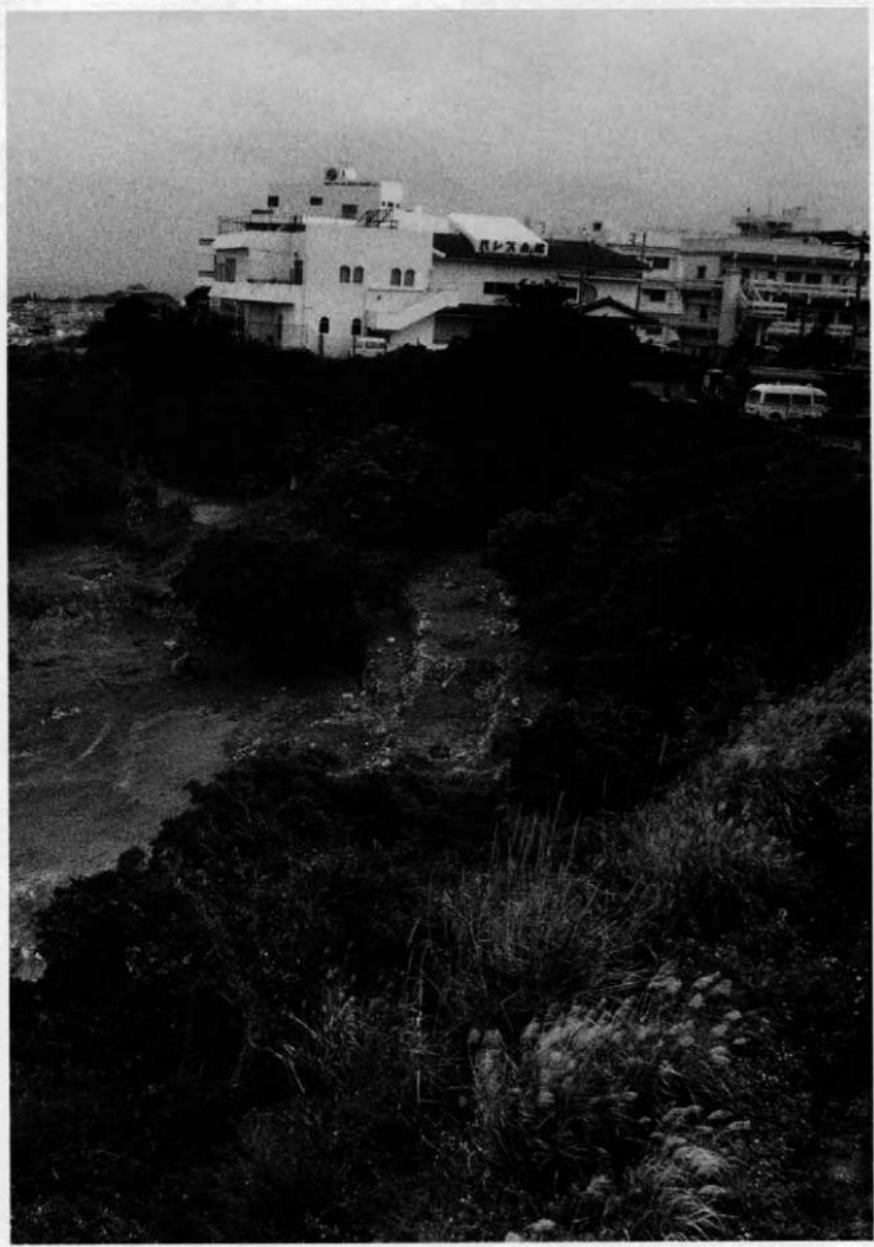
馬上原遺跡

—室川貝塚崖上地区—

沖縄市総合庁舎建設に伴う馬上原遺跡
記録保存発掘調査の報告書

2000年3月

沖縄市教育委員会



記録保存発掘調査前の遺跡近景（1988年）



記録保存発掘調査前の遺跡遠景（1988年）

1985年頃の馬上原遺跡付近



図版一2



記録保存発掘調査前の状況（パレス会館跡地）

記録保存発掘調査前の状況（駐車場跡地）



図版-3



米軍コンセット兵舎土台の検出状況

米軍基地（1945～1962年）頃の建造物土台などの検出状況



図版－4



終戦直後に埋設されたドラム缶の下水管

ドラム缶下水管の構築のために寸断された長方形柱穴群



図版一5



竪穴住居址検出状況
(手前第1号、奥は第2号)

第2号住居址の遺物出土状況





第2号住居址発掘状況

第1号住居址検出状況



図版一7



H - 4・I - 4 の層の状況



図版-8



第2次大戦前の畠の畦道

J - 3 · K - 3 · L - 3 の層の状況



図版-9



消防駐車場前古墓の内部状況



図版-10



消防駐車場前古墓の内部状況



図版-11



発掘調査見学のようす

馬上原遺跡発掘調査メンバー



図版-12

はじめに

本報告書は、沖縄市総合庁舎の建設に伴い1989年度から1990年度にかけて行った「馬上原遺跡」の記録保存発掘調査の成果を記したものです。

馬上原遺跡は、周辺の室川貝塚や仲宗根貝塚と一連の遺跡と考えられております。

室川貝塚は1974年の発見以来、1978年まで4年間の歳月をかけて沖縄国際大学考古学研究室による5次の発掘調査が実施された経過があり、出土遺物の量や規模からみても、また層序から推しても沖縄県考古学編年の指標となる屈指の貝塚として学史上重要な位置づけを与えられています。

御承知のように、貝塚調査によって得られる遺物や遺構は、私たちの祖先の暮らしと文化の原点を探る生きた歴史資料として重要な価値をもっており、その活用の望ましいあり方が郷土愛を培う起点になるものと信じております。

本書の発刊が調査の報告として目的を達成し、これから文化財愛護思想の形成と、更に学術に資する一助になればと願うものであります。

おわりに、本発掘調査に際しご苦労を共にされた多くの皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、今後の変わらぬご協力をお願いし、序といたします。

2000年3月

沖縄市教育委員会

教育長 小 渡 良 一

例　　言

- 1 本書は沖縄市総合庁舎建設に伴う馬上原遺跡の記録保存発掘調査報告書である。
- 2 調査は沖縄市教育委員会が沖縄市役所の依頼を受けて実施した。
- 3 調査員及び資料整理員

〔調査員〕

比嘉賀盛（郷土博物館嘱託／現沖縄市文化財調査審議会委員）
宮里信勇（郷土博物館嘱託／現浦添市教育委員会文化課）
中村直樹（郷土博物館非常勤）
宮城利旭（郷土博物館文化財係）

〔発掘作業員〕（沖縄市シルバー人材センター）

安慶田：屋宜盛義・花城次郎・玉城徳五郎・上原龟造・島袋富一
泡瀬：内間安廣　　上地：仲宗根朝真・米須清真　　大里：作久田ミヨ子
嘉間良：屋宜光江・国場英俊・勝連初子・比屋根有弘
越來：横田栄喜　　胡屋：渡久地政英　　住吉：高江洲善栄・桃原哲夫
園田：神村盛栄・神村盛重・多嘉良純文　　高原：伊波盛喜
中央：久場良義・太田初江・知花盛吉　　照屋：屋宜英子
登川：仲本ヨシ　　東：照屋寛明
宮里：福原具永・喜屋武盛基・桑江良定
室川：諸見里信子・町田宗繁・平田キヨ
諸見里：安谷屋永助・宮城隆明・比嘉武雄　　山里：川平トヨ子

〔発掘作業員関係事務〕 福島宏義（沖縄市シルバー人材センター）

〔資料整理・実測・報告書作成〕

比嘉賀盛・宮城利旭・比嘉清和・宮城昭美・島袋広美・棚原千栄美
稻嶺和江・波平裕子・新屋良博・玉那覇知樹・仲本千秋
比嘉つかさ・新屋真・上江洲照美・上地千賀子・嘉陽律子
豊里友枝・坂井克行・安室淳子・前田一舟・久志和代・赤嶺ゆかり

〔表紙題字〕　　吉浜靖起

〔指導及び総括〕　　比嘉賀盛

4 調査及び本書発刊に際し、下記の機関の方々の絶大なご協力と御教示を頂きました。
記して謝意を表します。(敬称略)

[考古学調査]

高宮廣衛（沖縄国際大学教授）沖縄国際大学考古学研究室
金武正紀（那覇市教育委員会文化課）
島袋春美（沖縄国際大学考古学研究室卒業生）
沖縄市文化財調査審議会
沖縄県教育庁文化課

[調整]

沖縄市役所総務部総合庁舎建設室

[石質鑑定]

宮城宏之（沖縄市文化財調査審議会委員・球陽高等学校教諭）

[御来訪者は下記の方々]

※ 紙面の都合で失礼ながらも個人名は省略し機関名とした。
熊本大学：白木原和美教授・沖縄県考古学会（嵩元政秀会長並びに学兄諸氏）
沖縄県教育庁文化課・名護市教育委員会・浦添市教育委員会
読谷村教育委員会・北谷町教育委員会・宜野湾市教育委員会
糸満市教育委員会・沖縄国際大学考古学研究会・沖縄市消防・安慶田小学校
室川小学校・コザ中学校・琉球新報社・沖縄タイムス社

5 本書掲載地形図は、国土地理院発行の国土基本図をもとに作成した。

6 出土遺物・調査資料は、沖縄市立郷土博物館で保管及び展示している。

目 次

第1章 位置と環境	7
1. 海岸の変化	7
2. 水系	8
第2章 調査の経過	14
1. 馬上原遺跡発掘調査の経過	14
2. 周辺遺跡について	17
(1) 仲宗根貝塚	17
(2) 室川貝塚	17
A. 沖縄国際大学による学術調査	18
B. 室川貝塚範囲確認調査	18
C. 室川貝塚東地区試掘調査	18
D. 室川市営住宅集会場の建設予定地試掘調査	18
(3) 八重島貝塚	19
A. 記録保存発掘調査	19
B. 沖縄市総合庁舎建設に伴う範囲確認調査	19
C. 沖縄市総合庁舎建設に伴う記録保存発掘調査	19
第3章 グリッド設定と層序	21
1. グリッド設定	21
2. 層序	21
(1) 第1層・埋め土・搅乱層	21
(2) 第2層・茶褐色土層	22
(3) 第3層・暗褐色土層	22
(4) 第4層・赤褐色土層	23
第4章 遺構	29
1. 第1号竪穴住居址	29

2. 第2号竪穴住居址	31
3. 長方形柱穴群	31
第5章 出土遺物	36
1. 土器	36
(1) 室川下層式	36
(2) 面縄前庭式	38
(3) 宇宿下層式など	38
(4) 伊波・荻堂式	38
(5) 肥厚口縁群	38
(6) 宇佐浜式	49
(7) 仲原式	54
(8) フェンサ下層式とグスク時代土器	54
2. 石器	54
(1) 石斧類	55
A. 磨製石斧	55
B. 片刃磨製石斧	55
C. 打製石斧	55
D. 薄手石器	56
E. ノミ状石器	56
F. 薄手小形利器	56
G. その他	56
(2) 凹石・敲石・砥石・石皿類	66
A. 凹石・叩石・槌石・磨り石	66
B. 砥石・石皿類	67
(3) 用途不明石材・細粒砂岩	68
第6章 馬上原遺跡発掘調査のまとめ	101

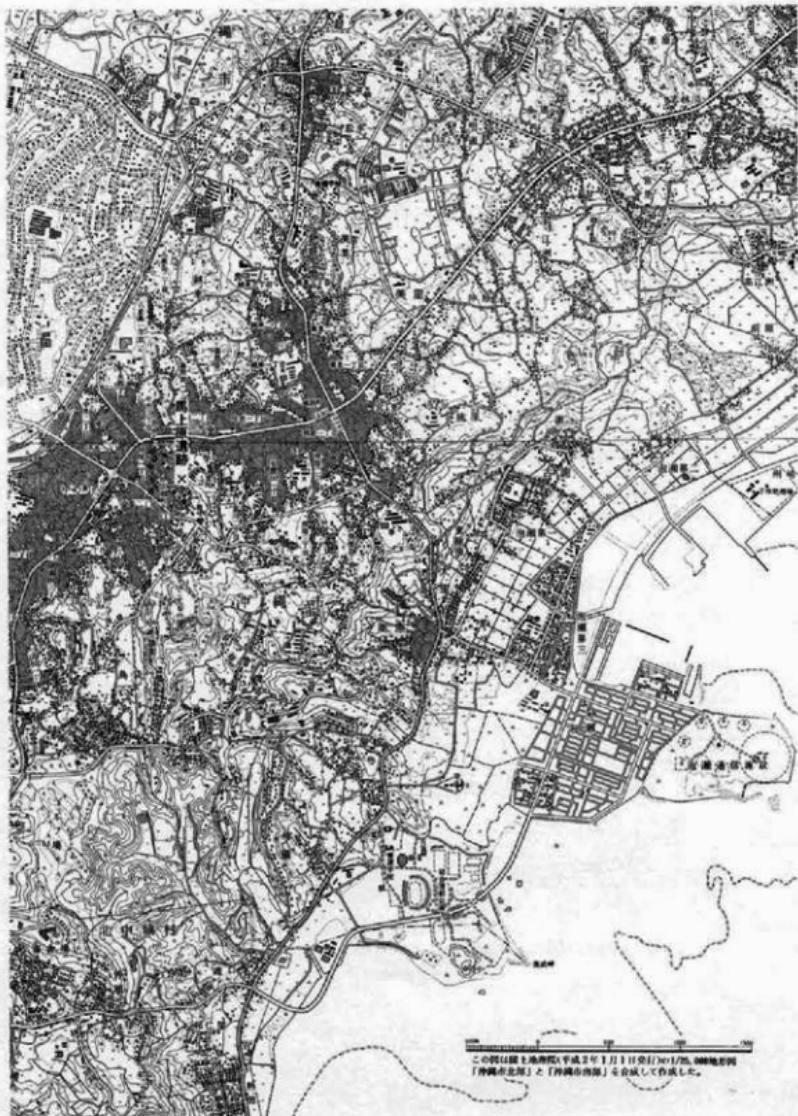


図1 馬上原遺跡の位置

第1章 位置と環境

本遺跡は沖縄市胡屋十字路の東方500mに位置する。記録保存発掘調査は、沖縄市仲宗根町391番地の駐車場跡地と旧パレス会館敷地（仲宗根町394番地）が主な対象地となった。ここは海拔110m前後の琉球石灰岩台地で、東側は崖になっている。なお、崖下の室川貝塚とは小字が異なるので「馬上原遺跡」と命名している。「馬上原」は普通「ウマイーバル」と表記しているが、実際の発音に近い表記は「ウマキーバル」となる。

室川貝塚と馬上原遺跡が一つの遺跡であるだけではなく、東西150m×南北400mほどの範囲に、室川貝塚・馬上原遺跡・仲宗根貝塚・胡屋遺物散布地の4遺跡が重なるように分布している。この地では、約5000年前の室川下層式（沖縄貝塚時代早期：縄文時代前期）から沖縄貝塚時代前～中期（縄文時代後期～晩期）、グスク時代（平安末～鎌倉・室町～安土桃山時代）の遺跡が形成されている。グスク時代以降も胡屋と仲宗根集落へと引き継がれ現代に至っている。4遺跡の複合状況を整理すると下記のようになる。

- ①沖縄貝塚時代早期（縄文時代前期）
室川貝塚・馬上原遺跡
- ②沖縄貝塚時代前～中期（縄文時代後～晩期）
室川貝塚・馬上原遺跡・仲宗根貝塚
- ③《空白期》沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代末）
- ④グスク時代（平安末～鎌倉・室町～安土桃山時代）
仲宗根貝塚・胡屋遺物散布地・馬上原遺跡？
- ⑤首里王府時代（仮称）～（安土桃山～江戸時代～近世・現代）
胡屋集落・仲宗根集落

1. 海岸の変化

沖縄市の海岸風景は明治以降に大きく変貌した。17世紀頃の沖縄本島を描いた図3「正保琉球国絵図」を見ると、泡瀬と奥武岬は「あせ嶋」・「あふ嶋」と記された離れ小島である。「沖縄県史20」「沖縄県統計集成」付録：沖縄県統計概表（抜粋収録）に、1880年（明治13）「泡瀬島、戸数356、男1,025、女1,007」と記録されている。

泡瀬が地続きになったのは、大正以降のよう意外と新しい。古老の話によると「大里には広増原（ヒルマシバル）の小字名があり、海岸を埋め農地を広げた」、「国道329号線の高原交差点近くは船着場跡であった」と伝えられている。また、同国道沿いの沖縄サンクロレラ製造会社近くに「タクトワイガマ（蛸取り洞穴）」の地名も残されている。おそらく貝塚時代には、馬上原遺跡から海岸まで約2kmの距離しかなかったと考えられる。

大正になると泡瀬～与那原間に「沖縄馬車軌道」や勝連方面への「海中道路」も開通した。1919年（大正8）の地形図（図4）では、泡瀬と奥武岬が陸続きになっている。戦後は埋め立てが進み、遺跡から海岸線への距離は遠くなる一方である。

室川貝塚出土の海産物

中城湾岸は砂泥海岸で、沖合いには白波の続くリーフが見られない。サンゴ礁の発達していない湾岸では、弥生時代に盛んに交易された大形のイモ貝類やゴホウラなどが採れない。そのためか、勝連半島の付け根から知念半島までの海岸沿いには、沖縄貝塚時代後期の遺跡が分布しない。この時期は先述の「4遺跡の複合状況」における《空白期》弥生～古墳～平安時代末頃に相当し、千年以上もの長い年月である。

室川貝塚で出土した貝は、アラスジケマンガイ、リュウキユウサルボウ、リュウキユウザルガイ、オハグロガイ、イトマキボラ、ガンゼキボラ、アマオブネ類である。この中でアラスジケマンガイやリュウキユウサルボウは、現在でも盛んに採られている。

魚類は、フエフキダイ類（タマン類）、ブダイ類（イラブチャ一類）、ハリセンボン（アバサー）、クロダイ（チン）など。

獣骨は圧倒的にイノシシが多いが、海生哺乳類のジュゴンも目立つ。ジュゴンを沖縄の海人（ウミンチュー=漁民）は「ジャン」・「ザン」、一般には「サンヌイユ」・「アカングワーライユ」と呼ぶ。泡瀬の海には「ジャングサー」（儒艮草の意）と呼ばれる海草が生えている。

2. 水系

意外なことに本遺跡付近に降った雨水は西海岸に流れる。まず、南の「沖縄こどもの国」のダム（越來ダム）に流れ、次に大きく北に迂回し比謝川本流に合流する。東の中城湾へは、急勾配の斜面で大きな川がない。大正以前の本来の海岸線から約1km幅の急斜面に降った雨水が小川となって注ぐだけである。

本遺跡周辺に降った雨水は、一部は地下の琉球石灰岩層鍾乳洞を流れ、所々で涌き出で人々の生活を潤してきた。室川貝塚の「ムルガー」と八重島貝塚の「ヤシマガ一」は、その代表的な例である。なお、「室川」は「ムルガ一」に因んだ地名であるが、近年は「ムルカガ一」（室川井戸）と呼ぶ人が多い。

貝塚時代の遺跡は、琉球石灰岩台地の周縁に形成されている（参：図6）。グスク時代になって稲作などの農業が本格的に始まる。内陸部のグスク時代遺跡は、仲宗根貝塚・胡屋遺物散布地・センター公園遺物散布地・越來グスク・津嘉山森遺跡・知花遺跡・竹下遺跡・石城遺跡である。内陸部の遺跡は、貝塚時代と同様に水源とともに琉球石灰岩の分布と密接な関係にあり、例外は石城遺跡だけである。海岸近くの与儀遺跡・比屋根遺跡・大里エーヤマ遺跡などは、近くを小川が流れている。

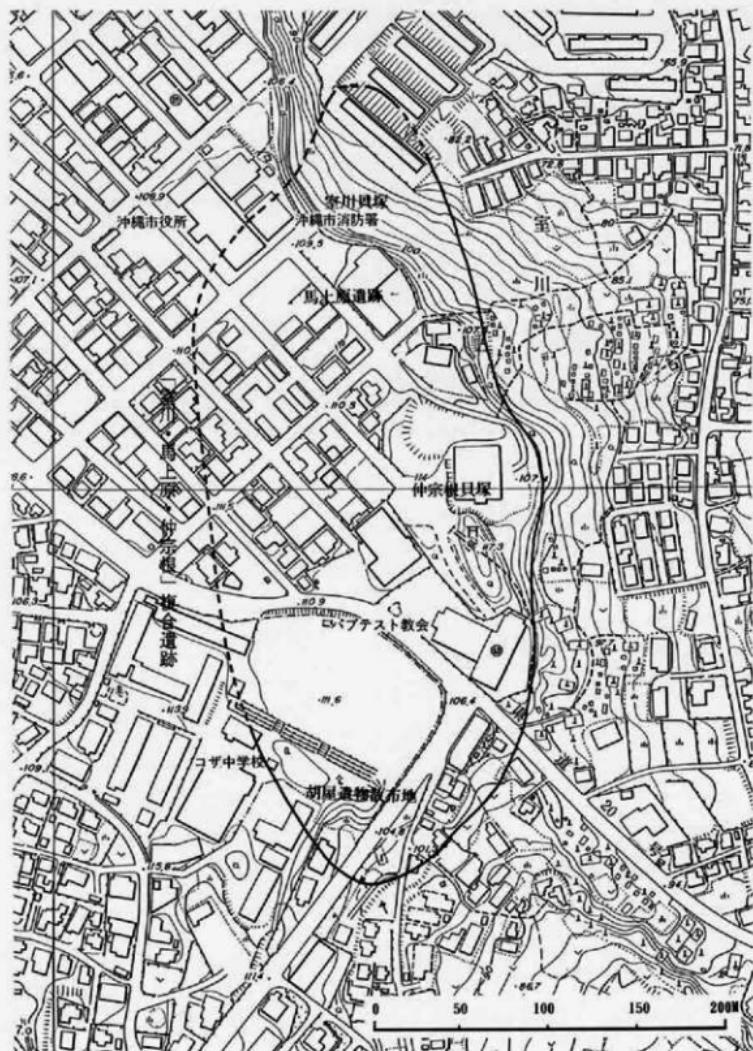


図2 馬上原遺跡と周辺遺跡



図3 正保琉球国絵図

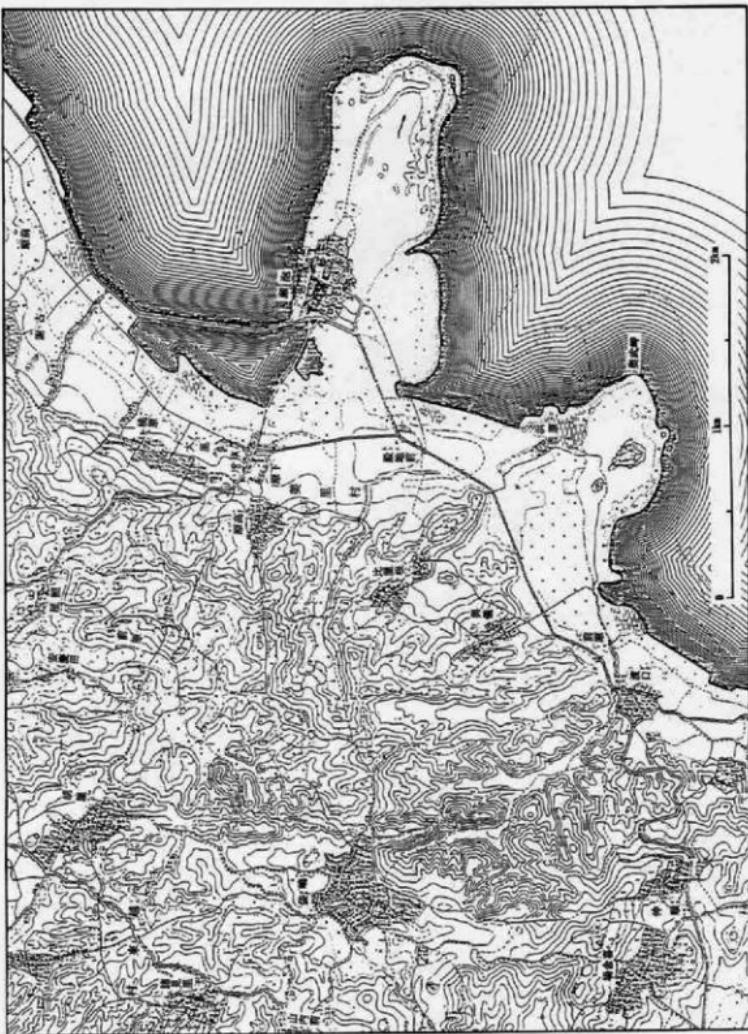


図4 参謀本部陸地測量部 25,000分の1



図5 米軍作成地形図

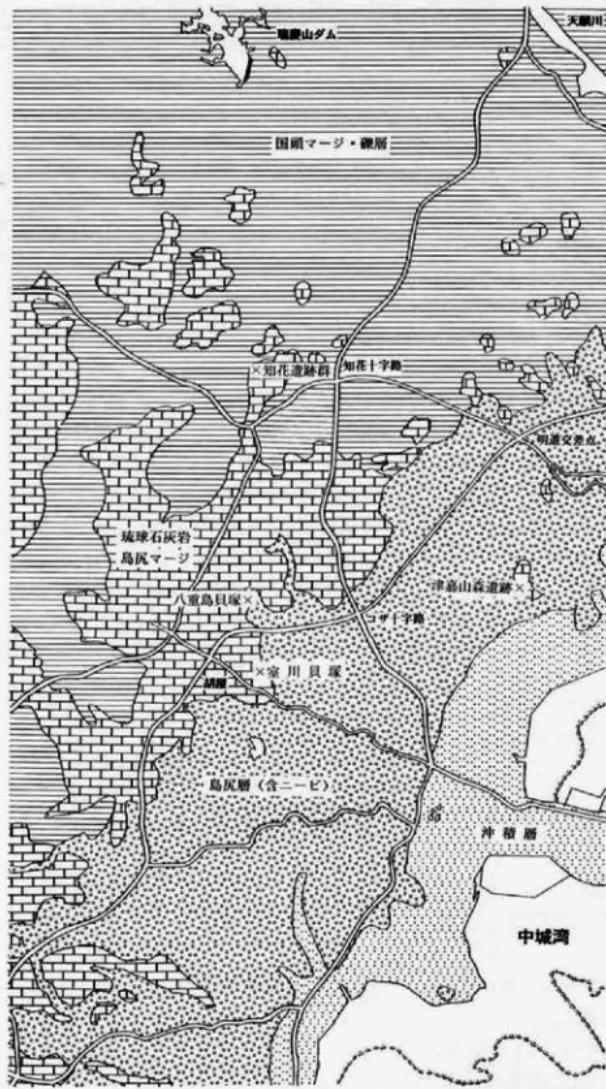


図6 遺跡周辺地質図

第2章 調査の経過

1. 馬上原遺跡発掘調査の経過

馬上原遺跡は沖縄市総合庁舎建設に伴う範囲確認調査による発見である。調査前の遺跡周辺は、パレス会館、駐車場、市道等に利用されていた。同調査は、沖縄市役所が土地所有権などの諸権利を取得後の1989年8月1日～3日にかけて実施。新発見の遺跡として、調査地の小字名を与えて「馬上原遺跡」とした。

馬上原遺跡は、室川貝塚一帯の範囲確認の成果をもとに「沖縄市総合庁舎建設準備室」と調整及び協議を重ねた結果、記録保存発掘調査の対象となった。

発掘調査期間：1989年12月4日～1990年6月27日

発掘調査面積：約800m²

発掘調査記録

1989年12月4日（平成元年）

地表面のアスファルト・コンクリート除去のため、重機（ユンボ）投入。

グリッド設定作業

1989年12月5日

アスファルト・コンクリート・埋め土の除去作業

発掘現場への転落や事故防止のため、タンクで安全柵を設ける作業開始。

1989年12月6日

米軍コンセット土間の縁の部分に、約2mの石列が検出される。

1989年12月7日

発掘区域内のグリッド杭打ち作業。表土・覆土除去作業

1989年12月11日

表土・覆土除去作業がほぼ終了

1989年12月12日

グリッドD6とK4の発掘作業開始

1989年12月15日

L字形に並んだ石列が検出され、隅丸方形の竪穴住居址の一部と判断される。

第1号竪穴住居址と命名。

住居址は未発掘部の道路下に及ぶ。道路は使用中で、全面発掘調査は後半に延期。

1989年12月27日

発掘現場プレハブ完成

1990年1月5日（平成2年）

発掘現場プレハブ（旧パレス会館の駐車場）下に古墓確認

古墓内に14の納骨器・壺の存在を確認

1990年1月12日

胡屋あけはの保育園：現場見学（保母4名、園児41名）

- 1990年2月8日
沖縄考古学会：会長嵩元政秀、池田榮史、呉屋義勝氏來訪
- 1990年2月20日
名護市教育委員会：島福氏、他5名
沖縄県教育庁文化課：盛本氏來訪（*文化庁職員1名）
- 1990年3月7日
グリッドN6で遺構の存在確認。後に第2号竪穴住居址と命名。
- 1990年3月14日
安慶田小学校6年生（約40名）：現場見学
- 1990年3月20日
安慶田小学校6年生（先生3人、生徒80名）：現場見学
- 1990年4月3日
宜野湾市教育委員会：文化財発掘調査メンバー（10数名）來訪
- 1990年4月5日
第1号竪穴住居址の道路部分発掘の打ち合わせ
NTT電柱の移設、水道管撤去、仮設下水道管の敷設
水道管移設作業現場で、道路下の遺物包含層分布調査を行う
- 1990年4月10日
宜野湾市教育委員会：呉屋義勝、県教育センター：大城逸郎、琉球新報社：潮平記者來訪
- 1990年4月23日
糸満市教育委員会：湖城氏來訪
- 1990年5月9日
最後まで残しておいた第1号竪穴住居址の道路部分発掘を開始。
- 1990年5月18日
安慶田小学校：先生2人、現場見学の打ち合わせで來訪
- 1990年5月22日
赤褐色土層面に第2号竪穴住居址のプランが検出される。
- 1990年5月24日
熊本大学：白木原和美教授來訪
- 1990年5月25日
安慶田小学校6年生80名：現場見学
- 1990年5月30日
第2号竪穴住居址内に焼土面検出。
- 1990年5月31日
第2号竪穴住居址の発掘をほぼ終了。竪穴部の深さは10~15cmと浅い。
- 1990年6月1日
北谷町教育委員会：中村恵氏、他4名來訪

- 1990年6月2日
第2号竪穴住居址の平面実測作業と観察畦部の発掘終了。
- 1990年6月3日（日）
大雨、発掘現場水没。
- 1990年6月4日～5日
水中ポンプによる排水作業。
- 1990年6月7日
沖縄タイムス社：黒島記者來訪
- 1990年6月8日
雨で発掘作業中止。
- 1990年6月11日
雨で発掘作業中止。
- 1990年6月12日
コザ中学校：先生1名、生徒4名：現場見学
沖縄国際大学考古学研究室：高宮教授、ゼミ生17名來訪
沖縄市内幼稚園：先生方25名見学
- 1990年6月12～14日
雨で発掘作業中止。水中ポンプによる排水作業。
- 1990年6月15日
沖縄県教育委員会文化課：岸本氏來訪
宜野湾市教育委員会：文化財発掘調査メンバー7名來訪
- 1990年6月16日（土）
1時間雨量155mmの記録的な大雨。発掘現場と道路の区別ができない危険な状況となり、通行人が発掘現場に落ちて溺れそうになる。
沖縄市消防が危険防止のためにロープを張り、一帯を立ち入り禁止地区にする。
道路と発掘現場の区別ができる深さまで、消防ポンプ車による緊急排水作業が行われる。
沖縄国際大学：学生が文化人類学講義の一環で40名現場見学
- 1990年6月18日
水中ポンプによる排水作業。
- 1990年6月19日
沖縄考古学会：萬元会長、呉屋理事、県文化課：大城氏來訪
浦添市教育委員会：下地、高良氏來訪。沖縄市消防：職員20名現場見学
- 1990年6月20日
第1・2号竪穴住居址の検出状況の最終撮影。また、ラジコン・ヘリコプターによる遺跡の空中撮影を行う。
- 1990年6月27日
発掘現場の埋め戻し作業終了
馬上原遺跡記録保存発掘調査を終了。

2. 周辺遺跡について

次に関連する周辺遺跡の発見、調査等の概略を併せて紹介する。周辺遺跡の調査経過を含めたのは、馬上原遺跡の背景を理解するためと、更には当地一帯の遺跡が県内遺跡の中において、学術上貴重な位置付けを付与されているからである。

(1) 仲宗根貝塚

1933年（昭和8年）多和田真淳氏が発見。馬上原遺跡の南50mに隣接する。本来は馬上原遺跡と一続きの遺跡である。遺跡の発見は、県内遺跡の中でも初期の時代に属する。

①1965年発掘調査

調査主体：琉球政府文化財保護委員会

参加者：多和田真淳・嵩元政秀・知念勇

文献：『仲宗根貝塚発掘調査報告書』、1985年3月、沖縄県教育委員会

②1985年発掘調査

調査主体：沖縄県教育委員会

参加者：上原静・安里嗣淳・玉城朝健

文献：『仲宗根貝塚発掘調査報告書』、1985年3月、沖縄県教育委員会

※ 追記：1998年試掘調査

調査主体：沖縄市教育委員会

第1回目：1998年8月

沖縄県教育委員会が1985年に行った発掘区の南側20mの地点。包含層・遺構・遺物等は検出されなかった。

第2回目：1999年2月

調査地点は沖縄県教育委員会の発掘区北側5～10m一帯。状況は前回と同じ。

(2) 室川貝塚

貝塚中心部は馬上原遺跡北側の崖縁より東20mの斜面に位置する。総合庁舎の建設に伴う調査の便宜上、從来から室川貝塚と呼んでいた「室川貝塚中心部」を拠点に、室川貝塚東地区、室川貝塚崖下地区等の3地区に区分した。

各地区的発見の経緯

①室川貝塚中心部

発見者：当山一博（当時、コザ中学校3年生）：1974年

②室川貝塚崖下地区

発見者：沖縄市教育委員会：1978年

③室川貝塚東地区

発見者：沖縄市教育委員会：1982年

以下、範囲確認調査、記録保存調査、学術調査、関連調査報告書等を略述する。

A. 沖縄国際大学による学術調査

室川貝塚中心部の発掘を沖縄国際大学が第1～5次にかけて行っている。調査は、高宮廣衛先生を中心に学生の考古学実習として行われた。この調査に参加し巣立つていった卒業生が、関係機関の遺跡発掘調査で従事している。

- ①第1次調査1974年12月26日～1975年1月5日
- ②第2次調査1975年7月8日～18日
- ③第3次調査1976年7月4日～21日
- ④第4次調査1977年8月1日～23日
- ⑤第5次調査1978年8月8日～9月4日（※沖縄市教育委員会が委託）

調査報告書：沖縄国際大学文学部社会学科考古学研究室

- ①「沖縄市室川貝塚発掘調査速報」「沖国大考古」創刊号1976年3月
- ②「室川貝塚第1～3次発掘調査概報」「沖国大考古」第2号1978年3月
- ③「室川貝塚第3～4次発掘調査概報」「沖国大考古」第3号1979年3月
- ④「室川貝塚第2～4次発掘調査概報」「沖国大考古」第4号1980年3月
- ⑤「室川貝塚第3～5次発掘調査概報」「沖国大考古」第5号1981年3月
- ⑥「室川貝塚第4次発掘調査概報」「沖国大考古」第6号1982年3月

B. 室川貝塚範囲確認調査

調査期間：1978年8月8日～9月4日

同調査は当教育委員会が沖縄国際大学文学部社会学科考古学研究室へ依頼して実施した。
調査範囲は室川貝塚中心部周辺。

C. 室川貝塚東地区試掘調査

調査日時：1982年11月26日

「室川ハイツ宅地造成」予定に伴う文化財有無の試掘調査で確認。

D. 室川市営住宅集会場の建設予定地試掘調査

調査日時：1983年7月7日

(3) 八重島貝塚

同貝塚は馬上原遺跡の北方約1kmに位置する。遺跡は平地と谷あい斜面に形成されている。遺跡南側に隣接する石灰岩カルスト残丘に登ると、室川貝塚から馬上原遺跡一帯が南方に見渡せる。1954年（昭和29年）に多和田真淳氏が発見。

文献：多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『沖縄文化財調査報告（1956～1962年）』1978年3月那覇出版社

A. 記録保存発掘調査

調査期間：1989年9月5日～10月25日：面積約108m²

調査の発端はアパート建設に伴う埋蔵文化財有無の調査で、試掘を1989年8月28日に平地で行い、包含層を確認した。

a. 調査の概要

発掘地点は平地部分で実施、谷あい斜面は未発掘。アパート建設に伴う事前調査は、室川貝塚東地区と同時に進行した。次に調査の成果を略述する。

- ①土器は宇佐浜式土器が主体
- ②小孔を有する石製の装飾品（材質はヒスイ？）
- ③隅丸方形の堅穴住居（規模：3m前後）

現在、資料整理途中のため、報告書は今後の課題である。

B. 沖縄市総合庁舎建設に伴う範囲確認調査

a. 旧沖縄市役所・旧消防庁舎・水道局周辺

調査期間：1986年9月9～13日

b. 室川貝塚一帯の範囲確認詳細調査

調査期間：1988年12月1日～1989年8月30日

この調査によって、室川貝塚中心部の範囲、室川貝塚崖下地区の範囲、室川貝塚東地区等の範囲を確定した。

C. 沖縄市総合庁舎建設に伴う記録保存発掘調査

室川貝塚一帯の取り扱いは「沖縄市総合庁舎建設準備室」と協議し、「室川下層式土器」等の貴重な遺物が出土した室川貝塚中心部は、遺跡として保存する同意が得られた。その結果、総合庁舎の配置を貝塚中心部より大幅に南側へずらすことになった。範囲確認調査

の成果を基礎資料として、保存区域と記録保存発掘調査を実施する区域に線引きする調整を行った。最終的に室川貝塚の東地区と崖下地区及び馬上原遺跡は、記録保存発掘調査の対象となった。

詳細は『室川貝塚』—総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告書—沖縄市教育委員会文化財調査報告書第17集、1993年3月、沖縄市教育委員会、で報告済み。以下では、室川貝塚東地区と崖下地区的調査を略述する。

a. 室川貝塚東地区

調査期間：1989年8月31日～11月22日：面積約800m²

調査の概要

総合庁舎の配置変更によって、新たに建物敷地に含まれた地区の発掘調査を事前に行った。遺跡は馬上原遺跡の東側約70mに位置する。遺跡が斜面に形成されているので、調査中に地滑りが生じ危険な状況が度々発生した。

発掘調査報告書

『室川貝塚』沖縄市文化財調査報告書第17集、1993年3月、沖縄市教育委員会

b. 室川貝塚崖下地区

調査期間：1989年12月4日～1990年7月23日：面積約240m²

調査の概要

調査理由と事前発掘、いずれも東地区と同じ取り扱い。崖下地区は安全対策に留意し調査を行った。発掘前の本地区は、崖上から投棄された建築廃材が2m以上積もっていた。廃材を除去後、更に2m前後の覆土が堆積し、覆土には大小の石灰岩が多量含まれていた。最大は2m余もあり、周辺の地形上の制約からクレーンなどの重機を搬入することが不可能だったので、大ハンマーと鉄クサビを併用して人力で割り運搬する作業の繰り返しが続いた。

調査期間中は大雨が度々起り、そのたびに崖の崩落が発生した。災害防止として土嚢袋を1,000袋以上積み上げて安全対策を行った。幸いに本地区と東地区的調査は、大きな事故もなく、無事に終えることができた。

発掘調査報告書等

①「総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告書」

沖縄市文化財調査報告書第17集1993年3月

②「室川貝塚【発見～崖下地区発掘調査】の成果を中心に」

沖縄市文化財啓発資料第3集1995年3月

③「沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書」

沖縄市文化財調査報告書第20集1997年1月

第3章 グリッド設定と層序

1. グリッド設定

旧沖縄市役所庁舎近くのトラバース杭（座標値、X = 36.607、Y = 30.608）を基準点とした。ここを基準に、発掘グリッドの基本ラインをトランシットによって設定。ラインは、磁針方位より時計回りの角度 $49^{\circ} 10' 55''$ （方位角 $N40^{\circ} 49' 55'' E$ ）になる。更にこのラインに直行するラインを設けた。グリッドは $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ を1区画とした。番号は「図7 グリッド設定・遺跡平面図」を参照。なお、このグリッドは、室川貝塚の崖下地区まで包括した範囲として設定した。

2. 層序

遺跡一帯は1945年以降の米軍基地建設や1962年の基地開放後の造成工事などによって、現地表から $80\text{ cm} \sim 1\text{ m } 30\text{ cm}$ の深さまで、整地作業や10回前後の砂利・コーラル・アスファルト舗装が行われている。その結果、本来堆積していた層が掘削されている場所もある。大正8年（1919年）の図4「参謀本部陸地測量部25,000分の1」地形図と図5「米軍作成地形図」（1949～1951年）を比較すると、第二次世界大戦後の米軍基地建設でも地形を大きく変えるような造成工事が行われたようすは認められない。

発掘調査では、下記の4層に大別した。

- 第1層：現地表付近の埋め土・搅乱層
- 第2層：茶褐色土層（戦前の耕作土層）
- 第3層：暗褐色土層（遺物包含層）
- 第4層：赤褐色土層（本来は地山であるが境部などから遺物出土）

（1） 第1層・埋め土・搅乱層

発掘対象範囲が駐車場・道路で、地表部のほとんどがアスファルト舗装され、一部はコンクリート面である。試掘調査で遺物がほとんど含まれていないことが確認されていたので、この埋め土・搅乱層の部分は、重機（ユンボ）を使って一気に除去した。なお、本遺跡の戦後の掘削による搅乱・破壊の原因などを下記にまとめた。

1945年4月

米軍のキャンプ建設

野戦キャンプ設営。沖縄住民は「クロンボーエル隊」と通称。

地表は砂利やコーラルで舗装。ドラム缶を排水・下水管に埋設。

1945年～1947年

恒久的な基地建設

コンクリート土台のコンセット兵舎が建設される。

排水溝もコンクリート作りとなり、恒久的な基地が建設される。

1959年

キャンプ外の排水はドラム缶のままで、台風時に民間地域で浸水被害発生。

その頃、マリン部隊が駐屯、「胡屋キャンプ」と呼ばれていた。

1962年7月～

胡屋キャンプが開放される。

米軍基地建造物が撤去され、跡地を整地し琉球石灰岩コーラルが敷かれた。

1965年～

コザ市役所新庁舎完成。区画整理が行われ市街地となる。

1994年

沖縄市総合庁舎完成

(2) 第2層・茶褐色土層

この層は最も厚い部分で約45cm。一部で層の上面が米軍基地造成で削られ、平坦に整地されている。ほとんど無遺物層のような状況であるが、場所によっては焼土が目立ち、壺屋焼などの近世陶磁器片などや貝塚時代の土器片が検出された。

15～20cm以下の深さでは、土壤乾燥時のひび割れに沈殿したような赤サビ色の粘土が見られ色調も暗くなる。なお、二基の竪穴住居址の検出された付近では、30cm以下の深さになると土器片も2～3cm大が目立ち、出土数量が増加する傾向が観察された。

発掘調査の時点では確認できなかったが、グリッド・I 4（図9一中段）の壁面に整地作業で埋められた結果と考えられる層の変化が見られた。同様にグリッドH 4・I 4・J 4付近から南側は、周囲の畠から30cm程低い窪地状になっていた状況が検出され、これが埋められ平坦に整地されている。

これらの整地面の標高は109.50m前後で、この状況は全発掘範囲で確認された。先述の排水・下水管として埋設されたドラム缶の上部面もこの高さである。

(3) 第3層・暗褐色土層

本遺跡の主体となる層で、試掘調査で得られたデータからは10cmも残っていないのではないかと予想されたが、幸いにもグリッドJ 4・K 4・L 4付近を中心にして30cm以上の厚さで残されていた。なお、グリッドD～Gでは第2・3層は掘削され、第1層埋め土・搅乱層を除去すると直ちに地山の赤褐色土層となる。

この層にも第2層と同じような赤サビ色の粘土が見られる。層の上部は17世紀以降の琉球王朝時代に畠地となり、耕作・搅乱されて下層部だけが未搅乱のまま残された。遺物の包含量は極めて少なく、5mm以下の丸くなった土器粒が目立つ。

0～20cmの深さまでは、4m四方のグリッドを10cm掘り下げても土器片30点以下が普通であった。30～40cm付近の深さになると層の色が濃くなり、遺物の出土数が増える。しかし、40cm以下の深さになると、再び遺物の包含量が減少した。60cmになると層の色が、暗黄褐色に変わり遺物もほとんど出土しなくなる。

なお、K 5を中心にしてI 4・I 5・J 3などのグリッドでは、暗褐色土層の下部が暗黄褐色に変化しても多くの土器が出土することが確認された。そこで第3層の下部として区別した。しかし、土器片などは第3層下部0~10cmに集中し、それより深く掘り下げるに急激に減少した。

グリッドH 3・I 3から南側では第3層下部が深いことが確認された。ここでは出土数はわずかだが、1m30cm以上の深さになるまで土器片などの遺物が続いた。約2mの深さまで発掘し、ボーリング棒で地山を確認しようと試みたが、3m以上の深さがある。この深さに達すると、土器や焼土の粒も検出されなくなり、無遺物層と判断されたので発掘作業を中止した。

第1号竪穴住居址付近と第2号竪穴住居址の竪穴住居内に堆積した部分の遺物の出土状況は、周辺と大きく異なり遺物が集中的に出土した。出土土器の型式も、室川下層式・面繩前庭式・伊波・荻堂式・肥厚口縁土器・宇佐浜式・仲原式・その他と多種多様である。

(4) 第4層・赤褐色土層

本遺跡の地山は赤褐色の鳥尻マージである。しかし、同層の上部から少量ではあるが遺物が出土した。この部分は下部と比較すると、土色がやや黒く吸排水性が良好で地山との区別が可能であった。しかし、発掘調査が長期化するうちに乾燥と雨による吸水が繰り返され、地山との区別が不可能になった。なお、赤褐色土層からの遺物の出土は、5cmより浅い部分がほとんどである。

地表のアスファルトやコンクリートを除去すると、発掘対象範囲の約40%では、第2層と第3層がなく、直に地山の赤褐色土層が現れた。これは先述の整地作業で上部が掘削された結果である。この赤褐色土層の掘削は浅く、D~Hのグリッドでは赤褐色土層面に、貝塚時代の柱穴群と土壤状の穴が検出された。

なお、この赤褐色土層を検出する作業中に、ボール状の赤サビ色の部分（径20~30cm）が所々で見つかった。ボロボロに錆びた砲弾片のようで、掘るとガリガリと硬い。乾燥時のひび割れに沈殿した褐鉄鉱ではないかと考えられ、サンプルを採取した。

C + D + E + F + G + H +

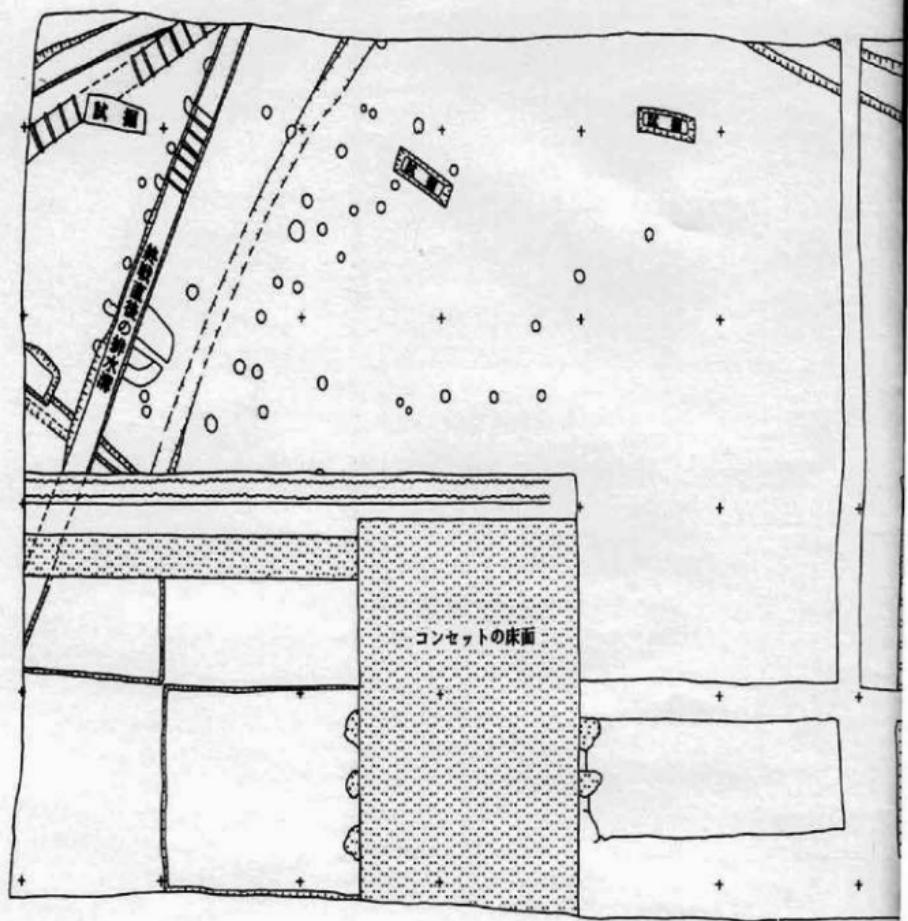
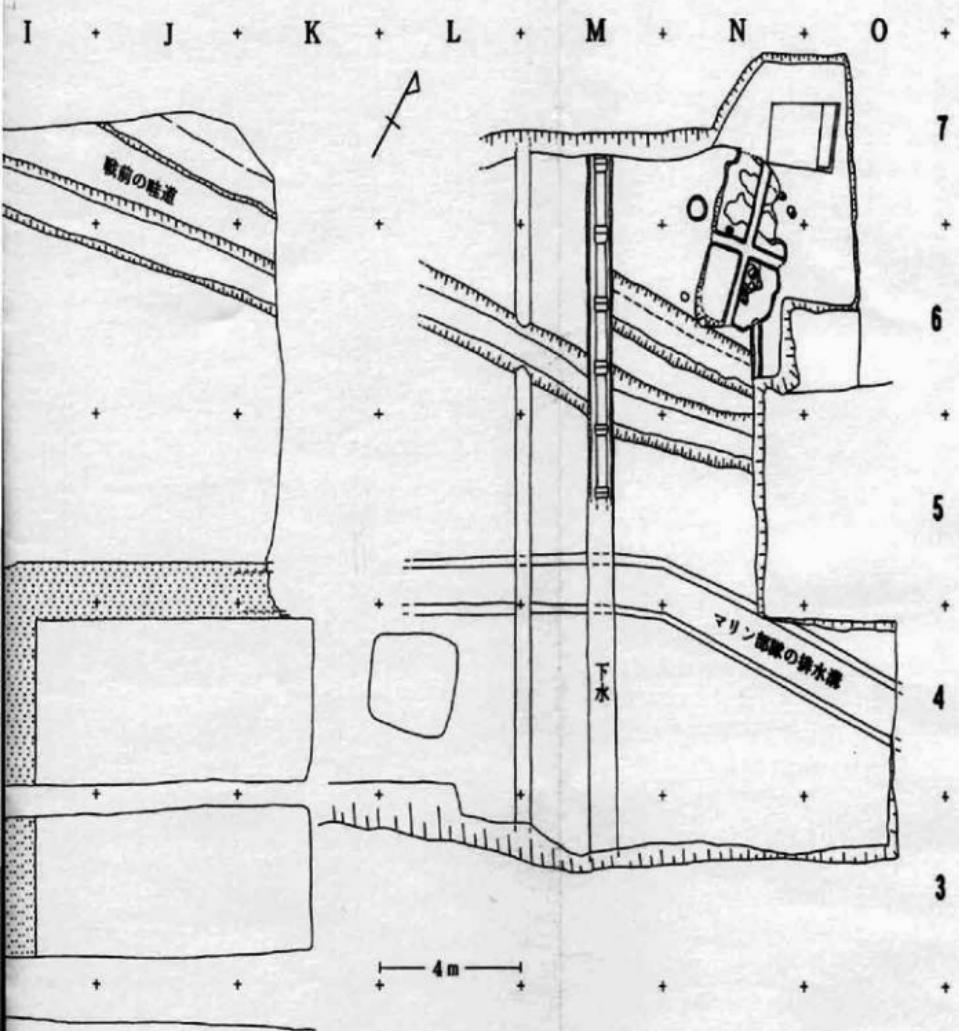


図7 グリッド設定・遺跡平面図



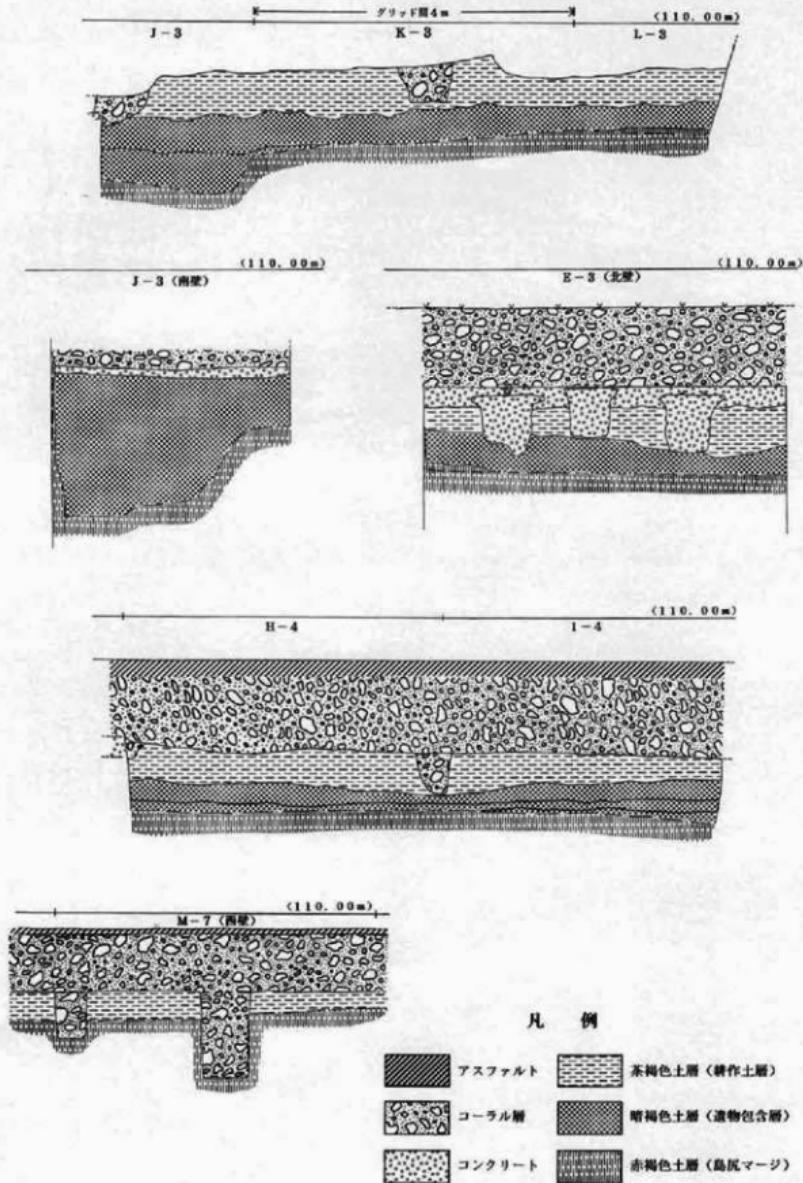


図8 層序実測図 (1)

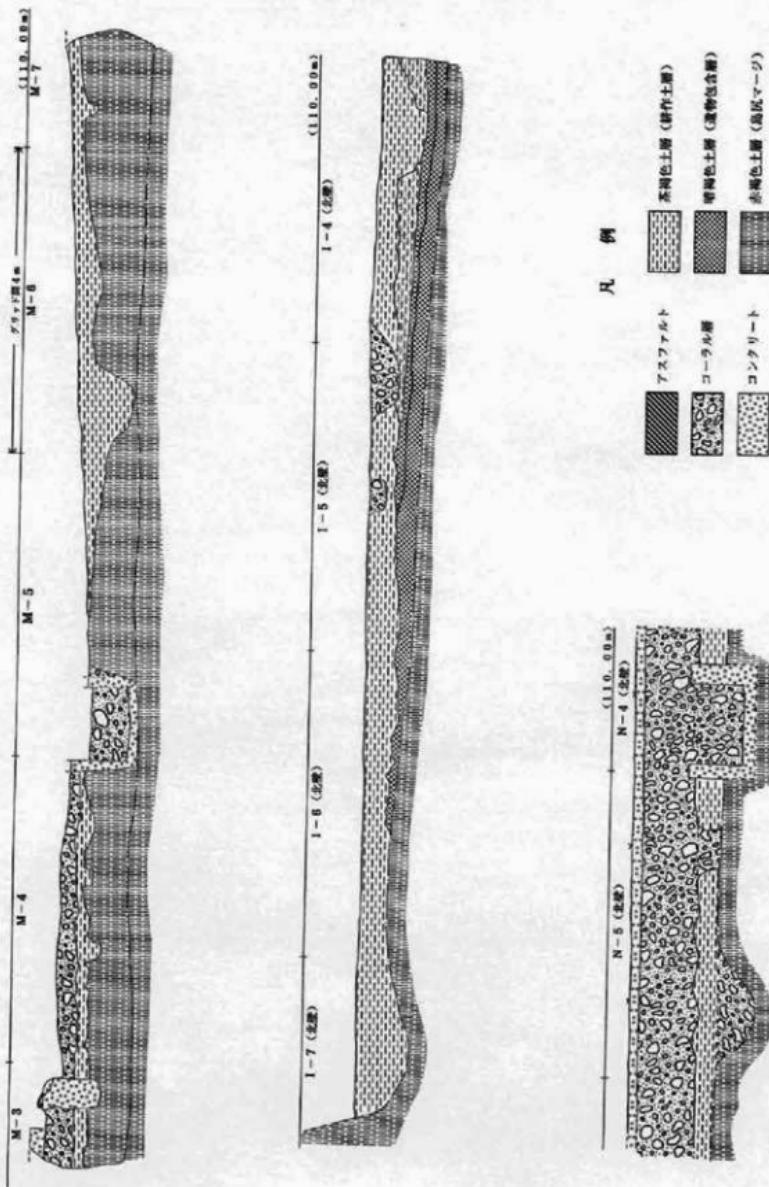


図 9 層序実測図 (2)

第4章 遺構

室川貝塚の崖上には、テーブル状の琉球石灰岩台地が広がっている。1981年に実施した沖縄市の遺跡詳細分布調査の報告書では、「仲宗根貝塚の形成を考慮すると、本貝塚も石灰岩台地上に住居が営んでいたことが考えられる。同台地上には建物が密集し、その存在を明らかにするのは困難であろう。」と予想した。

今回の記録保存発掘調査で二基の竪穴住居址と、長方形の柱穴群（約3×5m）が検出された。しかし、これらの遺構は耕作や戦中・戦後の整地作業によって上部が削られ、わずかに残された痕跡だけである。

戦後の客土・埋め土層・米軍コンセットのコンクリート土間を取り除く作業の終了が近づき、未搅乱の遺物包含層面の検出途中で遺構の存在を示す状況が観察された。グリッドN 4とグリッドO 6・O 7の2ヶ所で、土器・石器・石材が集中、他の部分より暗褐色土層が濃い。この時点で、仮に第1号竪穴住居址（グリッドN 4付近）・第2号竪穴住居址（グリッドO 6・O 7）と呼ぶことにした。ところが両者の間を貫くように使用中の道路があり、遺構の一部が道路部分に及んでいる事が明らかになった。

その結果、道路部分まで発掘範囲を広げ、遺構の全容を把握してから発掘作業を進めることになった。この結果、道路中心は上下水道の敷設工事などで両遺構検出面より深く掘り返され、完全に破壊されていることが明らかになった。ところが幸いなことに下水溝の敷設された道路端部は、深部まで工事が及んでなく遺構の残部を検出することができた。

なお、発掘調査もあと2、3日で終えようとしていた平成2年6月になると大雨が続き、連日のように発掘現場が水没した。大雨の影響は甚大で、並行して実施していた室川貝塚崖下地区の発掘現場でも、崖崩壊の前兆と判断される土砂崩れや落石が発生した。

1. 第1号竪穴住居址

遺構検出経過

馬上原遺跡記録保存発掘調査3日目の平成元年12月6日、米軍コンセット土間の縁の部分に、数個の石が約2m並んでいるのが見つかった。丁度、グリッドK 4とJ 4の境部。大きめの20cm大の琉球石灰岩などは、第3層の暗褐色土層に食いこんでいる。コンセット土間の下に遺構の存在が予想された。この米軍コンセットは、沖縄戦終了直後に建設されたようで、土間の下には第2層の茶褐色前の耕作土層と第3層暗褐色遺物包含層が確認された。コンクリートの土間は、約20cmの厚さで地中の梁部分は60cmもある。重機によるコンクリートの除去は、遺構を破壊する危険が強いと判断。人力によるコンクリート除去作業になった。

12月15日、L字形の配石が検出され、隅丸方形の竪穴住居址の一部と判断された。住居址の残りは、未発掘部の道路下に及んでいる。道路は使用中で、発掘を行うと隣接住民の通行を遮断しなければならない。また、発掘作業スケジュール全体にも大きな影響を与えるので、発掘調査の後半に集中的に実施することに決定。

平成2年5月9日、最後まで残しておいた道路部分の発掘を開始。5月29日、約2.0m×2.3mの隅丸方形に配石された造構全形を検出した。なお、北側の一部は米軍基地時代の排水溝敷設で掘削された可能性がある。竪穴は第3層暗褐色土層に掘りこまれ、土色による竪穴部と周辺の区別は不可能。竪穴の範囲内に土器・石材などの小片が、やや目立つ程度である。

配石によって竪穴のおよその形状は把握できたが、掘りこみ部と他の部分の区別が判然としない。発掘方法の検討を行った結果、竪穴内部の発掘を進め、炉址や焼土面を検出し、住居址床面の確認を目指した。竪穴内部5~7cmの深さで、炉址と考えられる焼土面検出。上層の耕作土層面との境部を均しながら掘り下げた。ところが10cm程の深さになると土器・

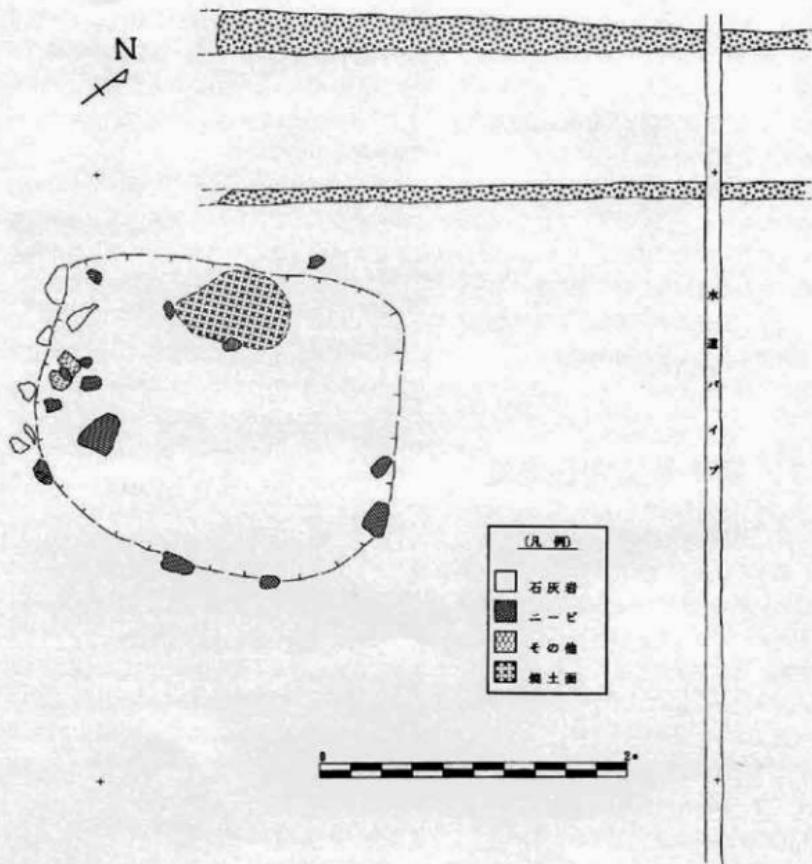


図10 第1号住居址検出状況図

石器片の出土数が急に減少する。以上の状況から床面は、第3層面から3~5cmの深さにあったのではないかと想定された。焼土面以外の部分は、床面を超えている可能性が強い。そこで10cm掘り下げたレベルで発掘作業を止め、遺構の平面実測を行った。

図41の第1号竪穴住居址内出土土器集成図で明らかのように、土器は沖縄貝塚時代の前期「伊波・荻堂式」と中期「宇佐浜式・仲原式」の二群に大別される。遺構の上部は17世紀頃に畑となり耕作によって搅乱破壊されている。配石プラン検出途中で出土した土器は、「宇佐浜式・仲原式」が圧倒的であった。ところが遺構内の深く搅乱された部分を除去するにつれ、「伊波・荻堂式」の出土数が増えた。以上の状況から第1号竪穴住居址は、宇佐浜式から仲原式（縄文晩期～弥生前期）の遺構と判断される。

2. 第2号竪穴住居址

遺構検出経過

平成2年3月7日、グリッドN6で遺構の存在を予想させる暗褐色土層部を確認。発掘範囲を広げ、全形を確認することに決定。5月22日、赤褐色土層面に竪穴住居址プランが検出された。30日、竪穴内に焼土面検出。焼土面に暗褐色土層から掘られたビットを検出。31日、第2号竪穴住居址の発掘をほぼ終了。竪穴部の深さは10~15cmと浅く、遺構の上部は戦前に耕作され下部だけが残されている。6月2日、住居址平面実測作業と観察畦部の発掘終了。

遺構内出土土器

本住居址の土器も第1号竪穴住居址と同様に、沖縄貝塚時代前期と中期の二群に大別される。第1号竪穴住居址では中期土器に仲原式が確認されたが、第2号住居址は宇佐浜式に限定される。沖縄貝塚時代前期の伊波・荻堂式は、第3層からの混入と考えられる。

3. 長方形柱穴群

グリッドD6を中心とする一帯で、沖縄貝塚時代前期の柱穴群が検出された。ここは発掘対象範囲の最も西方で、地山の島尻マージの上面まで掘削されていた。赤褐色土面には、米軍基地建設当初のドラム缶埋設の排水溝と40を超える柱穴状の穴が検出された。

これらの穴の土を調べると、第3層暗褐色土と石灰岩粒混じりの茶褐色土がある。石灰岩粒は、米軍基地建設後のコーラル舗装に由来するもので、一部の穴の中からビニール、ガラス片、鉄片などが検出された。

内部が第3層暗褐色土の充填した穴を掘ると、5~10mm前後の土器粒が出土する例が11の柱穴で確認された。文様の有無は確認できない例が多いが、胎土は沖縄貝塚時代前期の伊波・荻堂式と同じである。

これらの柱穴は、約7m×4mの南北に長い長方形となっている。中軸線上に2本の支柱と予想される穴、南側には焼土粒が大量に出土した径約80cmの土壤状の穴が検出された。土壤状穴の検出面には多数の炭粒や焼土粒が見られ、炉址の可能性が予想された。しかし、

穴の内面に焼けた部分は確認されなかった。

この一連の柱穴は規則的な配置で検出され、明らかに建物跡と判断される。しかし、残念なことに床面まで削られ、残された部分は柱穴だけである。柱穴の掘られた時期は、出土した土器片から沖縄貝塚時代前期の伊波・荻堂式の頃と予想される。しかし、これより年代が下る可能性も考慮しなければならない。

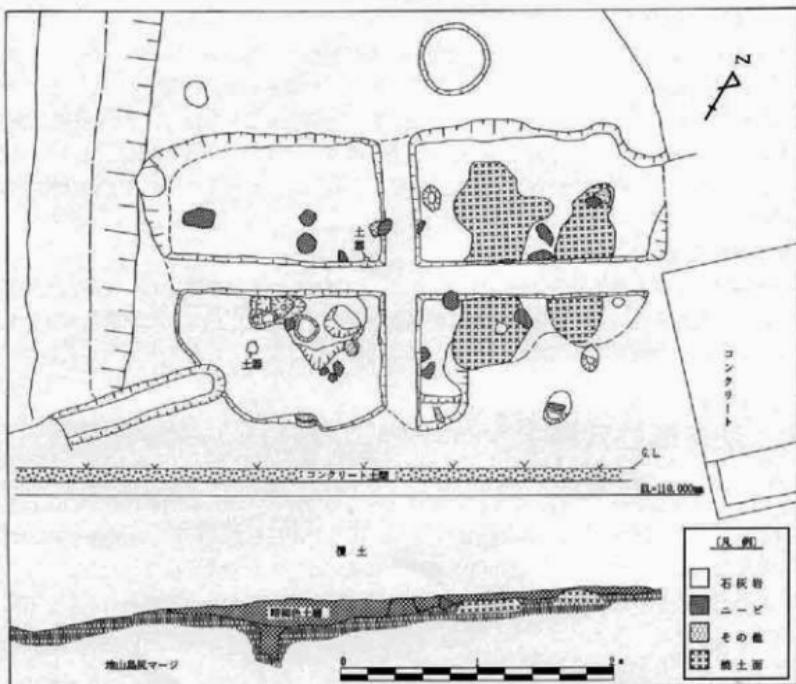


図11 第2号住居址検出状況図

石器片の出土数が急に減少する。以上の状況から床面は、第3層面から3~5cmの深さにあったのではないかと想定された。焼土面以外の部分は、床面を超えている可能性が強い。そこで10cm掘り下げたレベルで発掘作業を止め、遺構の平面実測を行った。

図41の第1号竪穴住居址内出土土器集成図で明らかのように、土器は沖縄貝塚時代の前期「伊波・荻堂式」と中期「宇佐浜式・仲原式」の二群に大別される。遺構の上部は17世紀頃に畑となり耕作によって搅乱破壊されている。配石プラン検出途中で出土した土器は、「宇佐浜式・仲原式」が圧倒的であった。ところが遺構内の深く搅乱された部分を除去するにつれ、「伊波・荻堂式」の出土数が増えた。以上の状況から第1号竪穴住居址は、宇佐浜式から仲原式（縄文晩期~弥生前期）の遺構と判断される。

2. 第2号竪穴住居址

遺構検出経過

平成2年3月7日、グリッドN 6で遺構の存在を予想させる暗褐色土層部を確認。発掘範囲を広げ、全形を確認することに決定。5月22日、赤褐色土層面に竪穴住居址プランが検出された。30日、竪穴内に焼土面検出。焼土面に暗褐色土層から掘られたビットを検出。31日、第2号竪穴住居址の発掘をほぼ終了。竪穴部の深さは10~15cmと浅く、遺構の上部は戦前に耕作され下部だけが残されている。6月2日、住居址平面実測作業と観察畦部の発掘終了。

遺構内出土土器

本住居址の土器も第1号竪穴住居址と同様に、沖縄貝塚時代前期と中期の二群に大別される。第1号竪穴住居址では中期土器に仲原式が確認されたが、第2号住居址は宇佐浜式に限定される。沖縄貝塚時代前期の伊波・荻堂式は、第3層からの混入と考えられる。

3. 長方形柱穴群

グリッドD 6を中心とする一帯で、沖縄貝塚時代前期の柱穴群が検出された。ここは発掘対象範囲の最も西方で、地山の島尻マージの上面まで掘削されていた。赤褐色土面には、米軍基地建設当初のドラム缶埋設の排水溝と40を超える柱穴状の穴が検出された。

これらの穴の土を調べると、第3層暗褐色土と石灰岩粒混じりの茶褐色土がある。石灰岩粒は、米軍基地建設後のコーラル舗装に由来するもので、一部の穴の中からビニール、ガラス片、鉄片などが検出された。

内部が第3層暗褐色土の充填した穴を掘ると、5~10mm前後の土器粒が出土する例が11の柱穴で確認された。文様の有無は確認できない例が多いが、胎土は沖縄貝塚時代前期の伊波・荻堂式と同じである。

これらの柱穴は、約7m×4mの南北に長い長方形となっている。中軸線上に2本の支柱と予想される穴、南側には焼土粒が大量に出土した径約80cmの土壤状の穴が検出された。土壤状穴の検出面には多数の炭粒や焼土粒が見られ、炉址の可能性が予想された。しかし、

穴の内面に焼けた部分は確認されなかった。

この一連の柱穴は規則的な配置で検出され、明らかに建物跡と判断される。しかし、残念なことに床面まで削られ、残された部分は柱穴だけである。柱穴の掘られた時期は、出土した土器片から沖縄貝塚時代前期の伊波・荻窓式の頃と予想される。しかし、これより年代が下る可能性も考慮しなければならない。

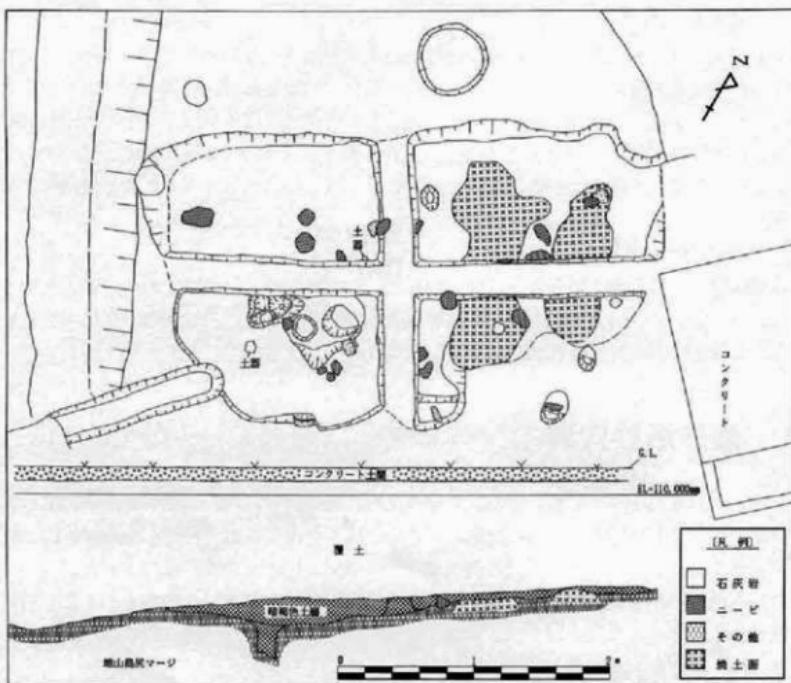
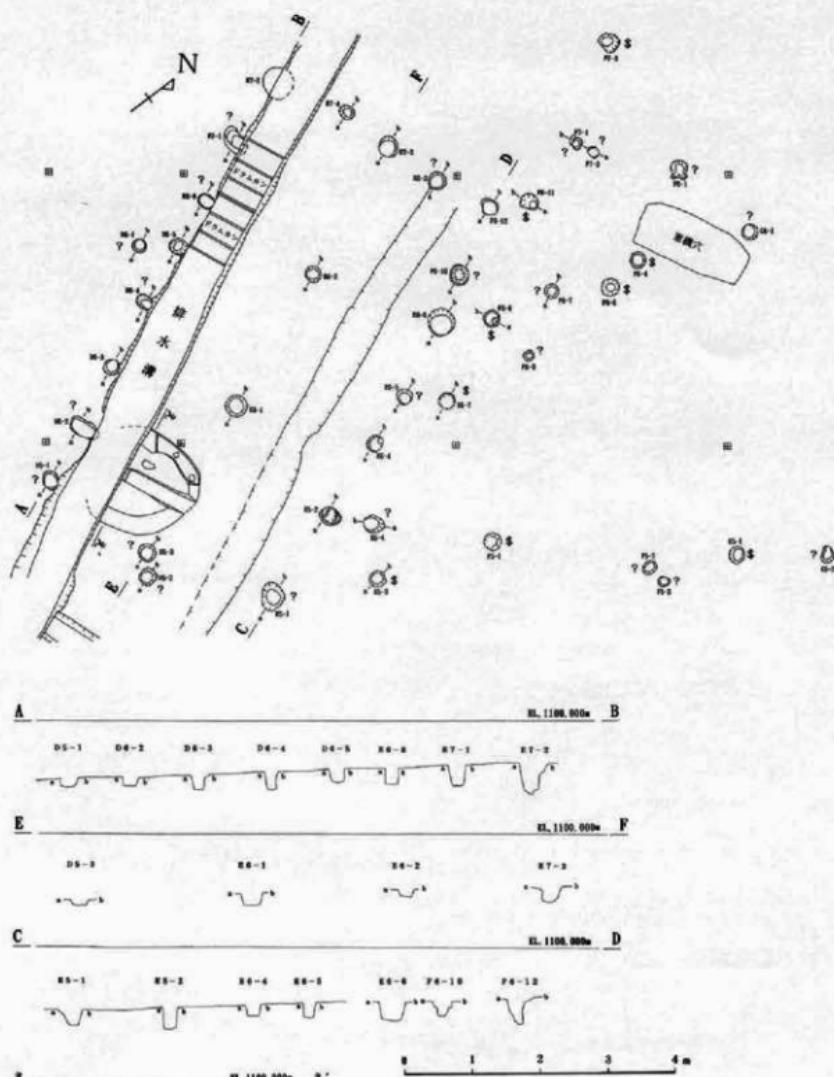
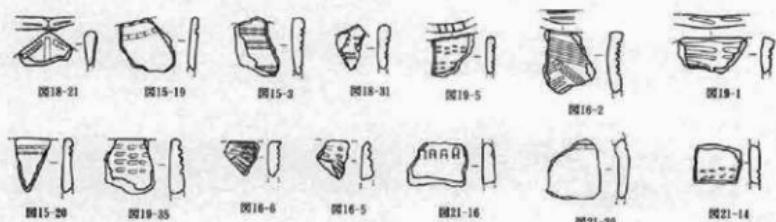
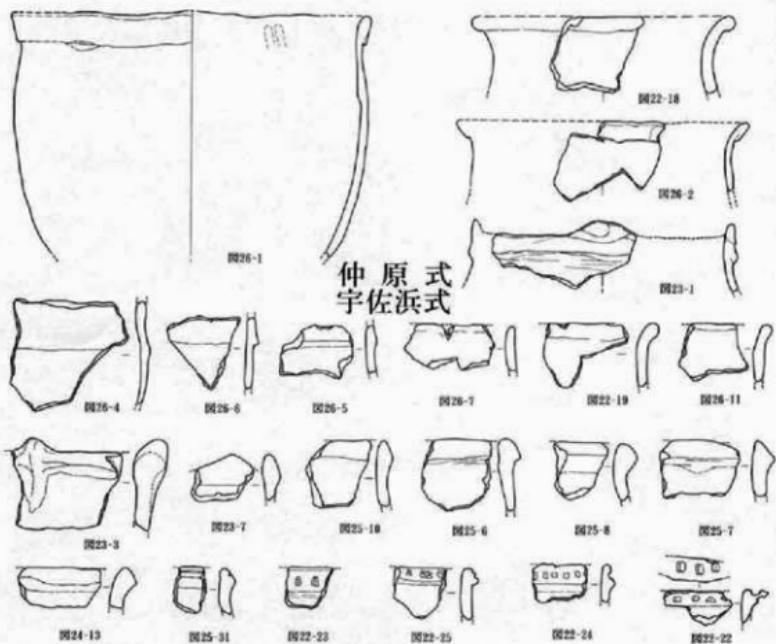


図11 第2号住居址検出状況図



凡例
 ? - 出土遺物なし (貝塚時代)
 \$ - 未発見のもの (1945-1962)
 記号なし - 貝塚時代 (縄文時代後期)

図12 長方形柱穴群実測図



伊波・荻堂式



室川下層式



图12-5

土器集成図 1

(第1号堅穴住居)

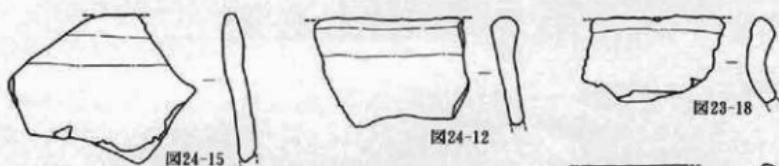


図24-15

図24-12

図23-18



図25-35

図24-10

図24-14

図23-15

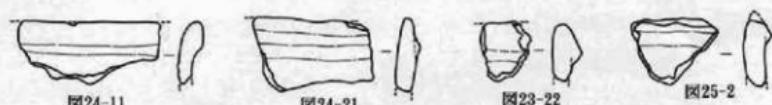


図24-11

図24-21

図23-22

図25-2

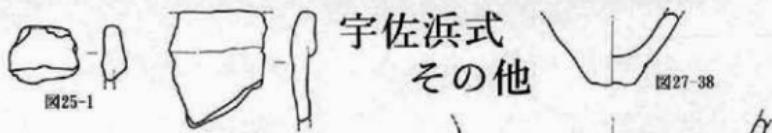


図25-1

図24-23

宇佐浜式
その他

図27-38

図24-22

図25-33

図22-14



図27-41

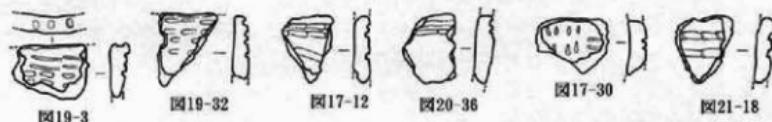


図19-3

図19-32

図17-12

図20-36

図17-30

図21-18

伊波・荻堂式

室川下層式

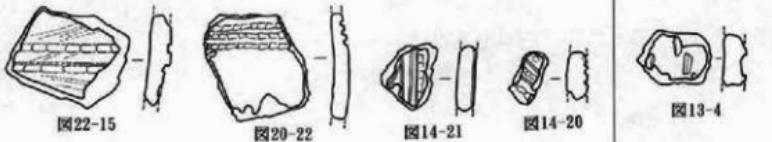


図22-15

図20-22

図14-21

図14-20

図13-4

土器集成図2

(第2号堅穴住居)

第5章 出土遺物

第1層の埋め土・搅乱層は、戦中から戦後の層である。砲弾片、銃弾、鉄条網や埋設されたまま放置された通信線や電線などのケーブルなどが掘り出された。これらの戦中・戦後の出土物はメモ程度に止め、第1層中に混入した土器、石器などを拾い上げるだけにした。また、第1層は重機を使用して一気に除去し、全グリッドの遺物を一括した。第2層は戦前の耕作土層で、稀に1cm以下の壺屋焼陶器片が検出される程度で、ほぼ無遺物層と捉えてよい状況である。

第3層（暗褐色土層）での出土遺物は土器・石器・石材に限られ、貝・獸魚骨などの食料残滓は1点も検出されていない。これは隣接する室川貝塚崖下地区で、貝・獸魚骨が大量に出土した状況と際立った対比を見せてている。

第3層中には石灰岩の混入がまったく見られない。石灰岩は堅穴に配石された径10cm以上のサイズだけで、層中には微粒も確認できない。本遺跡は琉球石灰岩台地上に形成され、崖縁には石灰岩が突出している。グリッドによっては、岩から数メートルの距離しかない。本来なら大量にあるはずの石灰岩粒も貝殻や骨などのように風化し、溶けてしまったのであろう。

1. 土器

土器は第1号堅穴住居址・2号堅穴住居址と、その周辺のK4・K5の2グリッドで集中的に出土した。なお、2号堅穴住居址は掘削を免れた遺構内だけで、周辺は第1層埋め土・搅乱層の下は、赤褐色土の地山である。ここで出土した土器片は、本遺跡では大き目の5cm以上の破片が多く、器面の保存状況が良好な資料が多い。しかし、その他で出土した土器片の大半が風化が著しく、3cm以下の小片が大半を占めている。器面の保存状況も劣悪で、文様の有無さえ不明な例も多い。

多くの型式が出土するが、伊波・荻堂式が約50%、宇佐浜式が約30%を占めている。その他の型式の出土数は少ない。当初、各型式のグリッド・型式別出土表を作成しようと試みた。しかし、グリッド総数が50を超える。また、ほとんどのグリッドは、型式分類対象となる資料（口縁・底部・有文破片など）が0～数点となる。これでは空欄の多い表に紙数を費やすことになるので、本報告では割愛した。

このような状況の中で、K5グリッドの第3層暗褐色土層は、唯一の例外で宇佐浜式・仲原式が上部に限られ、伊波・荻堂式に後続する縄年上の位置を追補する結果が得られた。

(1) 室川下層式

室川下層式の土器片は、厚さ10～12mmと厚い。胎土中に1～3mmのチャートあるいは石英の粒が含まれる。伊波・荻堂式などの土器がザラザラした器面であるのに対し、やや照りのある重厚な質感で一見して他型式の土器片と区別される。出土した全破片は28点が確認されたが、風化し施文の有無が不明なものが多い。器面の保存が良好な資料、図13-1・

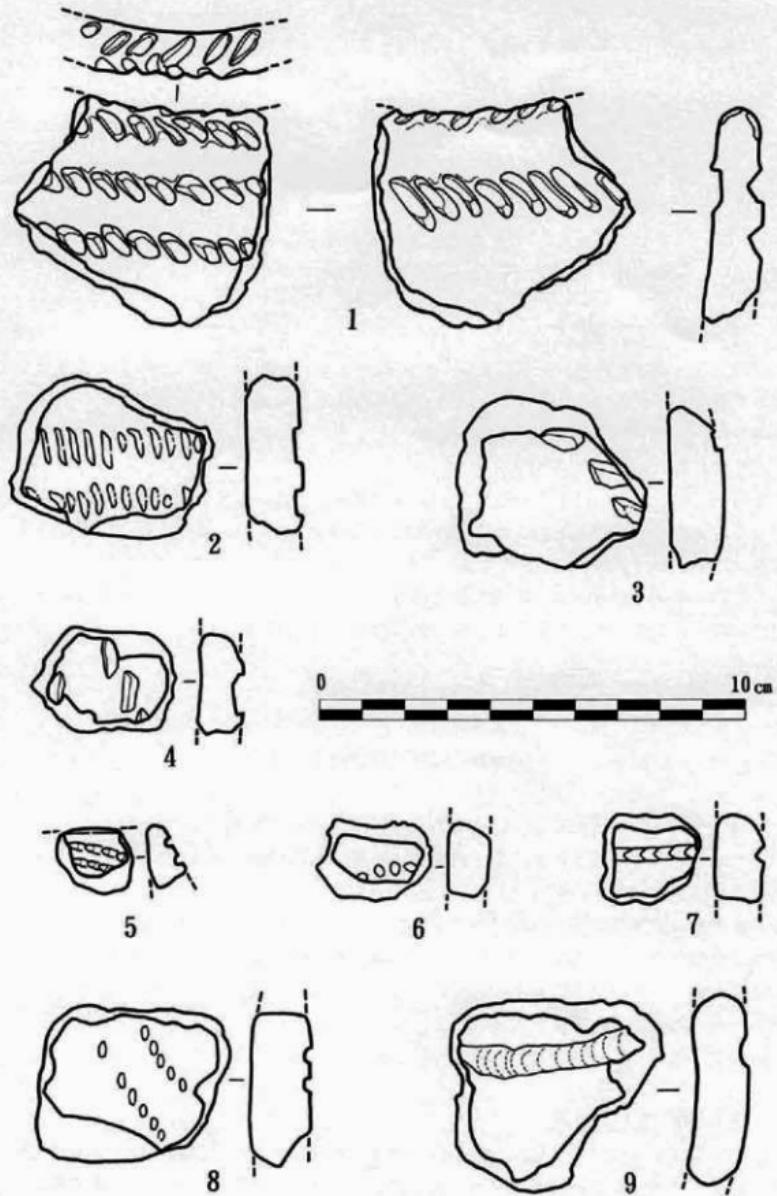


図13 室川下層式

2の2点は条痕などは撫で消され丹念に仕上げられている。

施文の状況から、図13-1～4と5～9の2タイプに分けられる。前者は、竹籠のようなもので口縁から底部方向に押し下げるよう刺突。後者は「いわゆる貝刻文」で、ギザギザになった貝の縁などを押したような文様である。

(2) 面縄前庭式

図14-1～4が確認されたが、1と2は一個体と判断されるので3点となる。チャートあるいは石英の混和材も約0.5mm大と精選され、2mmほどの粒が散在する程度。この胎土の状況は、後述の「宇宿下層式など」と概括したグループと共通する。

(3) 宇宿下層式など

図14-5～28は、沖縄貝塚時代前期の伊波式～大山式土器の一般的な施文具と異なる文様の土器である。器面を観察すると1～3mmの石英あるいはチャートがわずかに散在する精選された胎土である。後述の伊波・荻堂式とは施文具と胎土が異なるので、別グループとしてまとめた。

先端が三角状あるいは丸みを帯びた施文具を用い、刺突による列点や押引ながら連続的に刻んだ文様が特徴である。この文様と沈線を組み合わせたり、沈線だけと3種がある。なお、このグループは、「奄美系土器」とも呼ばれていた。

本遺跡で出土した資料は、器面の仕上げも観察できないほどに摩耗した小破片がほとんどである。とりあえず、下記のように大別した。

- ①図14-5～17刺突列点文・押引連続刻文
- ②図14-18～24・17刺突列点文・押引連続刻文+沈線
- ③図14-25・27・28沈線(※25は②の可能性あり)

(4) 伊波・荻堂式

本遺跡の主体を占め、他型式を圧倒する出土量である。胎土には1～3mm大の石英あるいはチャート粒が多量に混入され、粒の大きさも均一でない。先端が叉状・半截竹管・割り箸状などの施文具が用いられている。伊波式と荻堂式は同一系統の土器と考えられる。器形は伊波式が口縁が外反気味、荻堂式は胴が張る傾向がある。しかし、本遺跡では器形・文様構成の判る資料は少なく、小片では両者の分類是不可能である。

分類可能と考えられる例としては

伊波式：図15・図16(図15-20は除く) 荻堂式：図18-1～3・6・9・10・33

(5) 肥厚口縁群

本遺跡では荻堂式に続く型式(大山式・カヤウチバンタ式・面縄西洞式など)が欠落しているように思われる。崖下の室川貝塚では、大山式以降に伊波・荻堂式以来の混和材とは異なり、石灰質の粒を混ぜたりするなどの混乱が見られる。この期の土器は、胎土と混和材の状況で3種に大別可能と考える。



図14 面繩前庭式・宇宿下層式など

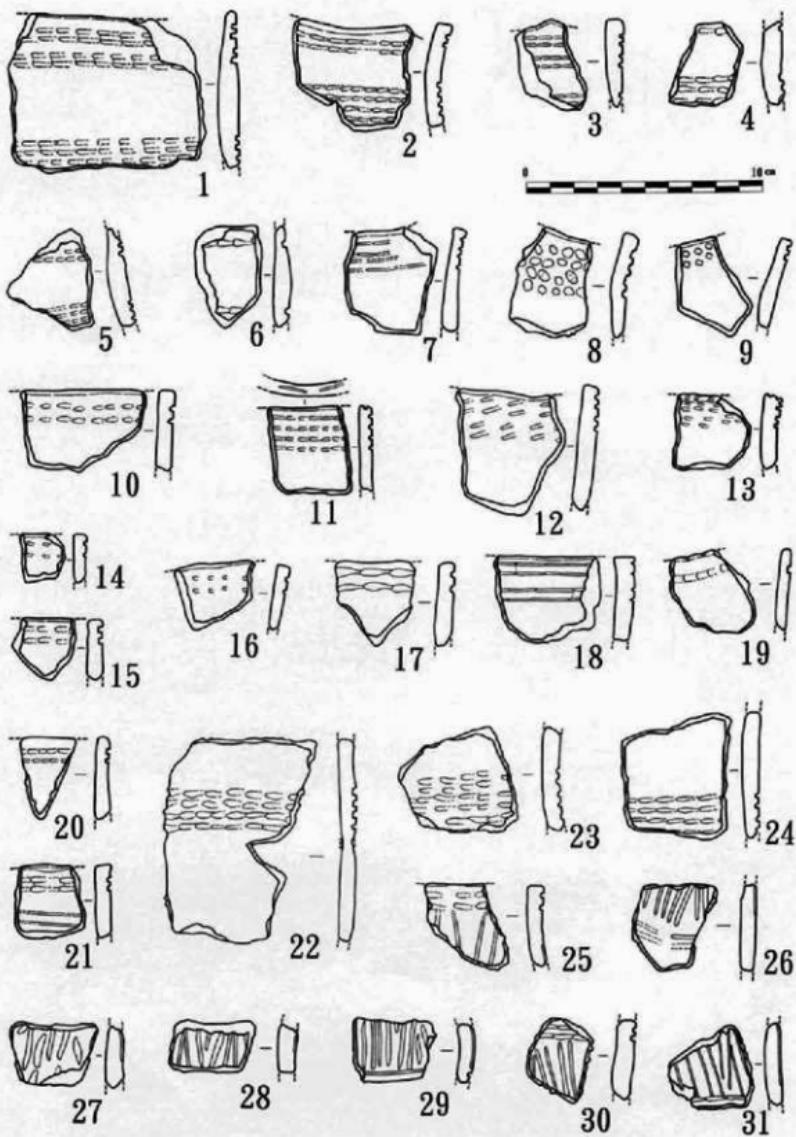


图15 伊波式

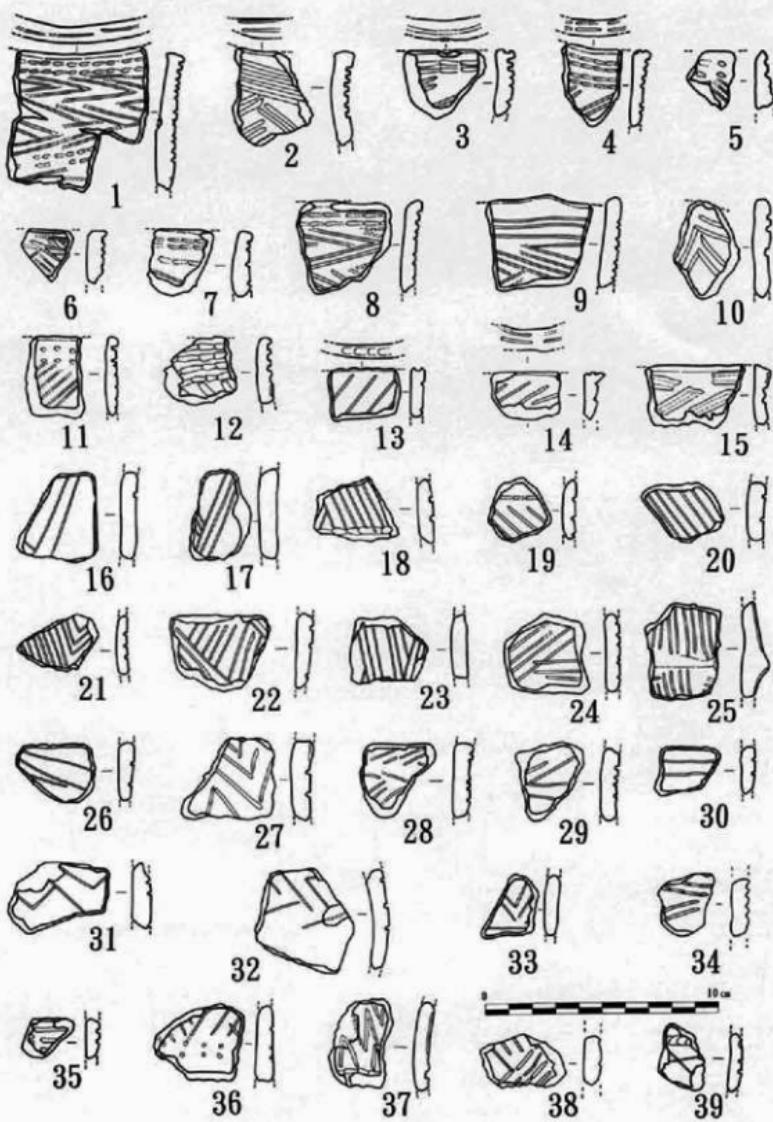


図16 伊波式

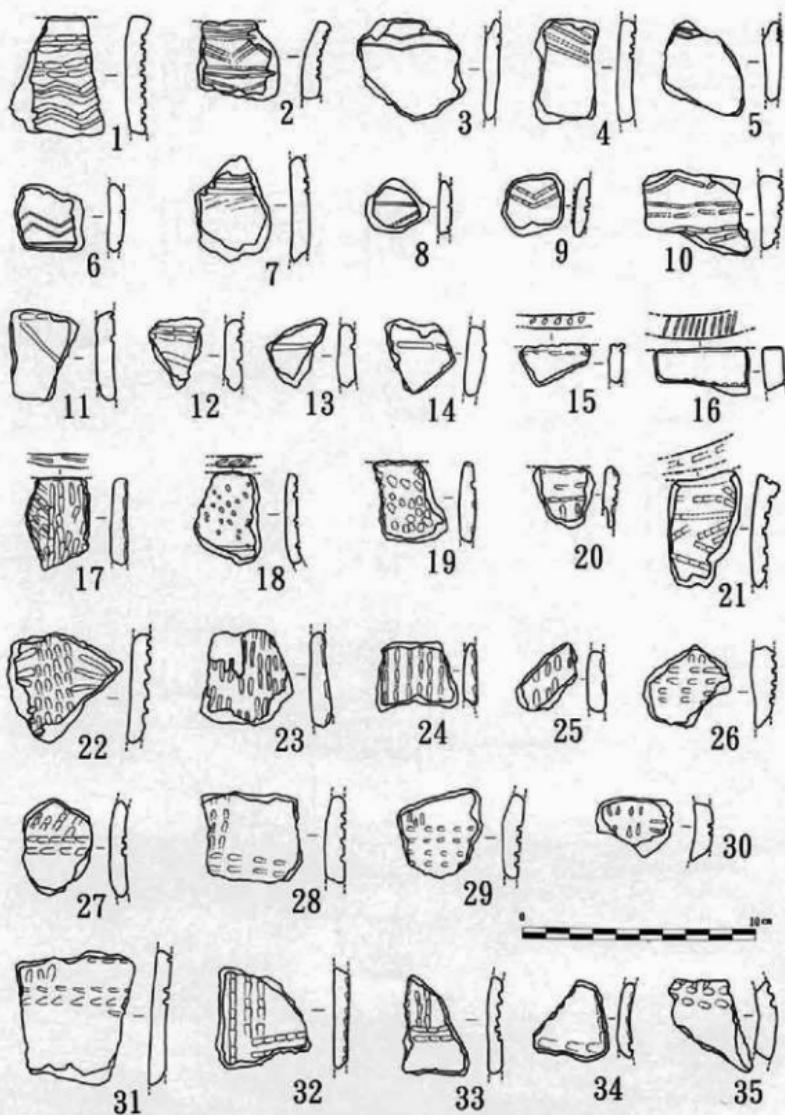


図17 伊波・荻堂式

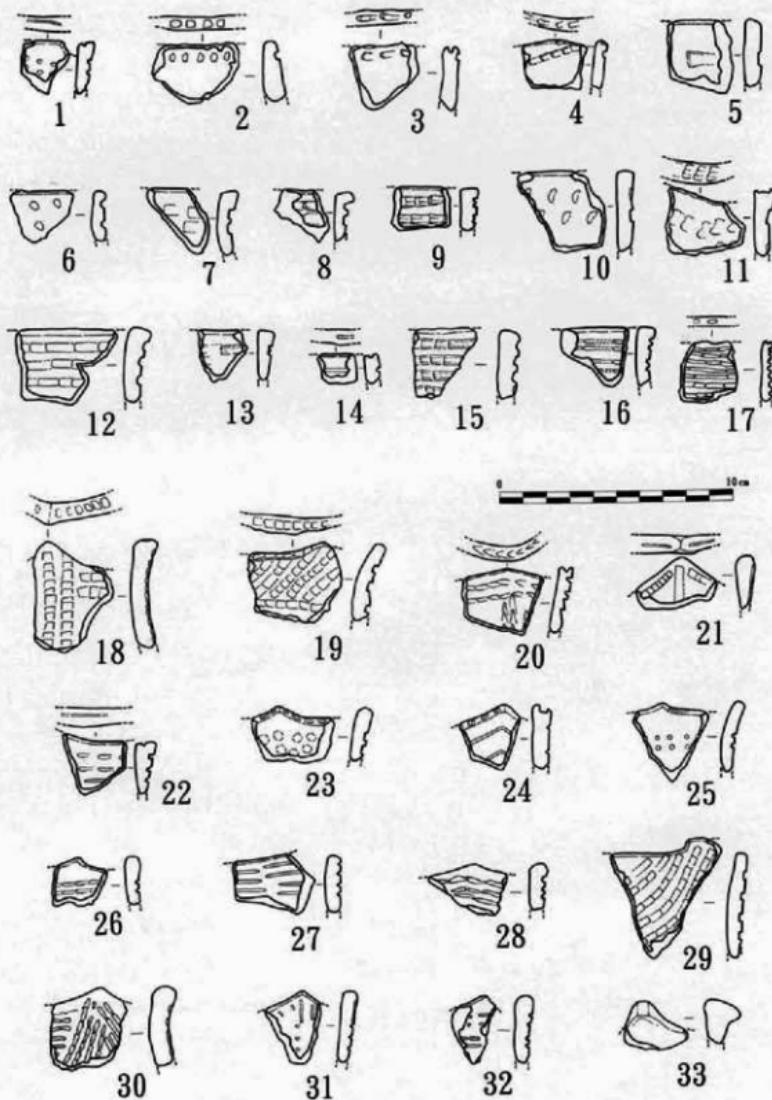


図18 伊波・荻堂式

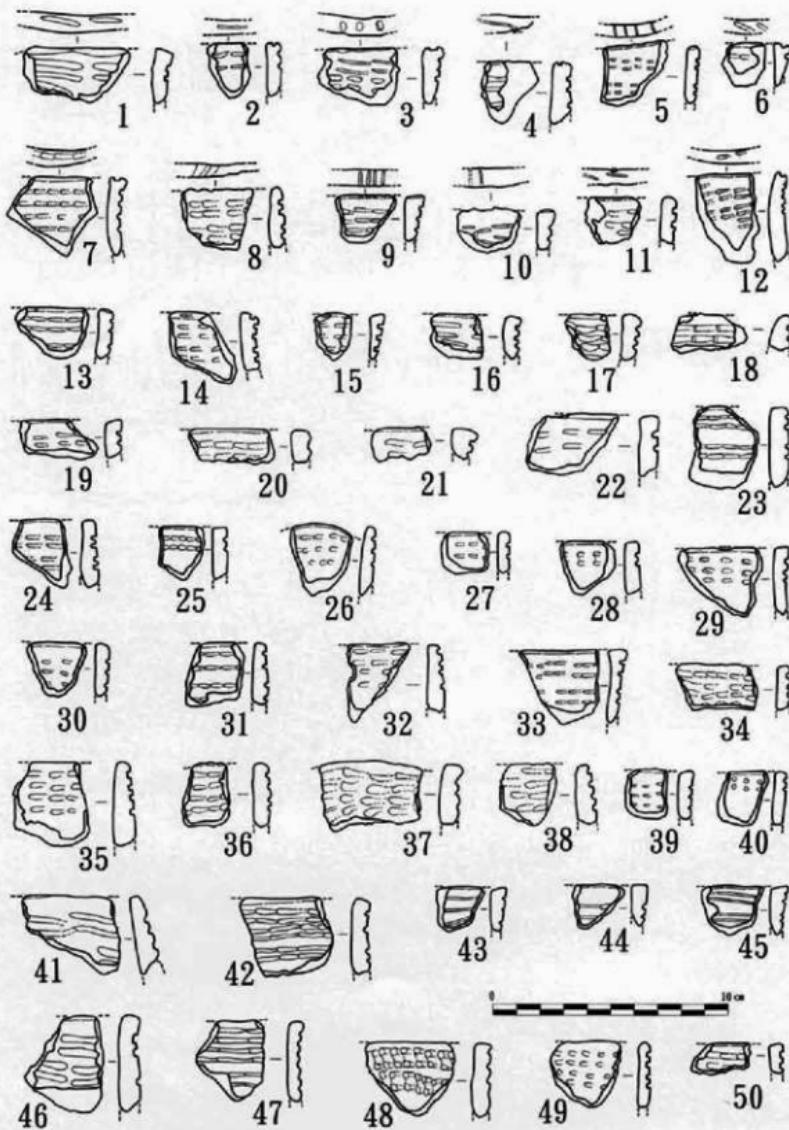


図19 伊波・荻堂式

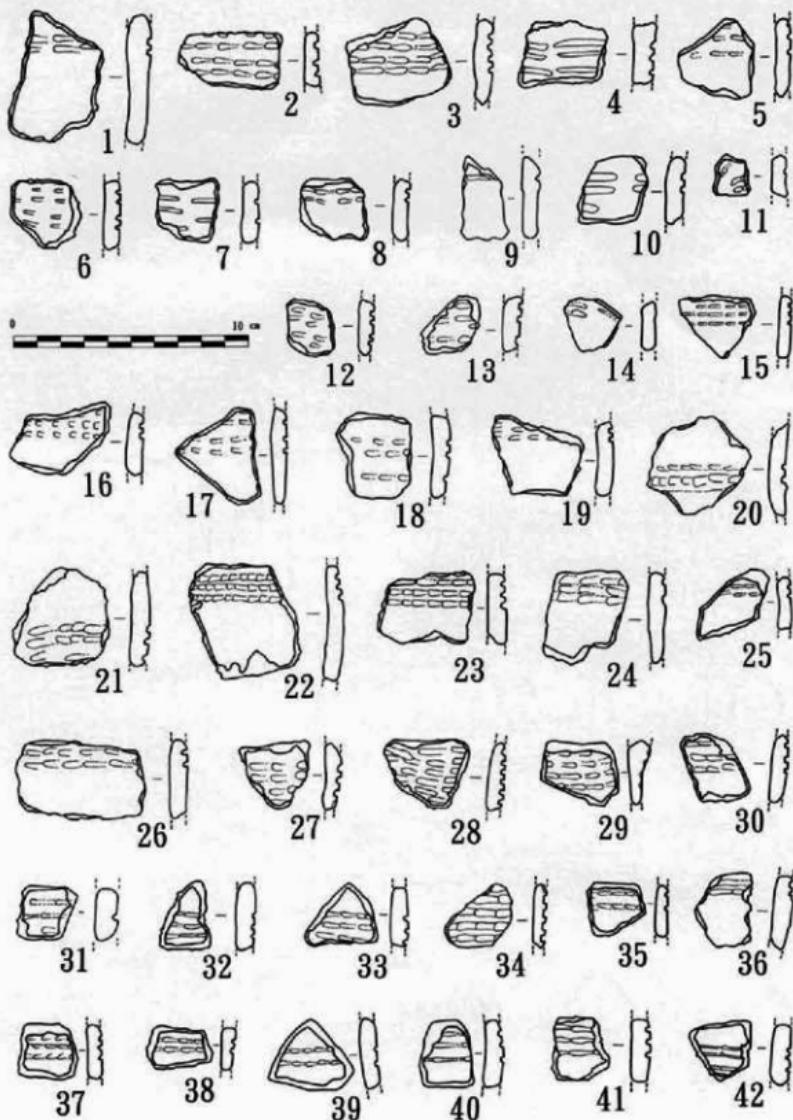


図20 伊波・荻堂式

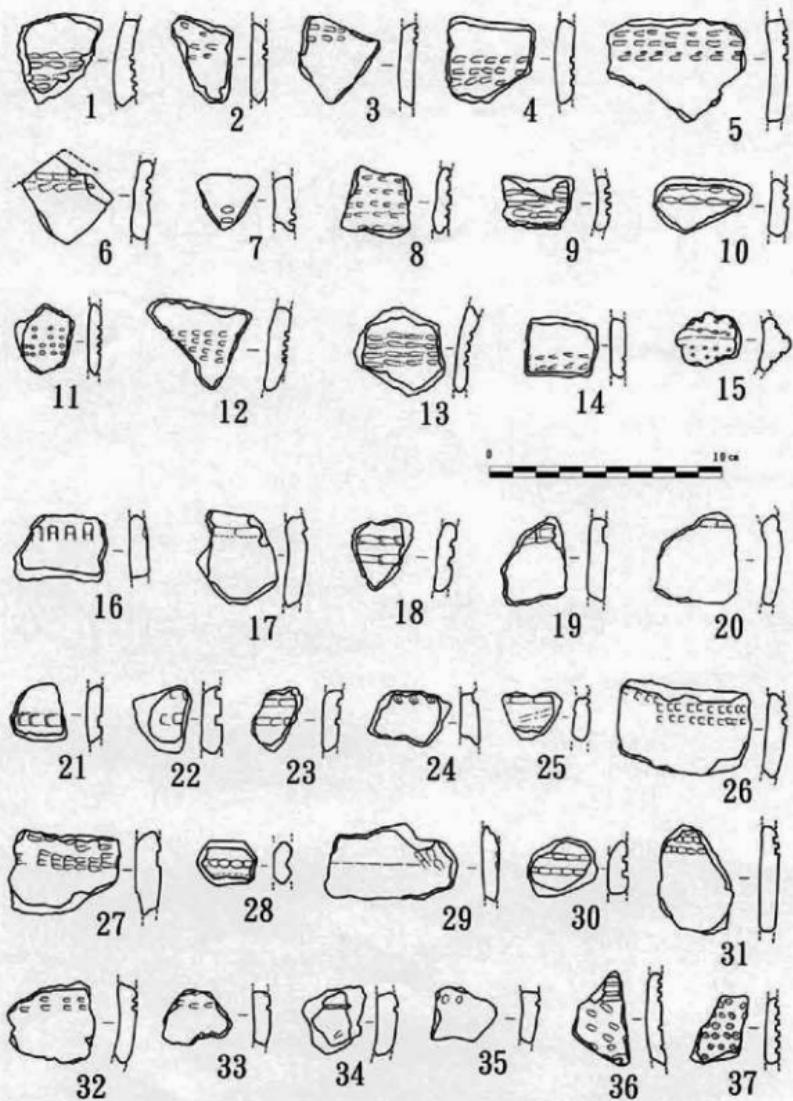


図21 伊波・荻堂式

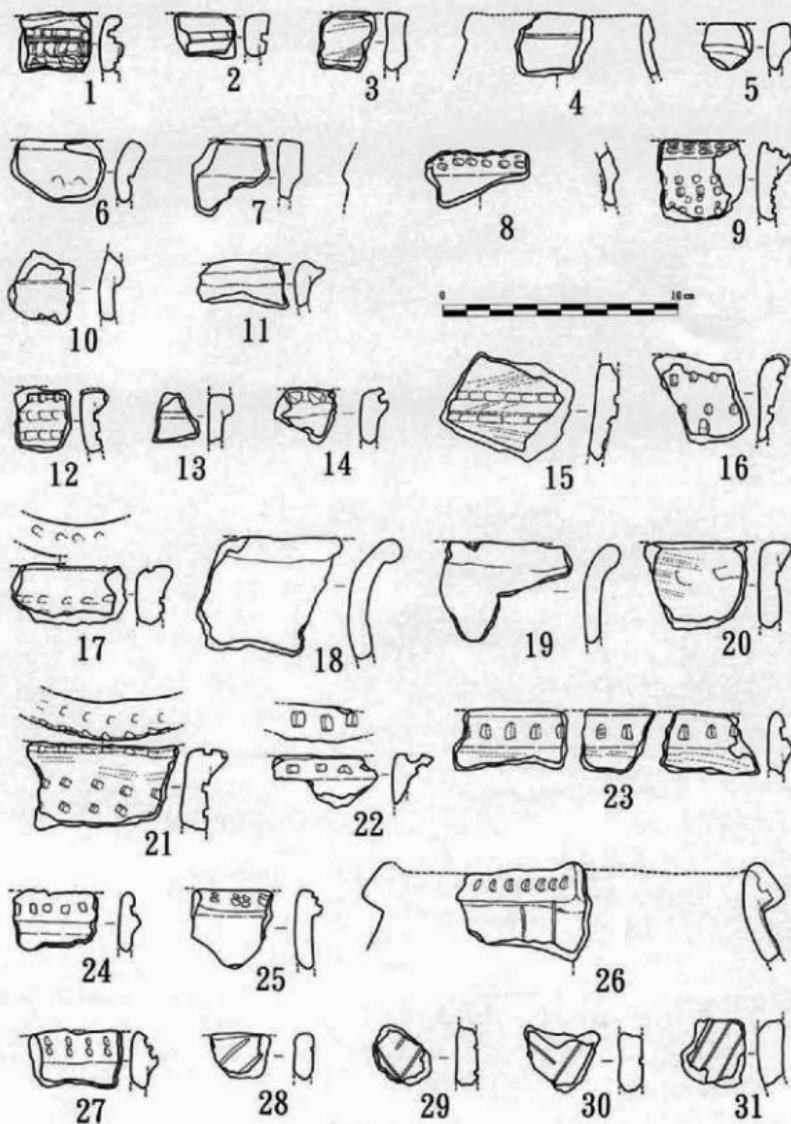


図22 大山式・肥厚口縁土器・宇佐浜式

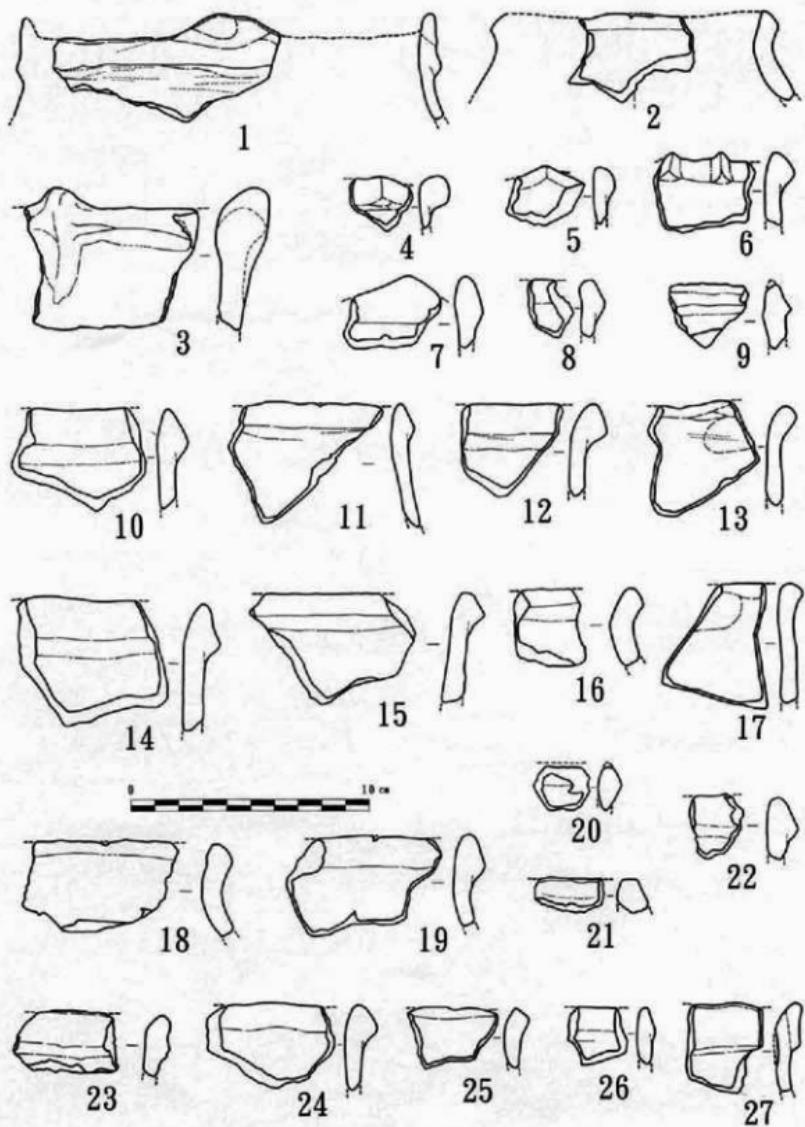


図23 宇佐浜式

A : 石英・チャート+石灰質粒

大山式あたりから胎土中に石灰質の粒が含まれる例が増加する。この石灰質の粒が溶け、器面に小孔が点在する例が増える（図22-1・10・12・15・16）。この大山式・カヤウチパンタ式の土器片が極端に少ない。無文の胴部片を検討してもほとんど見当たらない。

B : 石灰質粒主体

混和材が石灰質（二枚貝を碎いた可能性もある）主体の土器が登場する。これは器面一面が小孔で、「アバタ土器」などと通称され、「室川上層式」と型式名を与えられているが、カヤウチパンタ式・宇佐浜式・仲原式などの型式にも見られる（図22-21～24など）。

C : 石英あるいはチャート主体

混和材に石英あるいはチャートを主とする場合、伊波・荻堂式の粒が角張っているのに対し、肥厚口縁グループでは円粒となっている（図22-18・19、図25-30など）。

(6) 宇佐浜式

宇佐浜式は伊波・荻堂式について出土量が多い。伊波・荻堂式が広範囲で出土するのに対し、宇佐浜式は第1号・第2号竪穴住居址とグリッドK4に限られる。その他での出土はグリッドK5の柱穴状ピットで出土した一点だけである。また、5cmを越える大きめの破片を見ると、第2号竪穴住居址の出土が際立っている。

第1号竪穴住居址（グリッドL4）に接するグリッドK4の宇佐浜式の出土状況は興味深い。宇佐浜式以外の型式との割合を見ると、第3層暗褐色土層0～10cmで4割強、10～40cmでは出土なし、最深部の40～50cmで約7割となっている。第3層0～10cmを除くと、伊波・荻堂式と宇佐浜式の土器編年が逆転したような出土状況となっている。

ところがグリッド第1号住居址の竪穴遺構から1m程の距離しかないK5では、宇佐浜式は僅か一箇しか出土していない。同グリッドでは第3層暗褐色土層が、上部と下部に分けられた。伊波・荻堂式に続く大山式・肥厚口縁・仲原式などは、上部に限られ下部では出土していない。ここでは従来の土器編年を追補する結果が得られている。

グリッドK4の第3層40～50cmは、第1号竪穴住居址検出の深さと一致する。同住居址は第3層暗褐色土層中に掘り込まれ、辛うじて竪穴壁の配石によって遺構の存在が確認された。検出された竪穴部だけで生活するには、あまりにも狭い。実際の住居はもっと広くグリッドK4にまで及んでいたものと予想され、その上部が米軍施設建設のときに掘削され、床面近くだけが残されているのを見落とした結果ではないかと考えられる。

なお、宇佐浜式の中には、1mm前後と粒のそろった球状石英砂を混和材とし、整形・仕上げの良好な土器が見られる（図23-6・14・15、図24-2など）。

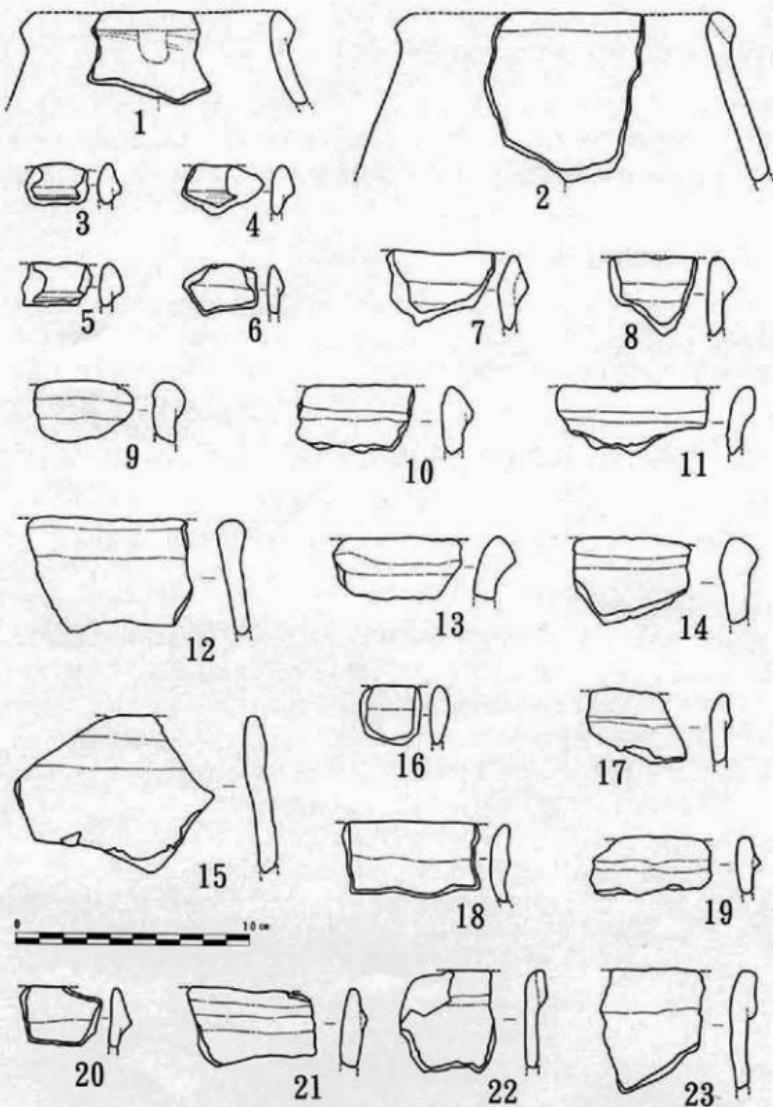


図24 宇佐浜式

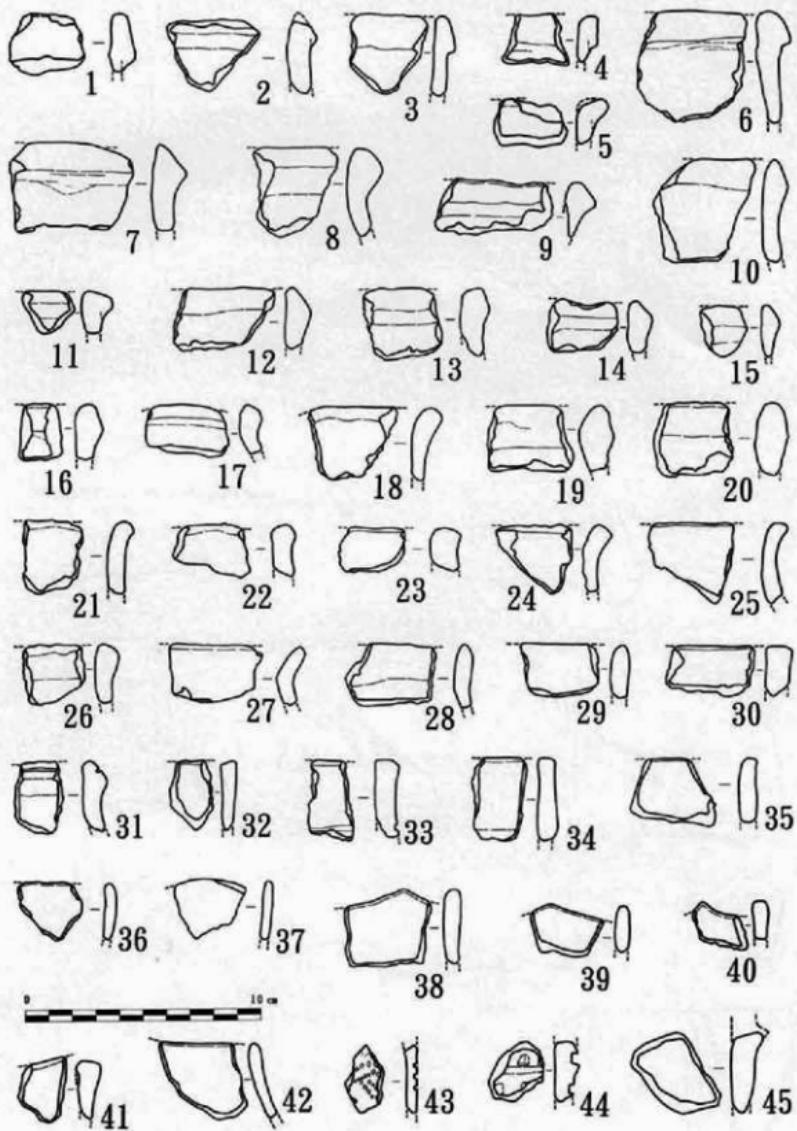


図25 宇佐浜式・仲原式

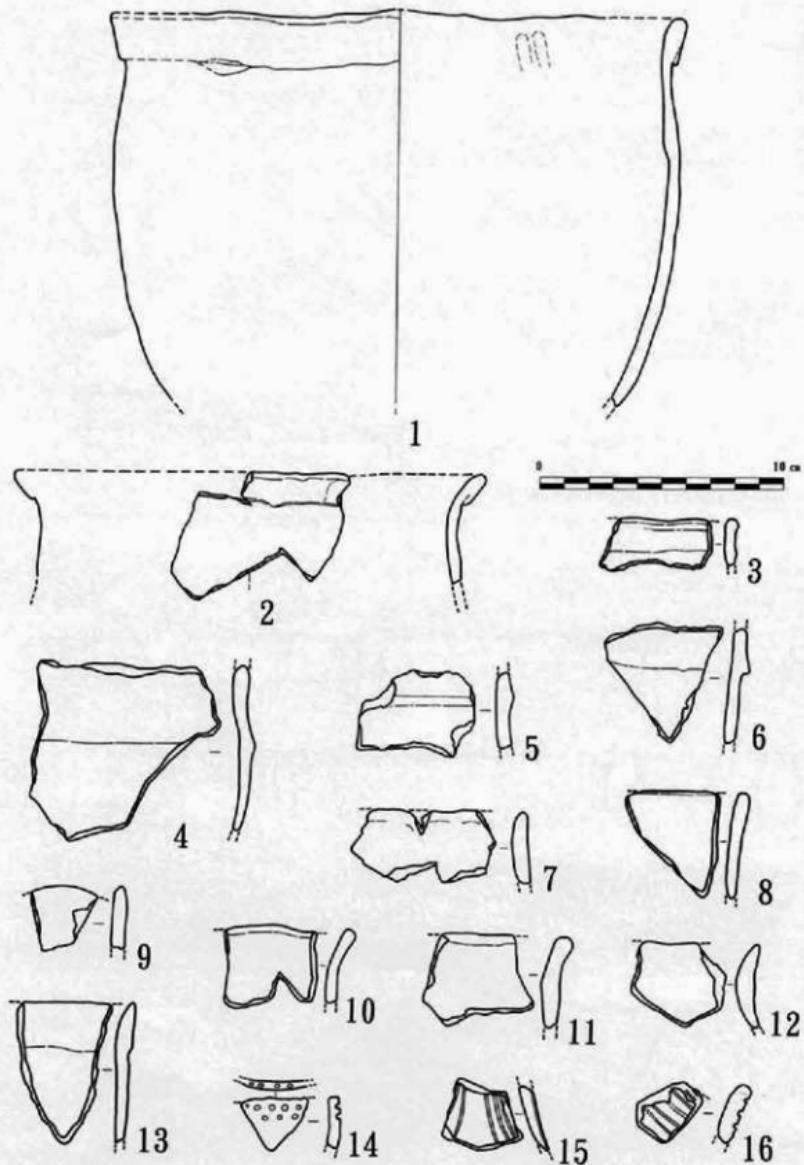


図26 仲原式・その他

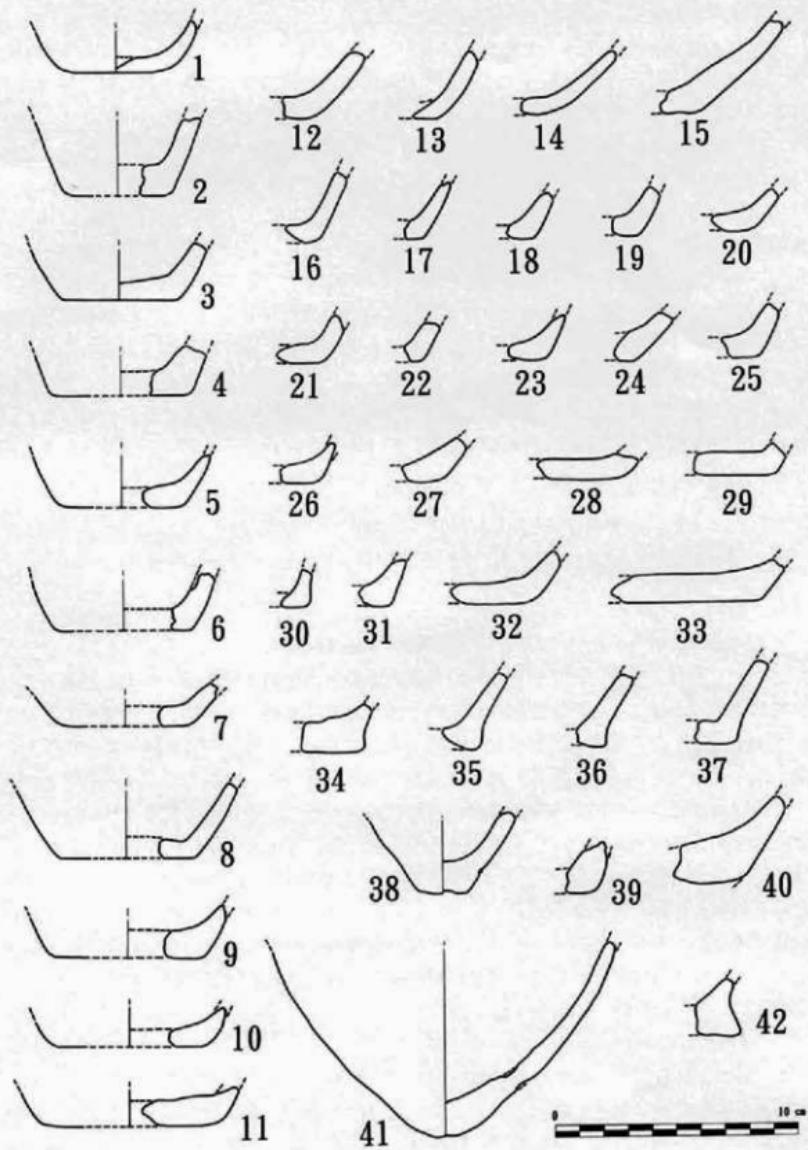


図27 底部

(7) 仲原式

仲原式は第1号竪穴住居址で集中的に出土し、その周囲のグリッドK4などにも多い。図26-1の土器片が本遺跡最大で、第1号竪穴住居址の屋内炉と推定される焼土面の直上で出土した。第2号竪穴住居址では、わずかに1点だけが出土しているだけである。

(8) フェンサ下層式とグスク時代土器

本遺跡ではフェンサ下層式とグスク時代土器の小片も出土している。しかし、口縁・底部などの図示できる資料は得られていない。第2号竪穴住居址から20mほどの距離しかない崖下地区で、隣接する室川貝塚崖下地区的発掘調査では、「くびれ平底」と通称される特徴的なフェンサ下層式の底部が55点得られている。この中には胎土中に0.5mmほどの赤褐色粒が混入される例が多い。この胎土に赤褐色粒を含む土器片が10数点ある。

グスク時代土器は室川貝塚の全地区で出土が少ない。本遺跡では数点の破片がグスク時代の土器と確認できた。グスク時代の土器は、底から胴部への立ち上がり部分を「削り」によって整形する大きな特徴がある。また、胎土中に明らかに貝を碎いたと見られる石灰質の粒が混ぜられている土器片も多い。

2. 石器

石材

発掘調査では石灰岩以外の石は、人為的に持ち込まれたものとし、すべてを調べることにした。しかし、砂岩の出土があまりにも多い。砂岩は沖縄本島北部に産する嘉陽層系と島尻層群中の小禄層に由来する細粒砂岩の2種がある。両者を合わせると重量で1トン近くも出土した。この2種の石材は取り上げても、直ちに持ち帰らずに発掘現場に放置し、泥が雨で洗い流されてから加工・使用の有無で取捨選別した。

嘉陽層系砂岩は摺理面から板状に割れただけの例が多い。砾石や石皿などに利用価値の低いものが、かなりあったようで単に打ち割られただけの破片が多い。小禄層の細粒砂岩は、「ニービスフニ」・「クルイシ」と呼ばれる。この产地は本遺跡の約700m南、「沖縄こどもの国」付近がもっとも近い。ただし、遺跡で出土した砂岩は、焼かれたのか非常に軟質で風化しており、使用あるいは加工の痕跡が残らない例がほとんどである。出土状況を見ると、竪穴内の炉あるいは竪穴壁の配石として検出される例が多い。

石器

本遺跡は、居住域で住居址も確認されている。出土した石器も遺棄されてから長期間地表にあつたためか、風化・摩耗した出土品が大半を占める。そのため石器片とするか石材に分類するか判断に苦しむ例が多い。整形加工・研磨などの痕跡を残すもの、敲打痕や使用による滑面が見られる資料の総数は約350点である。その内、図示するに値しない資料などを除いた106点を取り扱い実測図を掲載した。

(1) 石斧類

本報告では一般に「石斧」と呼ばれる石器を一括して取り扱う。室川貝塚崖下地区の報告では研磨の有無で「磨製石斧」と「打製石斧」に大別した。本文もこれに従うこととする。しかし、風化・磨耗が著しく研磨の有無が不明な例も多い。

石斧類の石質は緑色片岩が圧倒的である。安山岩や輝緑岩あるいは変輝緑岩がこれに続いている。石質鑑定中に閃緑岩や角閃安山岩などと見られる石器があり、発掘された石材の中に同質のものがないか詳細に再検討したが1点も見当らない。割って新鮮な割れ目が観察できないので、石器の表面観察だけに止まった。

A. 磨製石斧

本遺跡で出土した石斧の中で図28-1は、全面が丁寧に研磨されている。他は図28-7のように敲打痕が残る程度で、図29-1・2に代表されるように大きな面や整形の打痕を残す例が多い。

破損後に敲石として利用された例としては、図28-3の刃部が敲打に使用され丸くつぶれている。図28-4・29-1は、破損後にハンマーのように使用されたと考えられる。使用による荒い敲打痕が、刃先と破損部に見られる。

曲面と平坦面の極端な例（図28-7）がある。円錐を打ち割って製作したのではないかと考えられる例で、図左面が曲面に対し右面は平坦である。

扁平大型石斧の刃部と見られる図30-4は、全長18cmほどの大きさと予想される。両平面が丁寧に研磨され、側面は敲打による微調整の仕上げで未研磨。

B. 片刃磨製石斧

刃部が片刃と明確な図31-3・4は、厚さ2.0cmと1.5cm、刃部の幅が約3cm。刃部の幅から図31-1と同様な形状が推定される。しかし、この石器は図の上下のどちらが刃部か判断し難い。また、風化磨耗が著しく研磨の有無も不明である。

図31-2は両側面が90°の定角で全面が端整に研磨されている。刃部は欠損しているが厚さ8mmの短冊形で、「定角式片刃石斧」と通称される石器の最も完成された例と考えられる。報告書作成中は、とりあえず片刃石斧に一括した。機能的には後述の薄手石器に含めるべきと思われる。

C. 打製石斧

ここにまとめた石器は、製作途中の石斧などの可能性が残される。図33-4は頭部の一部を欠損するだけで、前面が荒く打ち割られたままとなっている。完全形の出土は図34-1の1点だが、これは粒の荒い砂岩で石質が他の石斧と異なり、別種石器の製作途中例の可能性も予想される。

なお、風化が著しく研磨の有無判断が必ずしも明確ではない例（図33-5・7・8）も含まれる。

D. 薄手石器

図32-1～5の5点が出土した。当初、4は石斧の單なる破損例と思われた。しかし、5と比較した結果、厚さ5mm～1cmの薄い一群の石器が存在する可能性が強い。1の扁平片刃石器は、側面が切られたように90°で表裏面も平坦に研磨されている。2の刃部片もこれに近い。3～5は一見したところ、破損した石器を利用したようである。

以上の5点と異なり、6は刃部だけが段になって厚い。図32の6点は強烈な打撃に耐えられるとは考えられない。沖縄で除草・植え込みなどに使用されている「ヒーラ」・「フィーラ」・「ビラ」と呼ばれる農具を想起させる。国分氏の「ビラ型石器」との関係が今後の課題と考える。

E. ノミ状石器

刃部の形状は、図35-1が現在の金物加工用の平タガネ（鑿）の刃先と同様に直線的。図35-2は弧状で片刃となっている。類例は室川貝塚東地区で4点が出土している。なお、図31-3・4の2点は刃部がやや太いが、刃部の形状は図35-2に類似している。

F. 薄手小形利器

石質は4点とも緑色片岩である。5～7は長方形だったと見られ、類例が室川貝塚東地区で出土し、石質も同じである。8・9は整形された形跡がなく、破損した石斧などの薄片を二次利用した例と見られる。

G. その他

図35-3は、洗浄された石材の中から取り上げたときは、鉄のように重かった。一時は戦時中の砲弾片かと錯覚していた。火成岩系統の石質で、先端が尖り、表面には打ち欠いて加工したような形跡が観察される。

図35-4は、ほぼ完全形で出土した。左面右面とも研磨されているが、鋭利な刃部が見られない。

図36-7の左側面は石材の脈部分から破損し多様になっている。道具の握り部分のような形で、表面はザラザラしている。同図-9も片状砂岩で、研磨の痕が見られる。磨製石斧頭部の破損片と思われる。しかし、両者とも、石質は砂岩で衝撃には弱いと思われる。

図36-8は、緑色片岩で表面は研磨されているようであるが、風化が進み加工状況は不鮮明。

図36-10は、砂岩で磨り石などの破損片周縁を打ち欠いてある。図の下端がやや鋭く、表面に滑面が残り、裏面は破損面である。室川貝塚崖下で2点の類例があり、叩石のグループに含めて報告している。

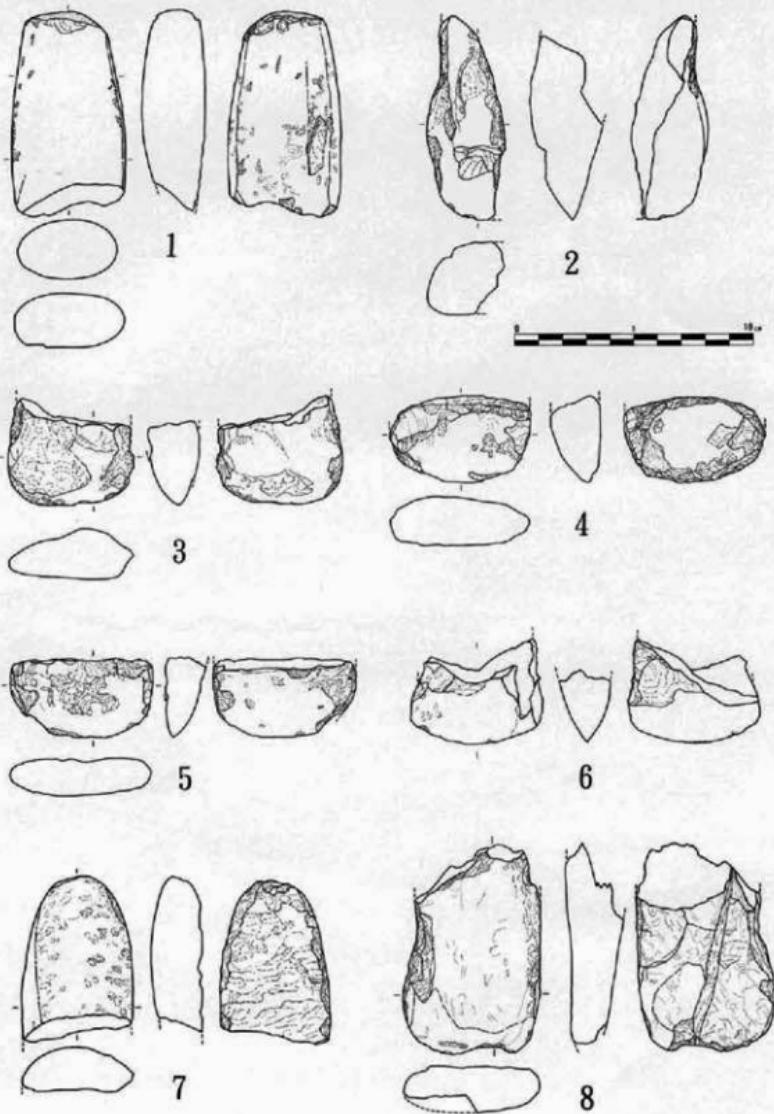


図28 石器実測図

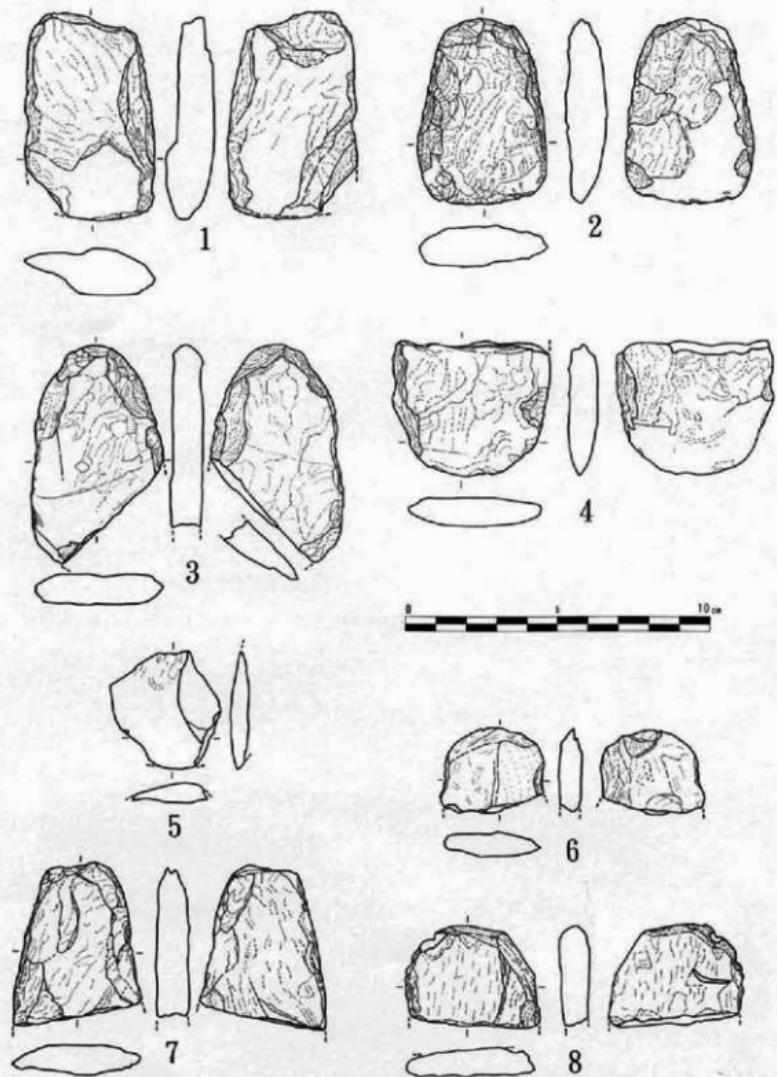


図29 石器実測図

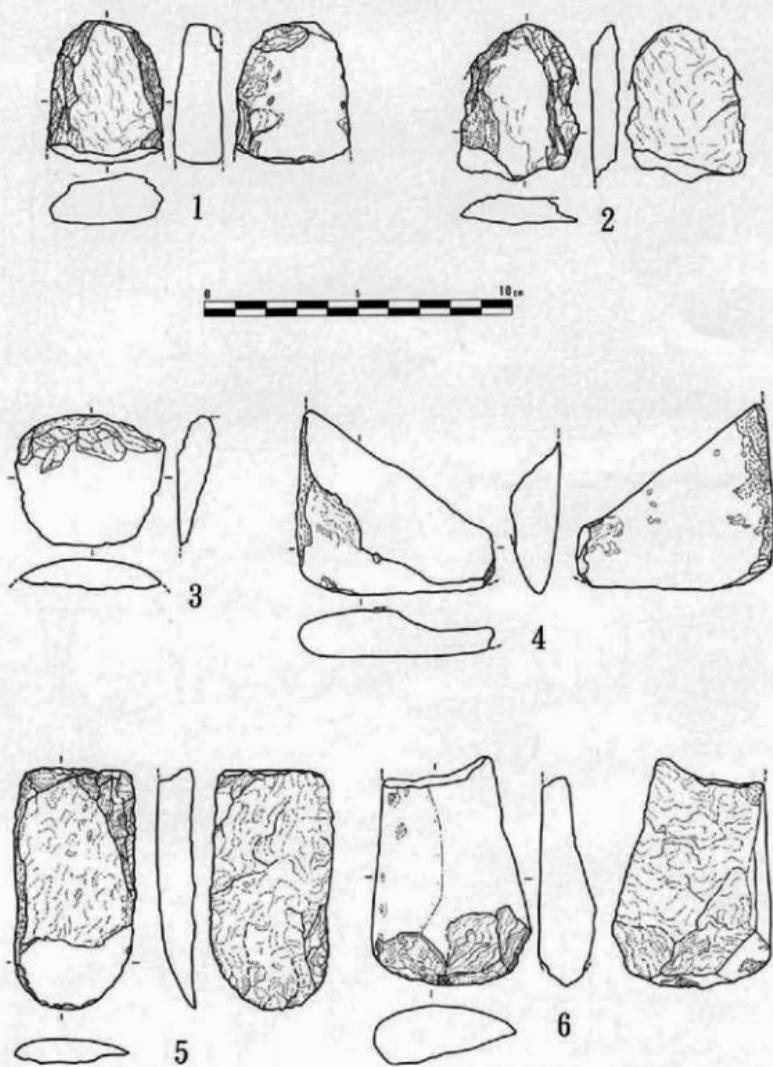
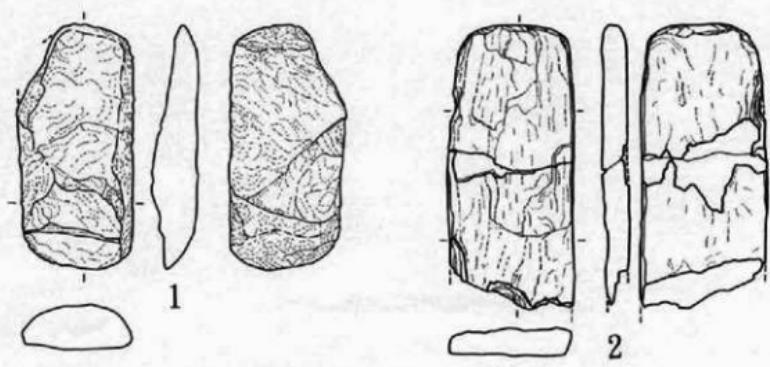


図30 石器実測図



0 5 10 cm

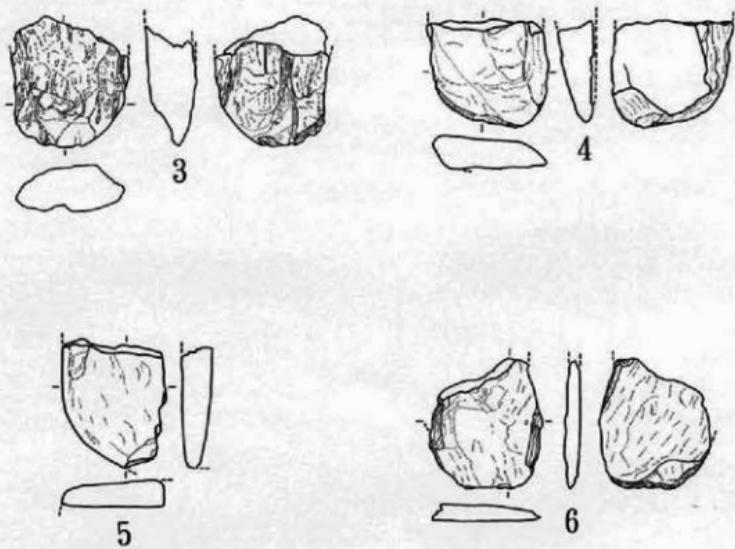
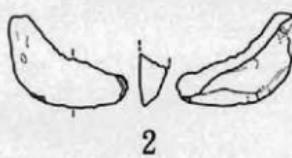


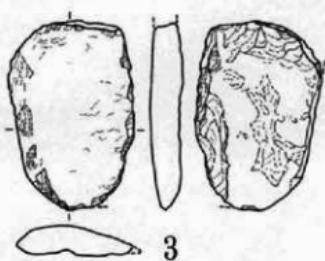
図31 石器実測図



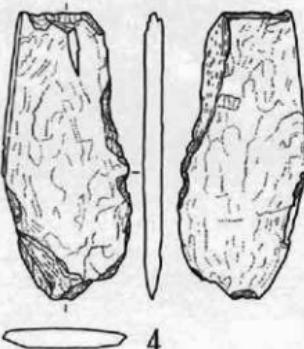
1



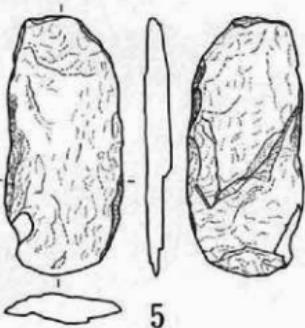
2



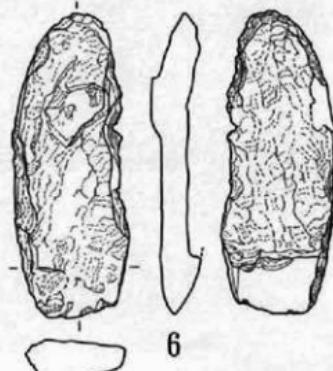
3



4



5



6

図32 石器実測図

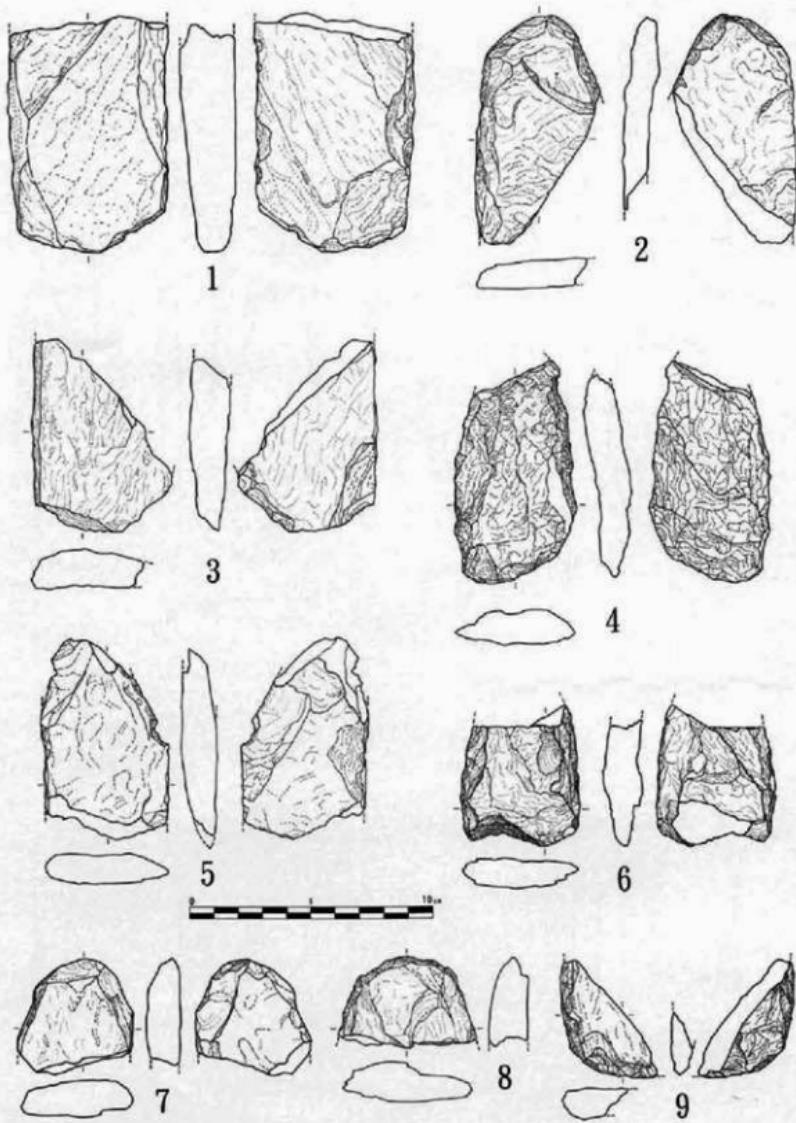


図33 石器実測図

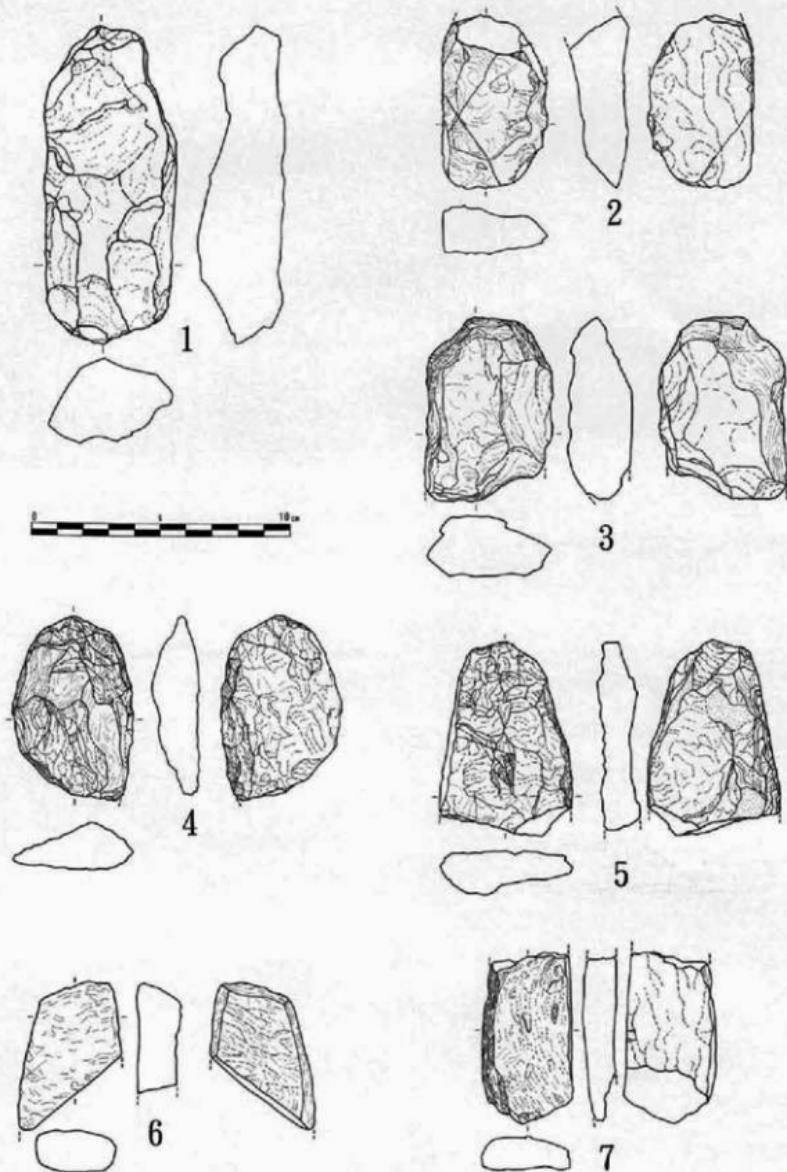
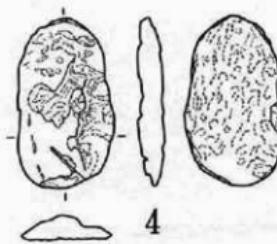
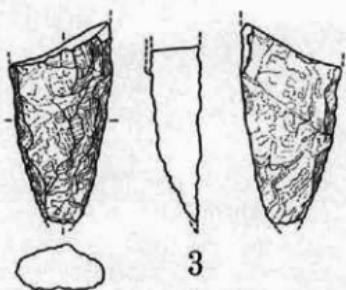
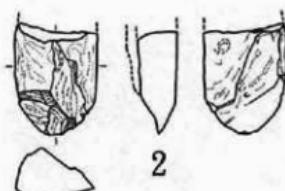
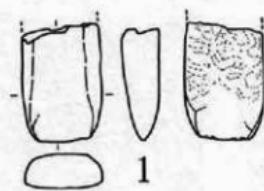


図34 石器実測図



0 5 10 cm

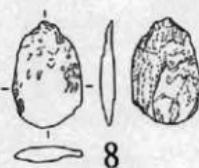
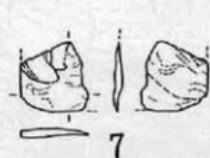
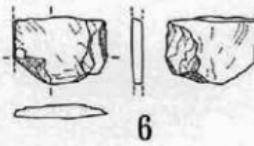
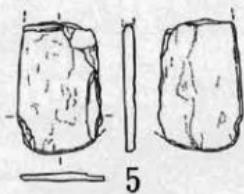


図35 石器実測図

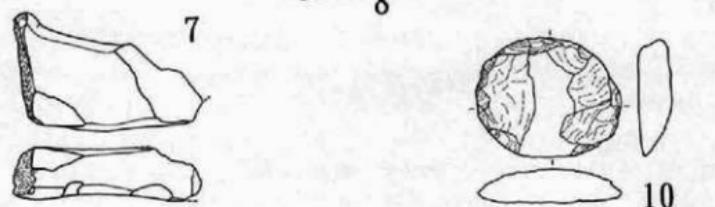
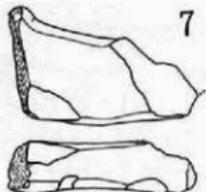
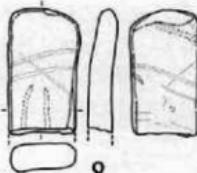
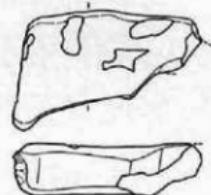
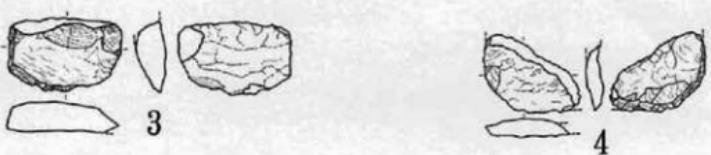
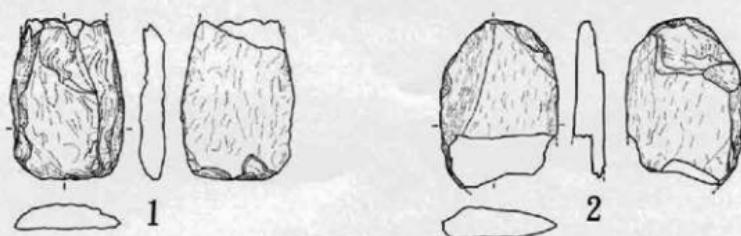


図36 石器実測図

(2) 凹石・敲石・砥石・石皿類

本遺跡と隣接する室川貝塚崖下地区では、堅果類などの粉碎・製粉に用いられたと考えられる多数の磨り石や凹石が出土した。しかし、これらとセットになる石皿類の出土が少ない。石皿と考えられる石器の大きさも、最大で15×20cm前後であった。大形磨り石の径が約15cmあり、崖上で大形の石皿が出土するのではないかと予想された。

ところが予想に反して、居住区である本遺跡出土の石器は崖下地区から出土した石器より保存状況が悪い例が目立つ。個々の石器も凹石が砥石に代用されるなど、石器分類や実測表現の変更などに混乱を生じた。石皿類も製粉・研磨による滑面のある小片が多数で、崖下地区の大形磨り石に対応する例が見当たらない。

磨り石・石皿には砂岩が使用され、主に沖縄本島北部の嘉陽層系砂岩が用いられている。磨り石類の産地としては、八重島貝塚の近くに嘉陽層系砂岩円礫の堆積層が確認されている。本遺跡からは、北に約1kmの距離しかない。砥石・石皿に見られる板状砂岩の産地は、名護市以北の遠方と考えられる。

A. 凹石・叩石・槌石・磨り石

本遺跡では、完全形で出土した石器が少ない。崖下地区で出土した大形の磨り石は、破損例だけである。ここにまとめた石器の分類は、使用痕の観察に重点をおいておこなった。用語については、とりあえず次のように使用する。

「滑面」=製粉や磨り潰し作業などの痕跡と考えられる滑らかな面

「敲打痕」=打撃によって生じた痕跡や潰れ

出土した石器は滑面の有無、敲打痕の状況によって下記の4種に大別される。

- | | |
|---------|-----------------|
| ① 凹石 | 滑面がある：粗い敲打痕がある |
| ② 叩石 | 滑面がある：粗い敲打痕がある |
| ③ 槌石 | 滑面がない：緻密な敲打痕がある |
| ④ 大形磨り石 | 滑面がある：敲打痕がない |

① 凹石

凹石は図37-1・4、図39-3・4である。図39-4は、滑面だけで、敲打痕が見られない。他の3点は凹部の周辺などに滑面があり、「叩き・粉碎」と「磨り潰し」の作業が行われたと思われる。

図38-5は「砥石」の一面が少しくぼんでいる例で、一般的な例ではない。図39-6・7・8は、凹石を使用した「台」と考えられ、機能は石皿に近いであろう。また、39-1・2は石器製作などに使用された可能性が強い。激しい打撃を受けた結果、大きな窪みが生じて破損したと考えられる。

② 叩石・磨り石

本遺跡で得られた石器だけでは、完全形や数量が少ないので、分類基準を使用痕に置き、「叩石」と「磨り石」をひとつにまとめた。大きさと形、滑面と敲打痕の状況などによって分類可能と考えられ、室川貝塚の資料と総合した検討が必要である。

完全形は洗顔・手洗い用石鹼のような形をしていると見られる図37-5、図38-1~3は、沖縄の貝塚から出土する一般的な磨り石の「型」である。全て側面や図下端に3~5mm径の粗い敲打痕があり、やや平坦な図の表裏面が光沢のある滑面となっている。図38-1は本遺跡で2例しかない稀な閃綠岩である。

図38-4は径8~10cmの石弾状だったと思われる。残存する全面が滑面で、径3mmほどの敲打痕が散在する。

図37-11は他と大きく形が異なり、磨り石の破損したものを敲打に使用したと推定される。角の部分が敲打で潰れるが、図示面は光沢のある滑面となっている。

③ 構石

滑面がなく、敲打痕だけが残された石器（叩石）を仮に「構石」と呼ぶことにする。図37-6・7には、全面的に3~5mm径の粗い敲打痕が見られる。これに対し図37-3・8~10の4点は、繊細に何かをコツコツと叩いたような痕跡が見られ、細かいサンドペーパー状の面となって残されている。敲打面は図37-3・8が下端にあり、図37-9・10が図の周縁部に残されている。

図37-8・9は、チャートあるいは石英の円盤である。石皿などに使用される砂岩よりも硬度が高いので明瞭な滑面が残されないのかと考えられるが、図37-3・10が砂岩でながら、滑面が残されていない。

④ 大形磨り石

図38-7の1点だけが、大形磨り石だったと考えられる。約20cmほどの楕円球と推定され、破損面以外はすべて滑面である。

B. 砥石・石皿類

砥石 明確な砥面の残された例は、図37-2、図38-5、図39-1、図40-6の4点である。石質はザラザラした砂岩で、砂粒が取れやすい。これらと同質の砂岩は、図40-1・2で砥石と考えられる。

図37-2は敲石を砥石に転用。図38-5は全面に砥面が見られる。図39-1は、石皿が破損した後に砥石に転用した例であろう。

石皿 板状石器片の中で、平滑な面が確認できる資料は石皿と思われる。石皿は最大でも10×13cmの破片しか出土していない（図39-5）。図38-6は破損した石皿を敲打に使用している。図39-7、図40-3～8の6点は、やや光沢のある平滑面があり、石皿の破損片と予想される。

(3) 用途不明石材・細粒砂岩

図40-9・10は細粒砂岩（通称ニービヌフニ）である。2点とも非常に脆く、何に利用されたか不明である。9には研磨などによって生じた稜角がある。10は前者に比べて比重が軽く、表面に多くの敲打痕が見られる。この細粒砂岩は本遺跡や室川貝塚で大量に出土した。産地から遺跡まで少なくとも500mはあり、人為的に運ばれたと考えられる。遺跡から出土する場合は、濃い焦げ茶色が多い。焼かれた可能性があり、自然のままの色調と異なる例が目立つ。

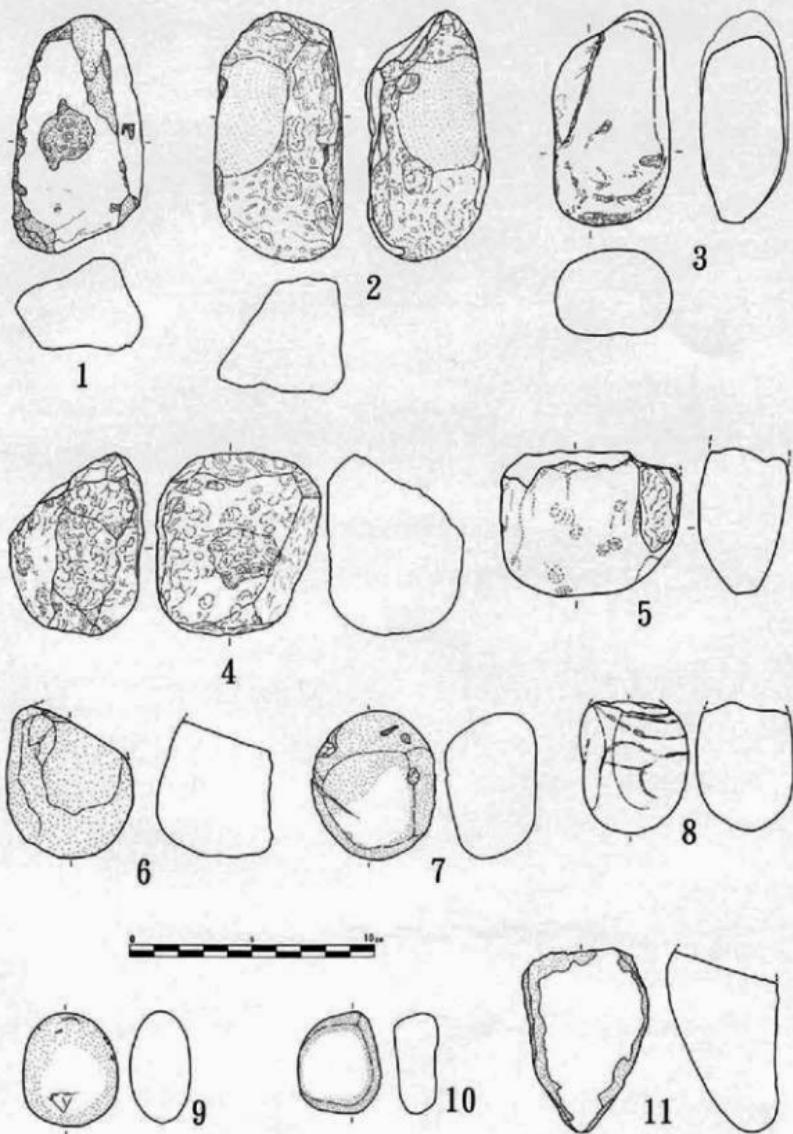


図37 石器実測図

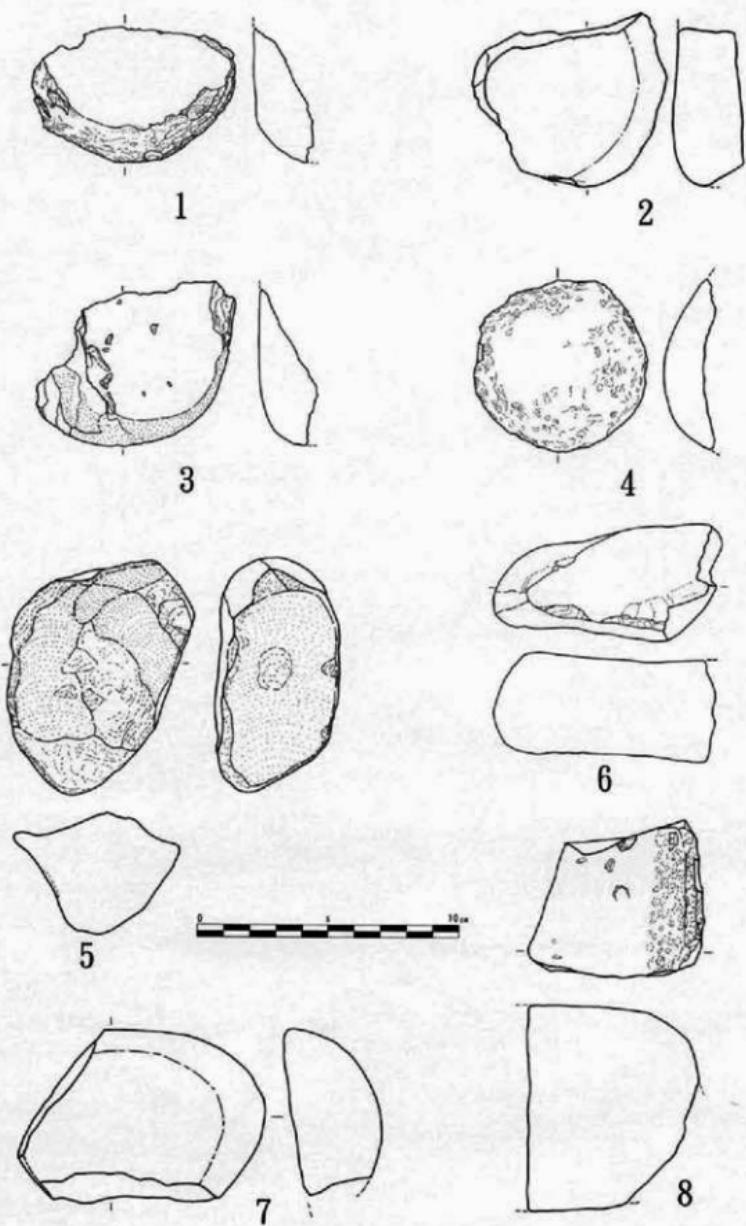


図38 石器実測図

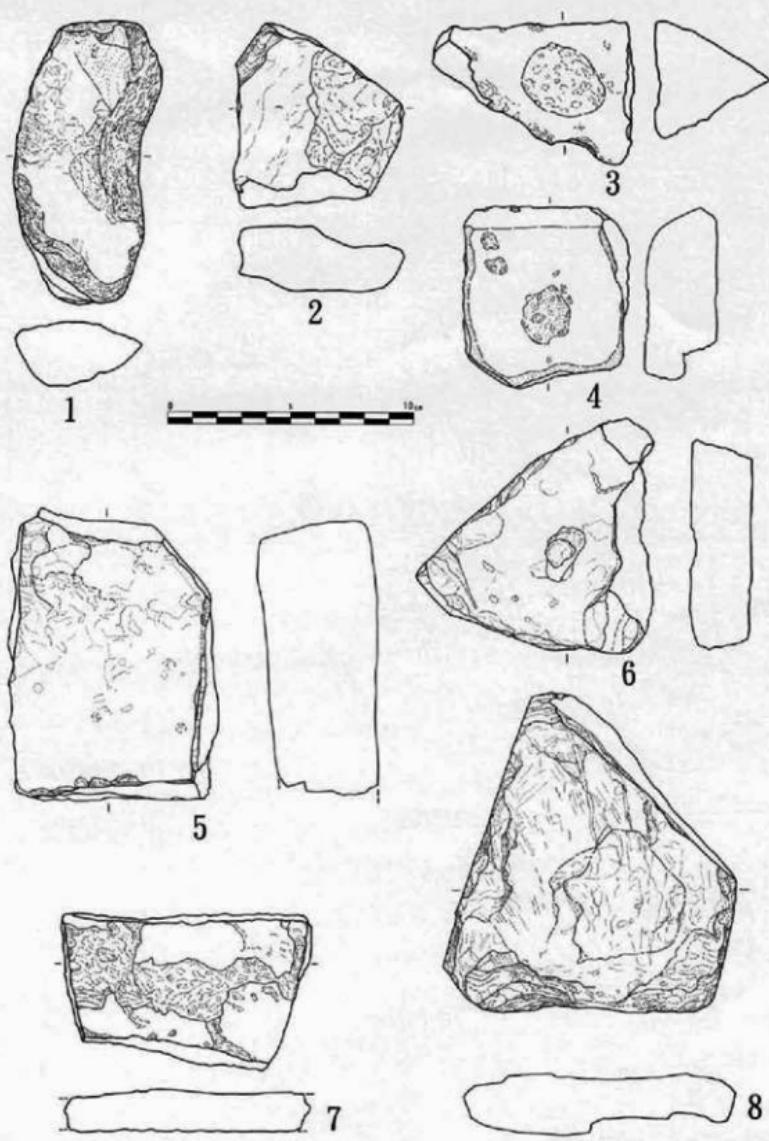


図39 石器実測図

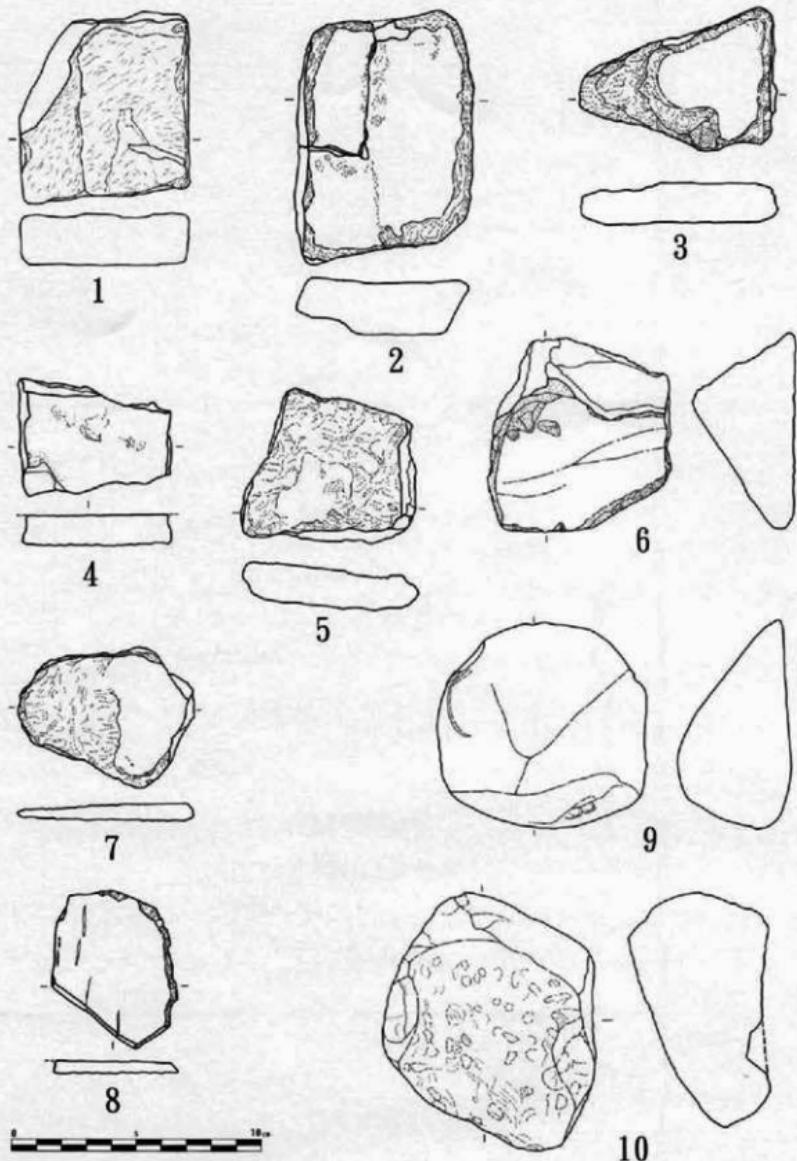
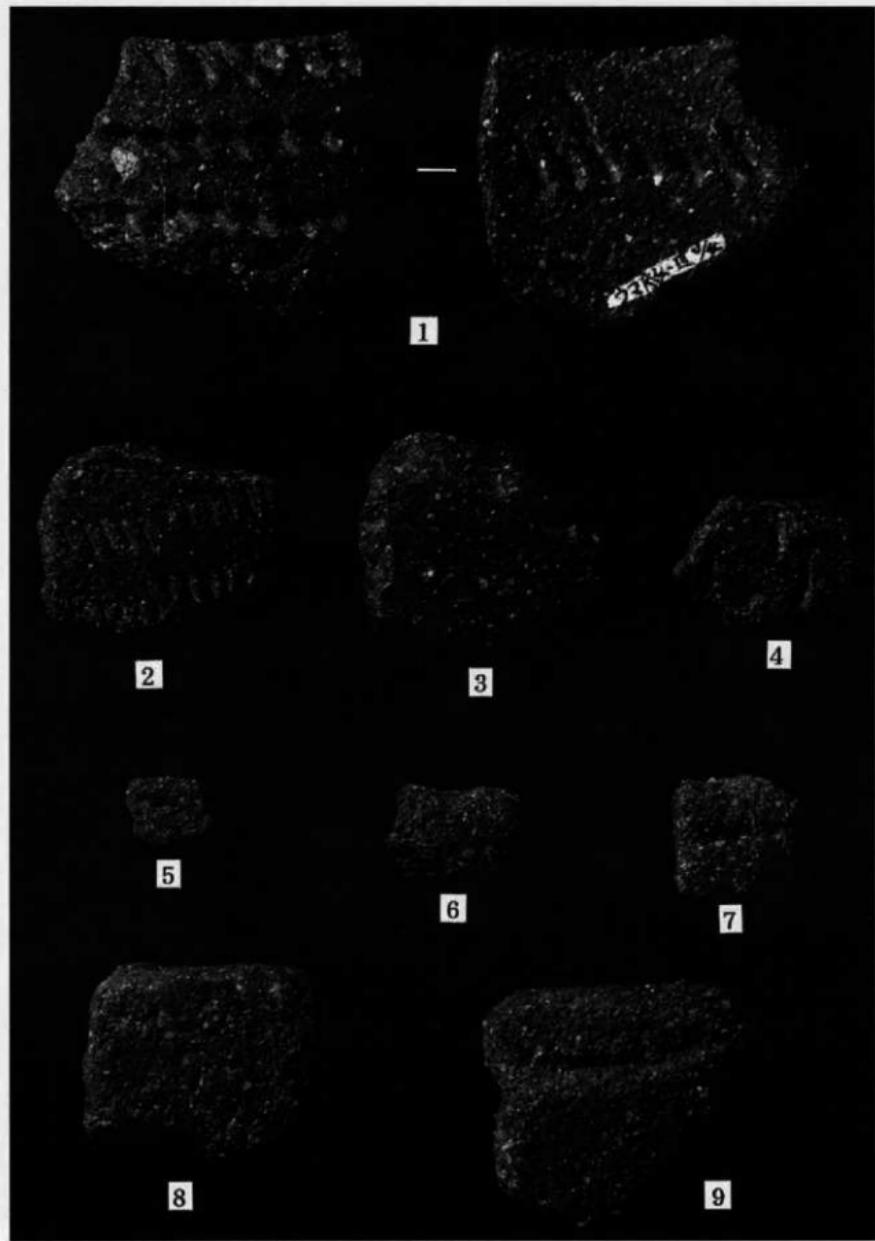
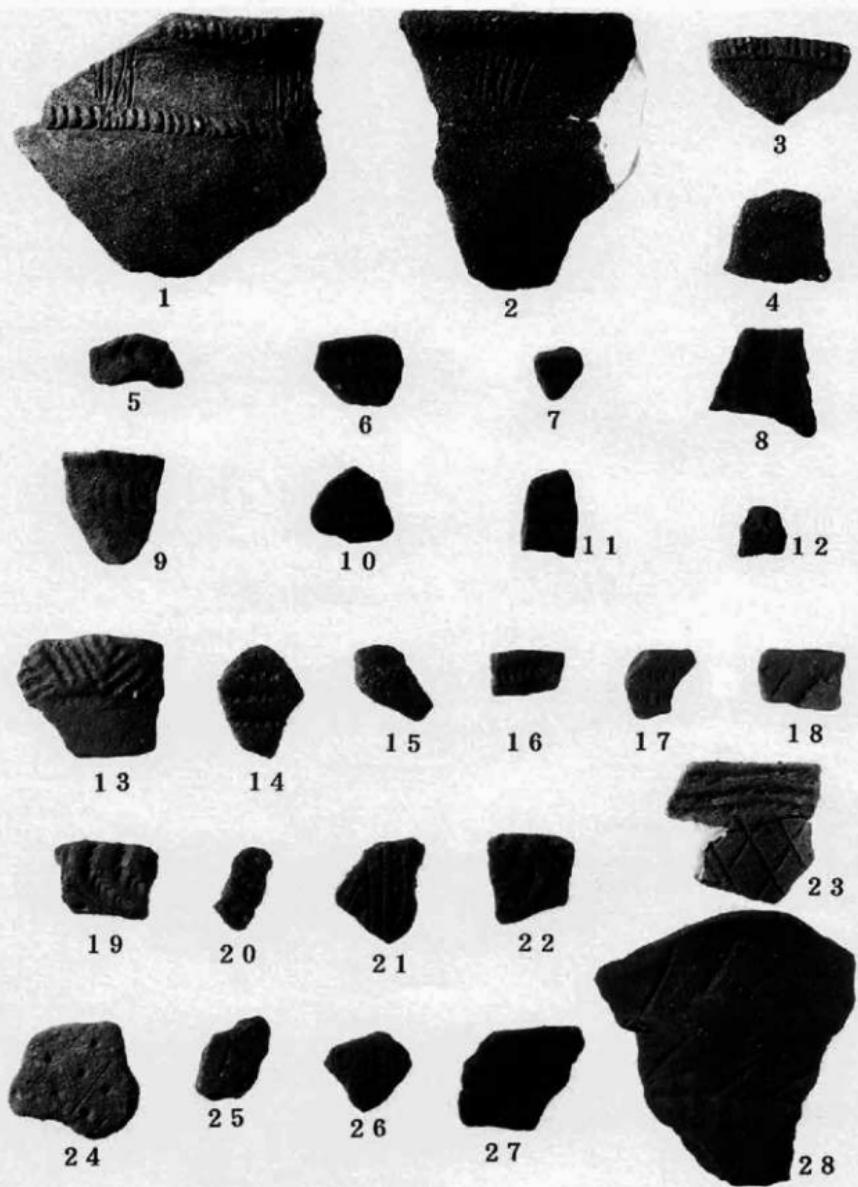


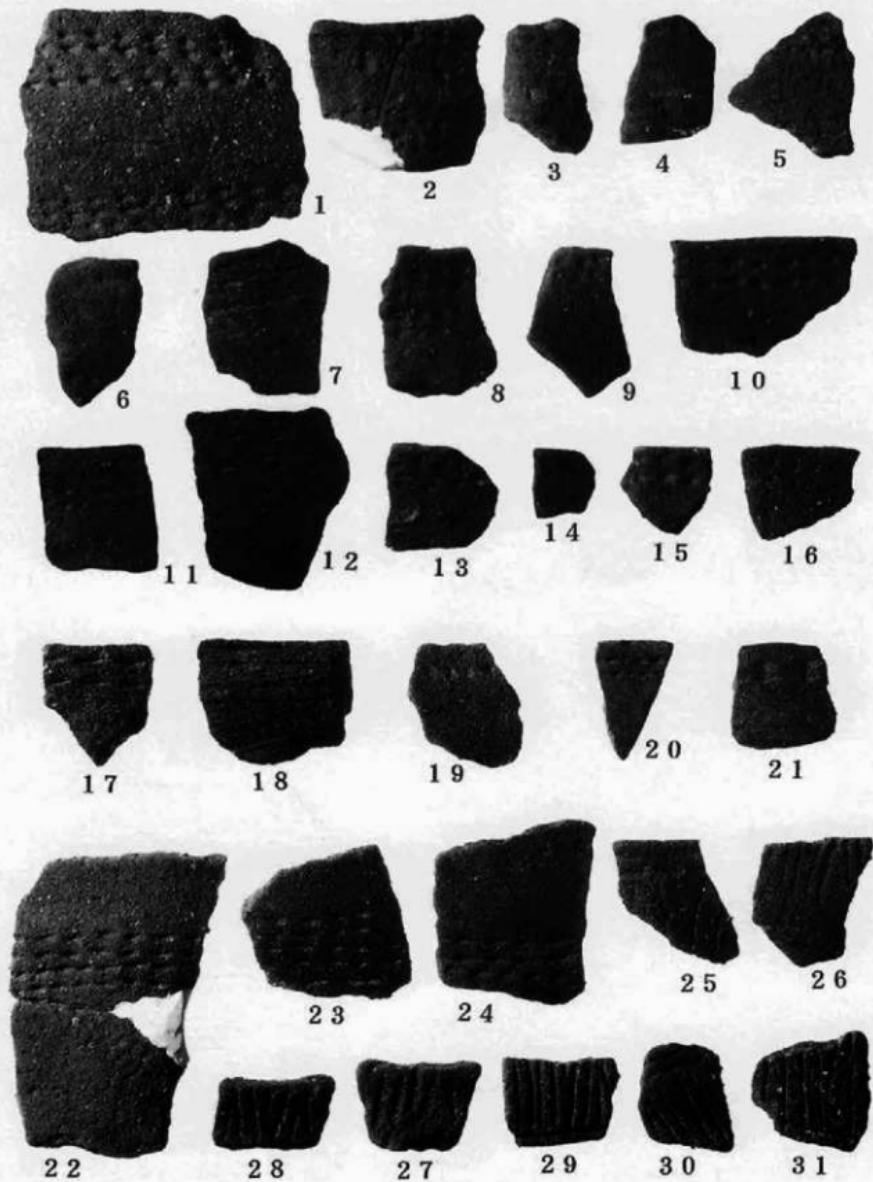
図40 石器実測図



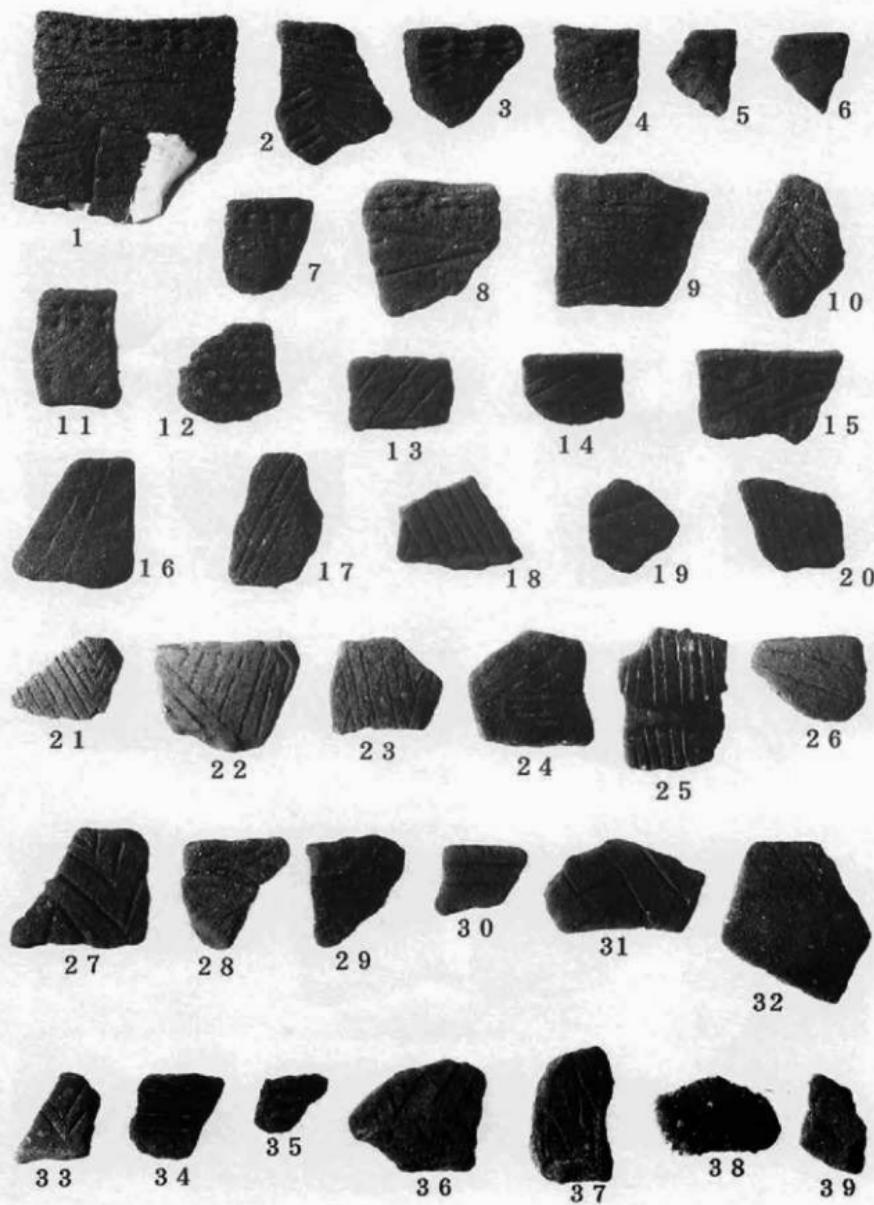
図版-13 室川下層式



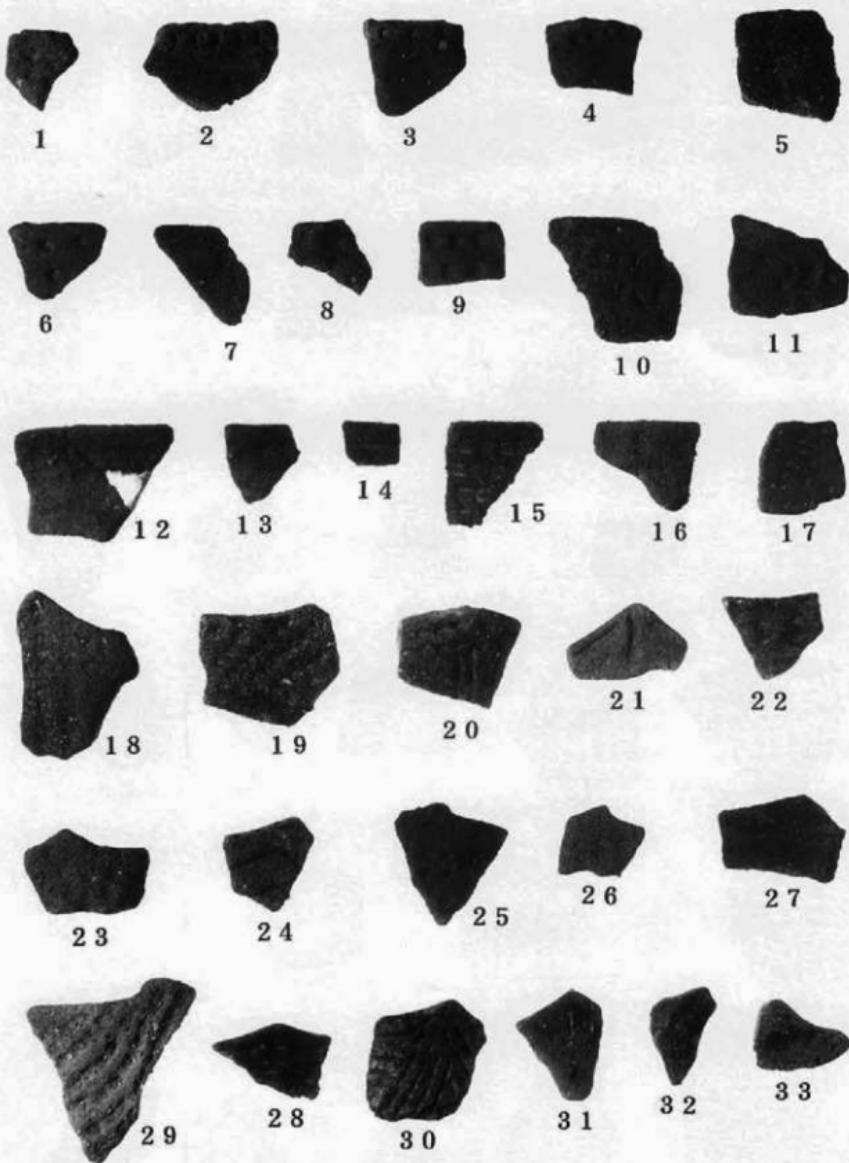
図版-14 面縫前庭式・宇宿下層式など



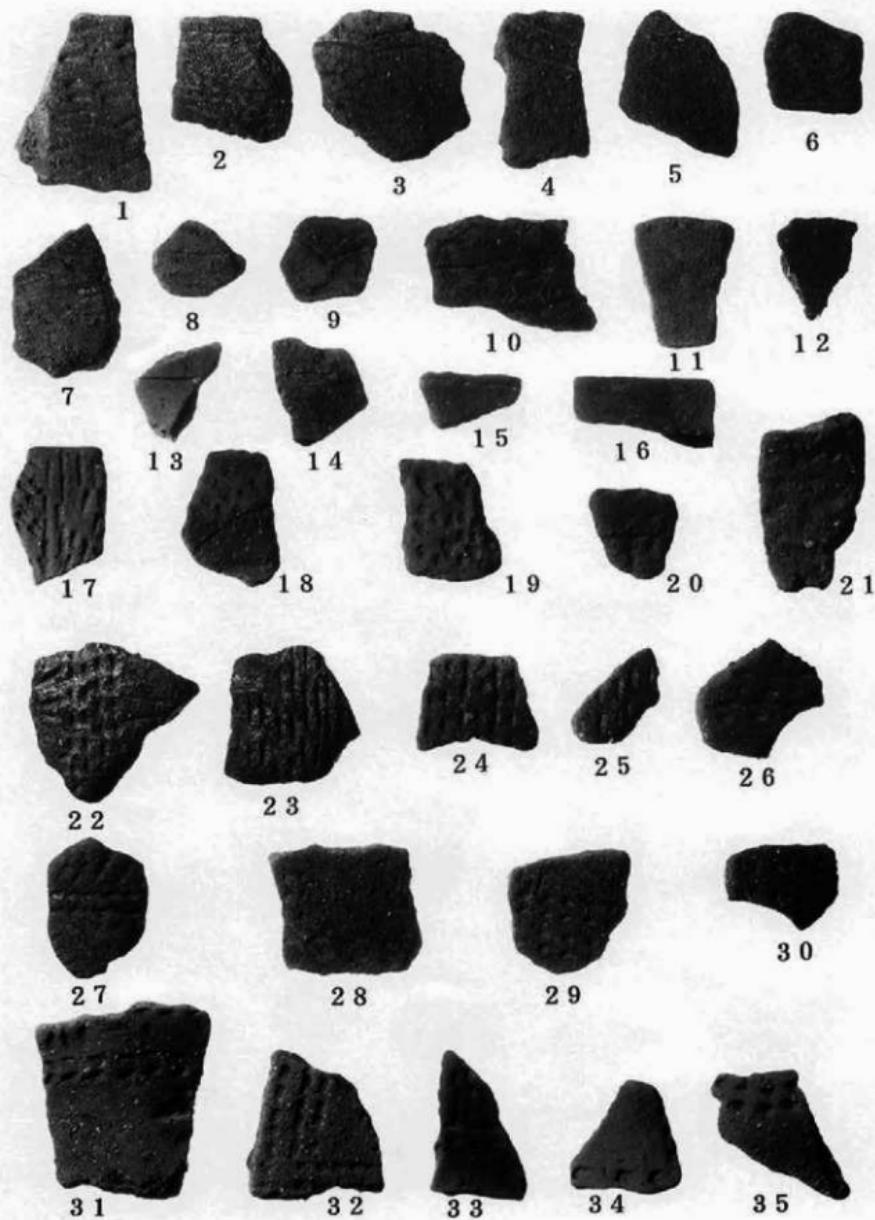
圖版—15 伊波式



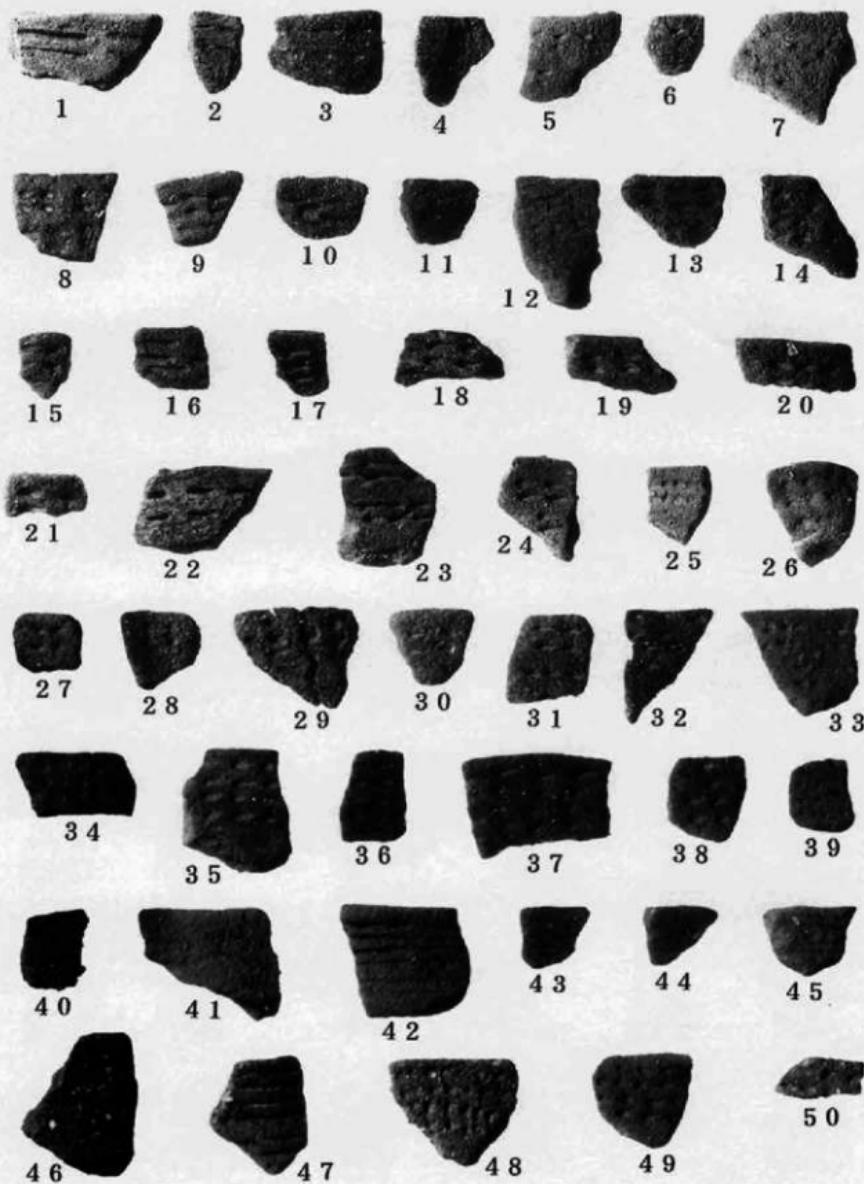
图版-16 伊波式



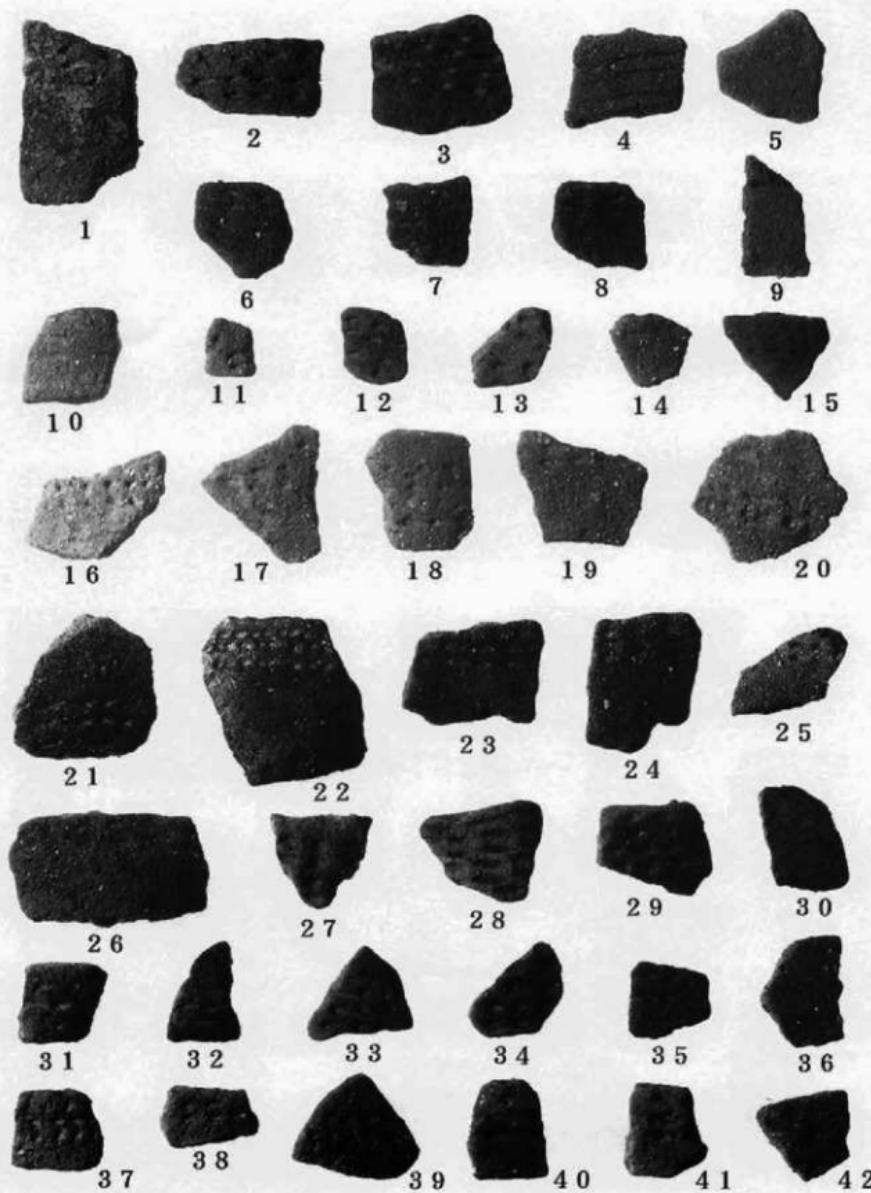
図版-17 伊波・荻堂式



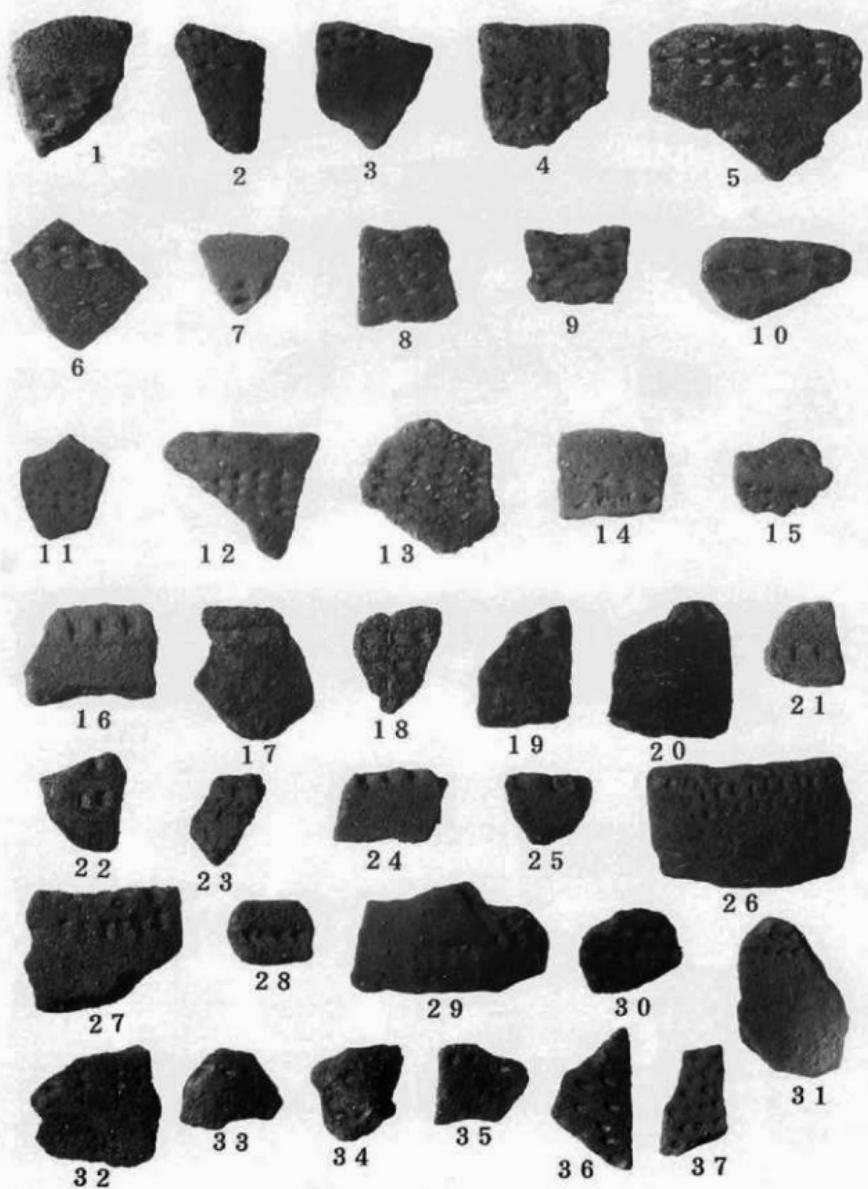
図版-18 伊波・荻堂式



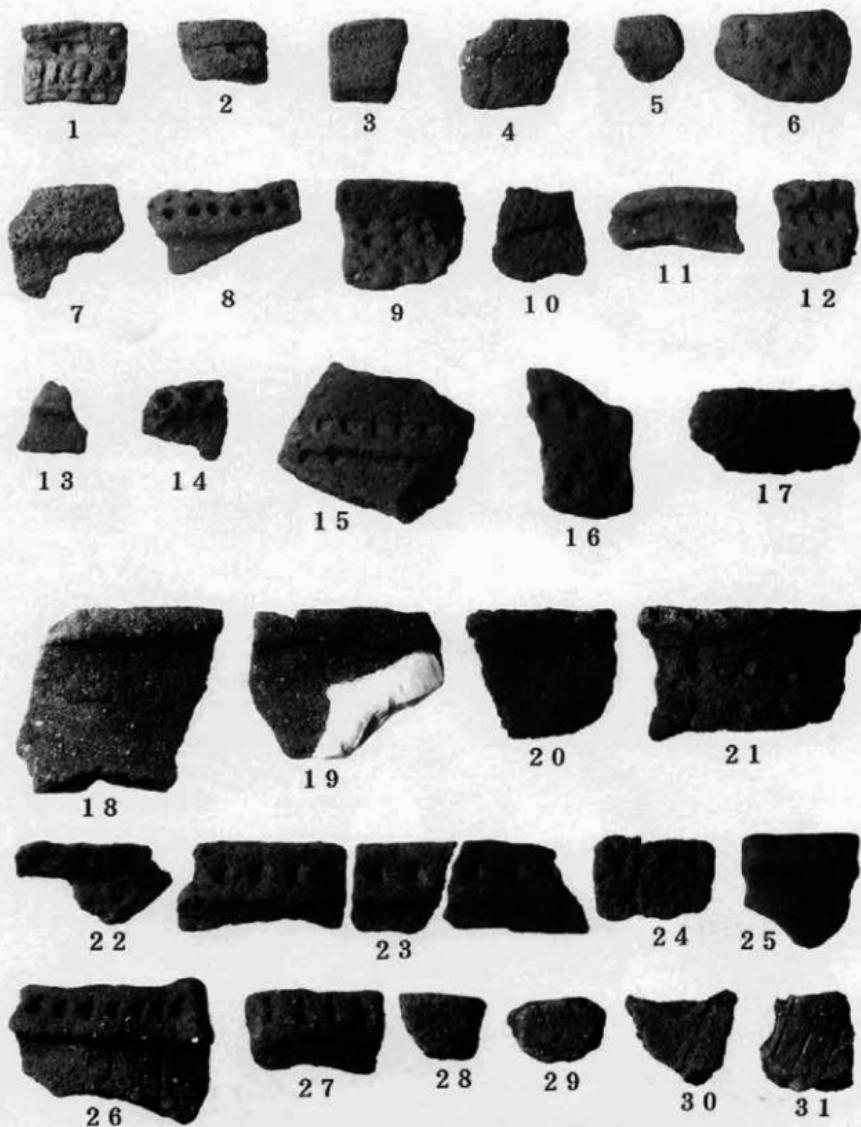
図版-19 伊波・荻堂式



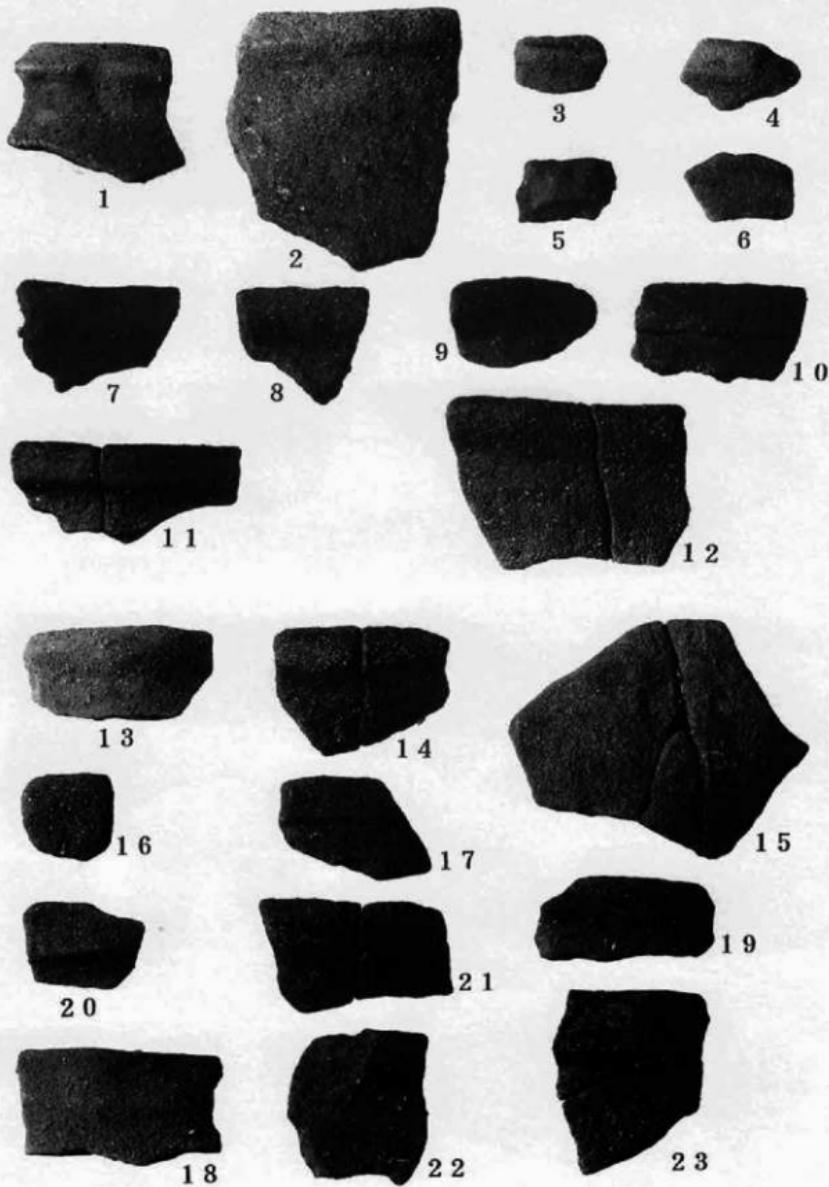
図版-20 伊波・荻堂式



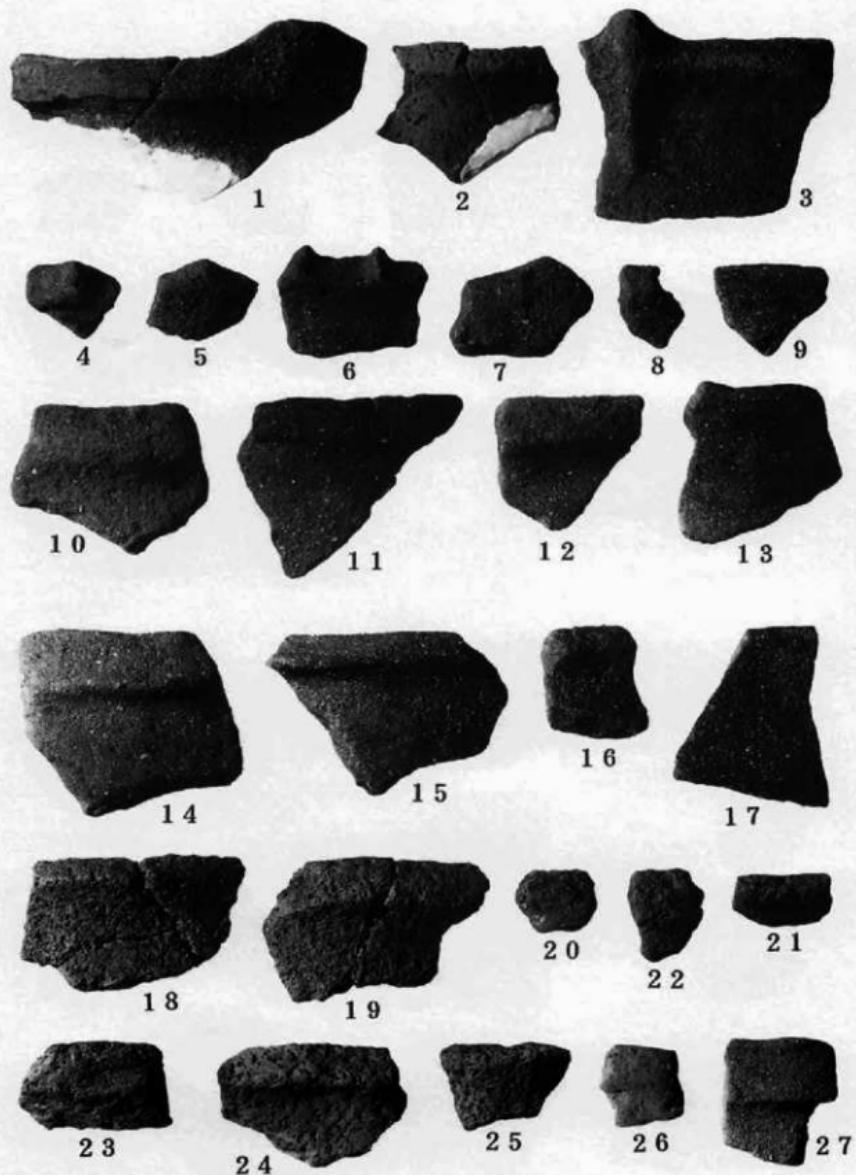
図版-21 伊波・荻堂式



図版-22 大山式・肥厚口縁土器・宇佐浜式



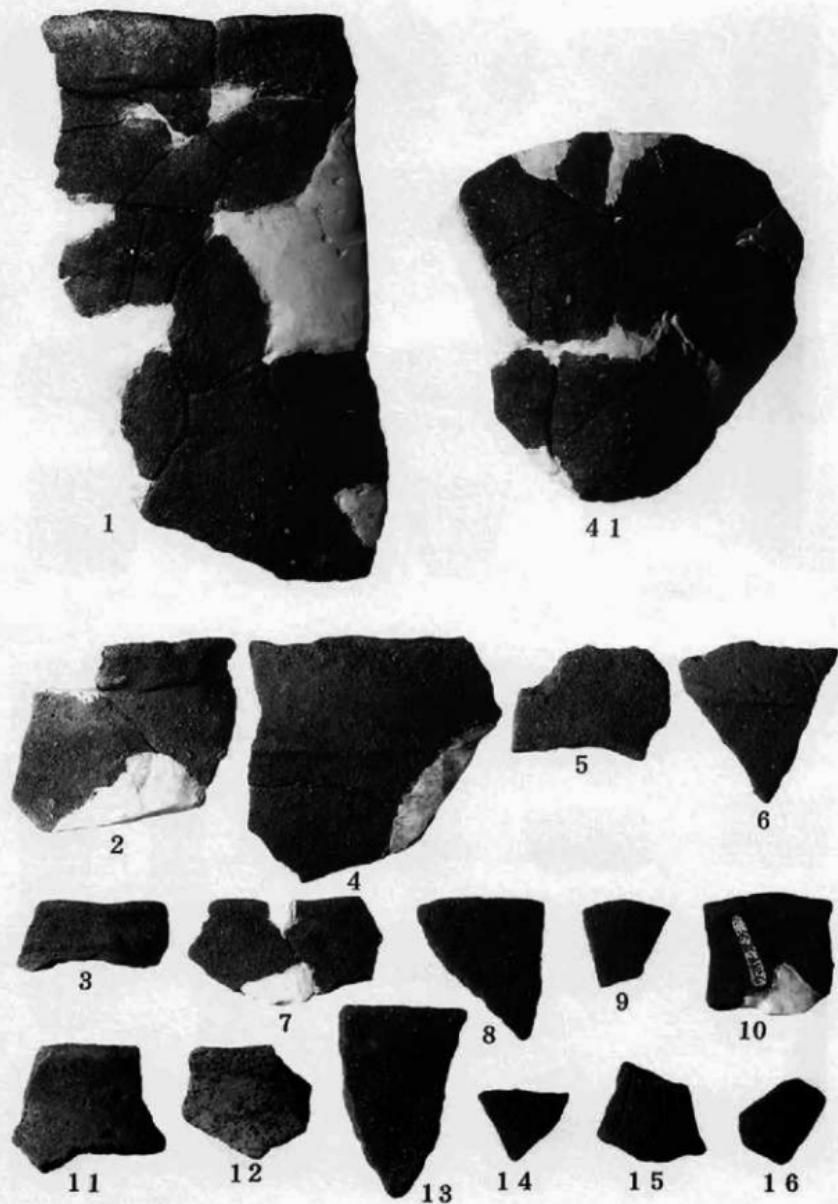
図版-23 宇佐浜式



図版-24 宇佐浜式



図版-25 宇佐浜式・仲原式



図版-26 仲康式・その他



1



2



16



25



3



9



38



34



4

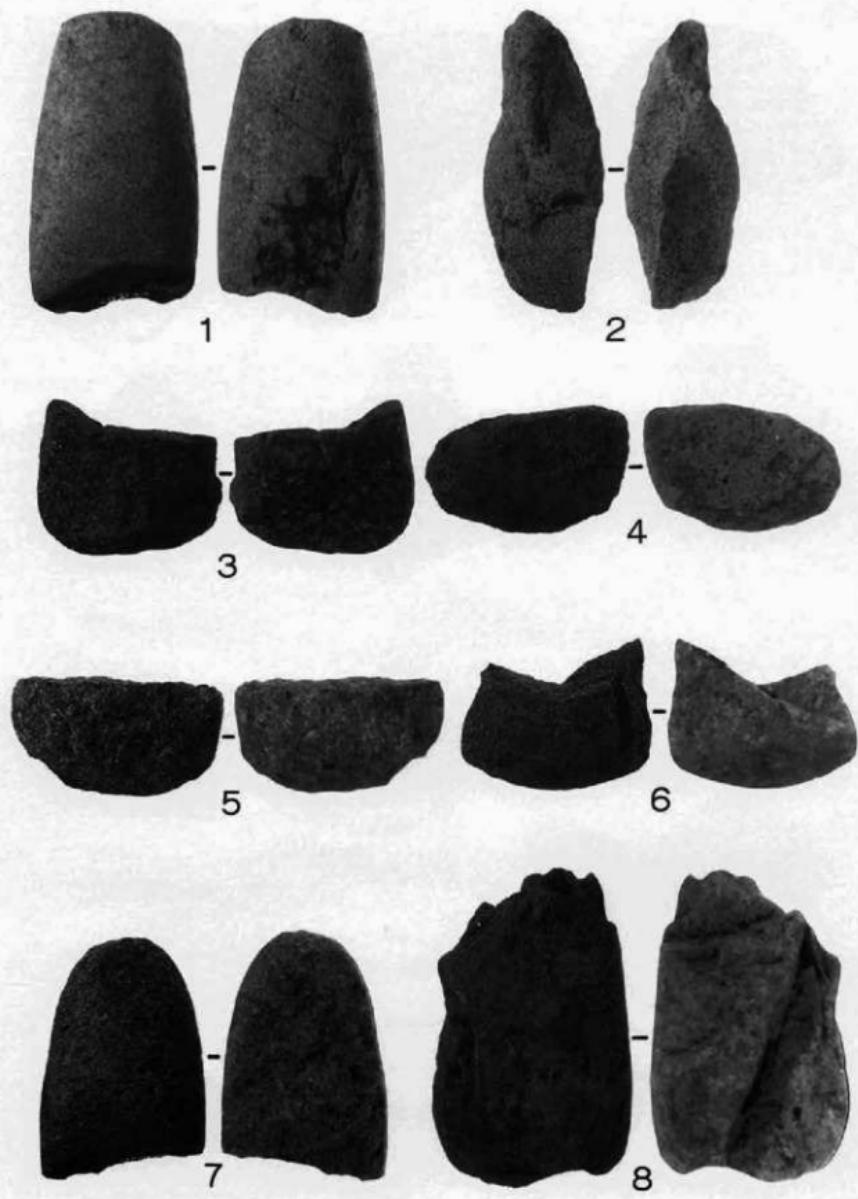


42

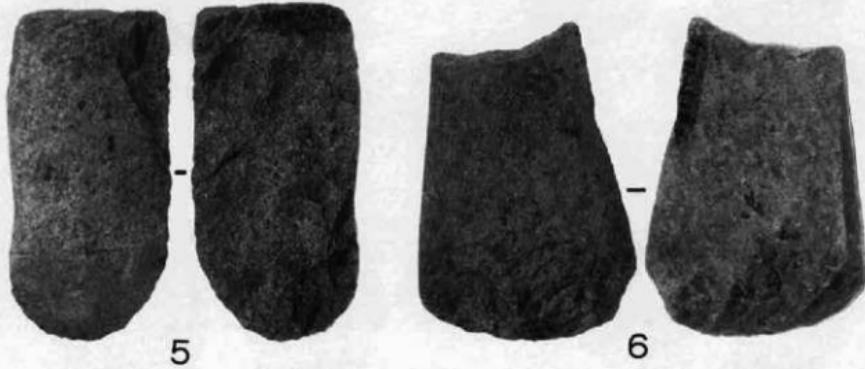
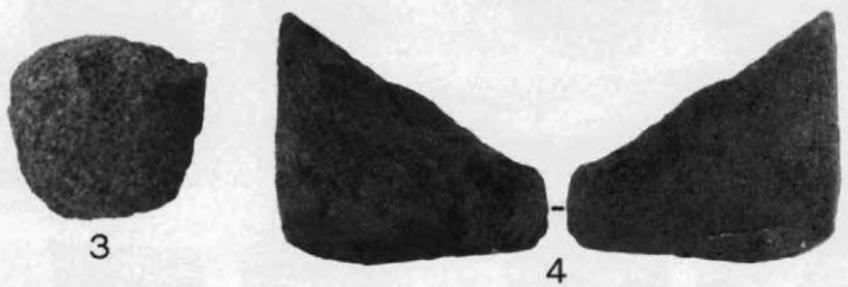
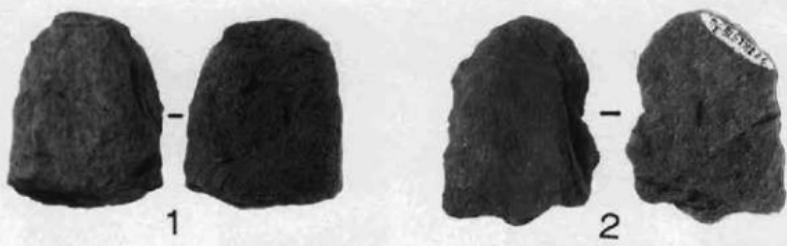


35

図版-27 底部



図版-28 石器



图版-29 石器



1



2



3



4

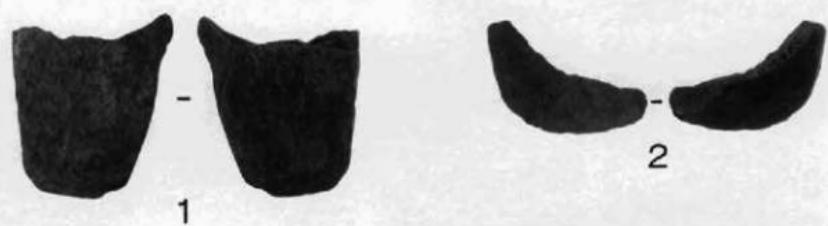


5



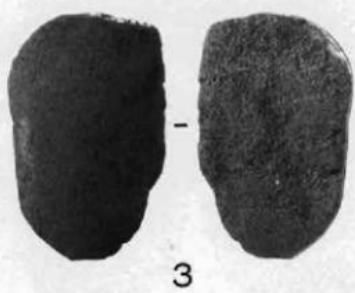
6

図版-30 石器



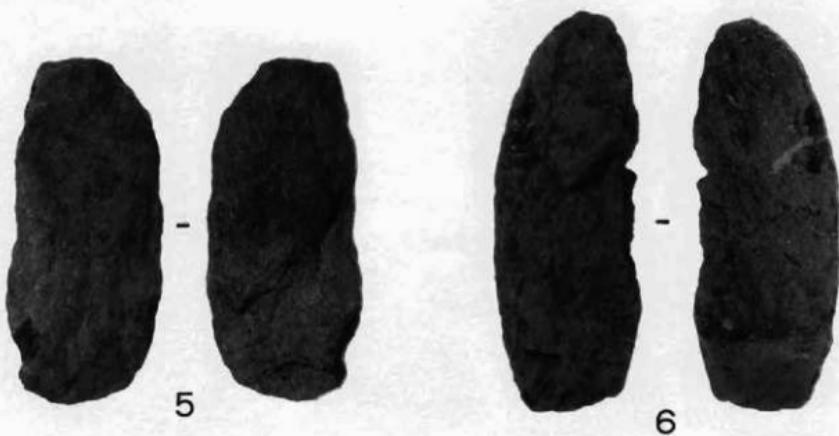
1

2



3

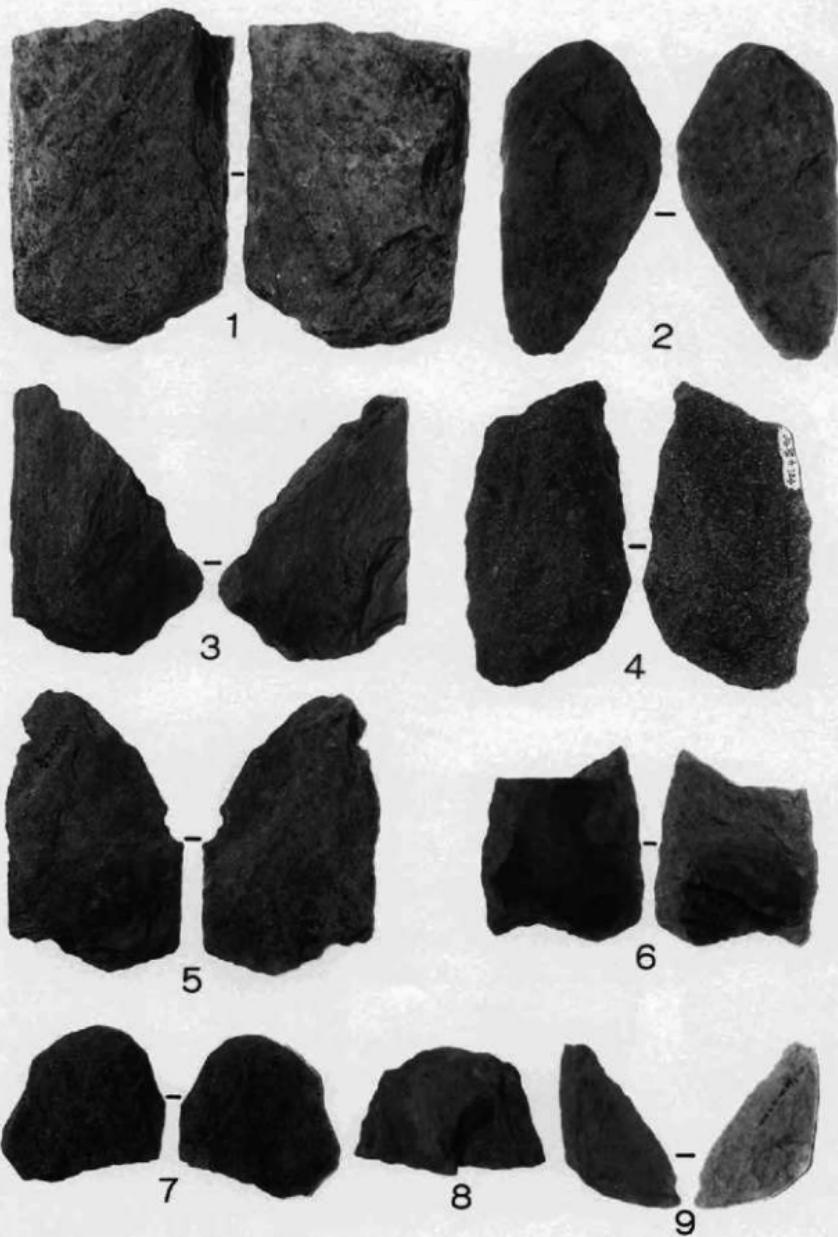
4



5

6

圖版一-31 石器



図版-32 石器



1



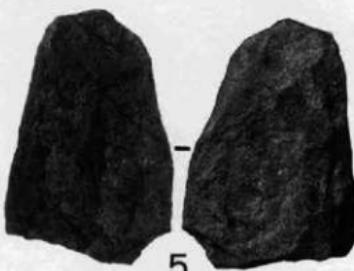
2



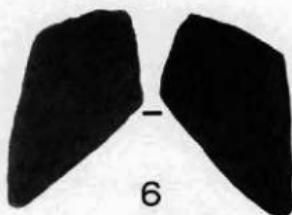
3



4



5



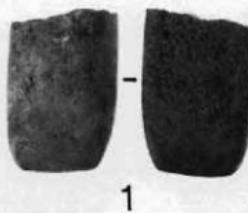
6



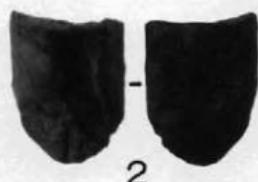
7



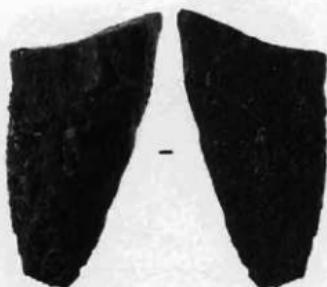
图版-33 石器



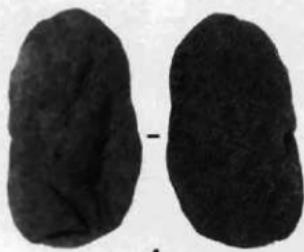
1



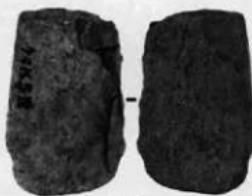
2



3



4



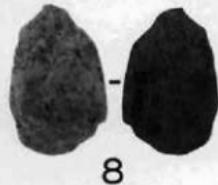
5



6



7

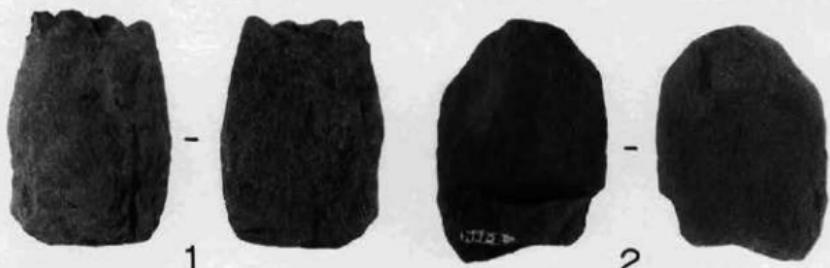


8



9

図版-34 石器



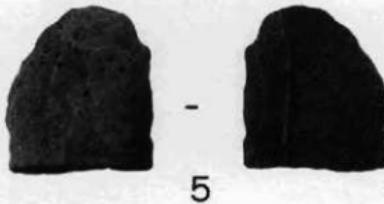
1

2



3

4

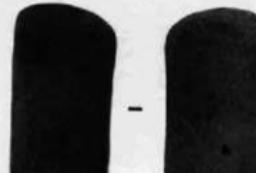


5

6



7



8

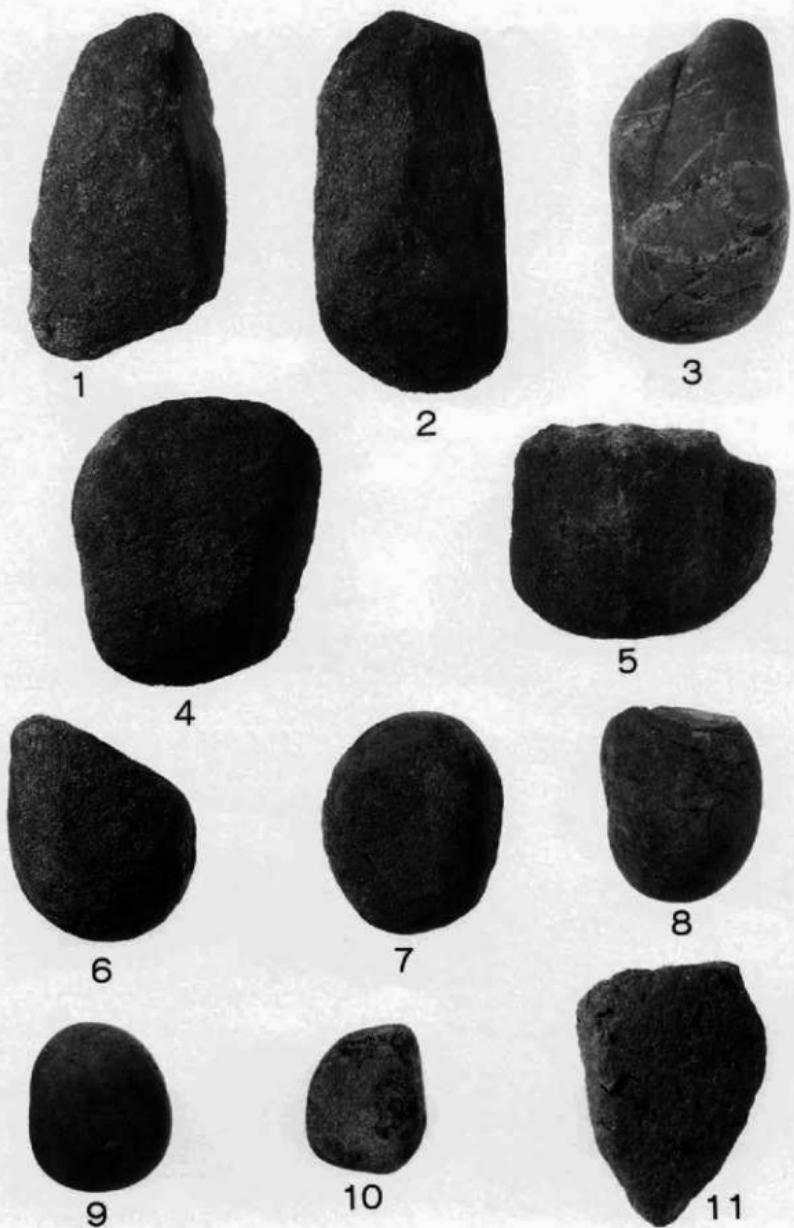


9

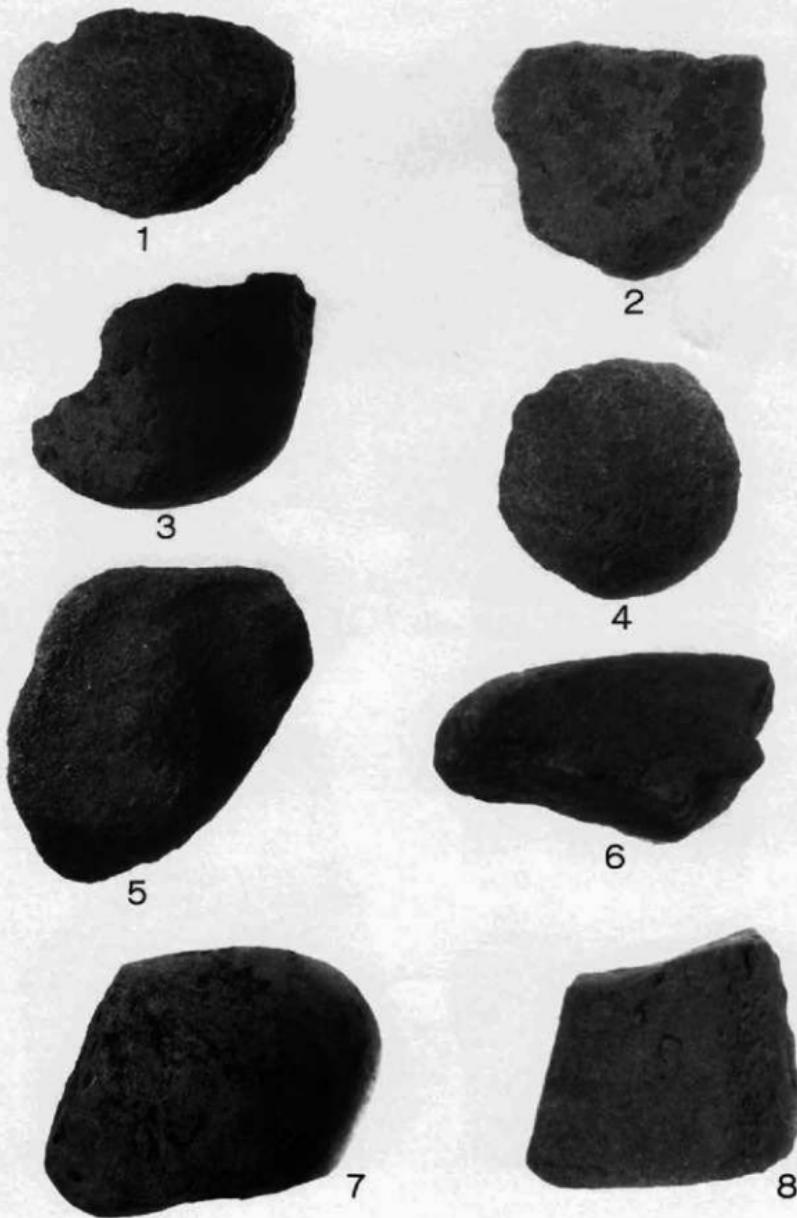


10

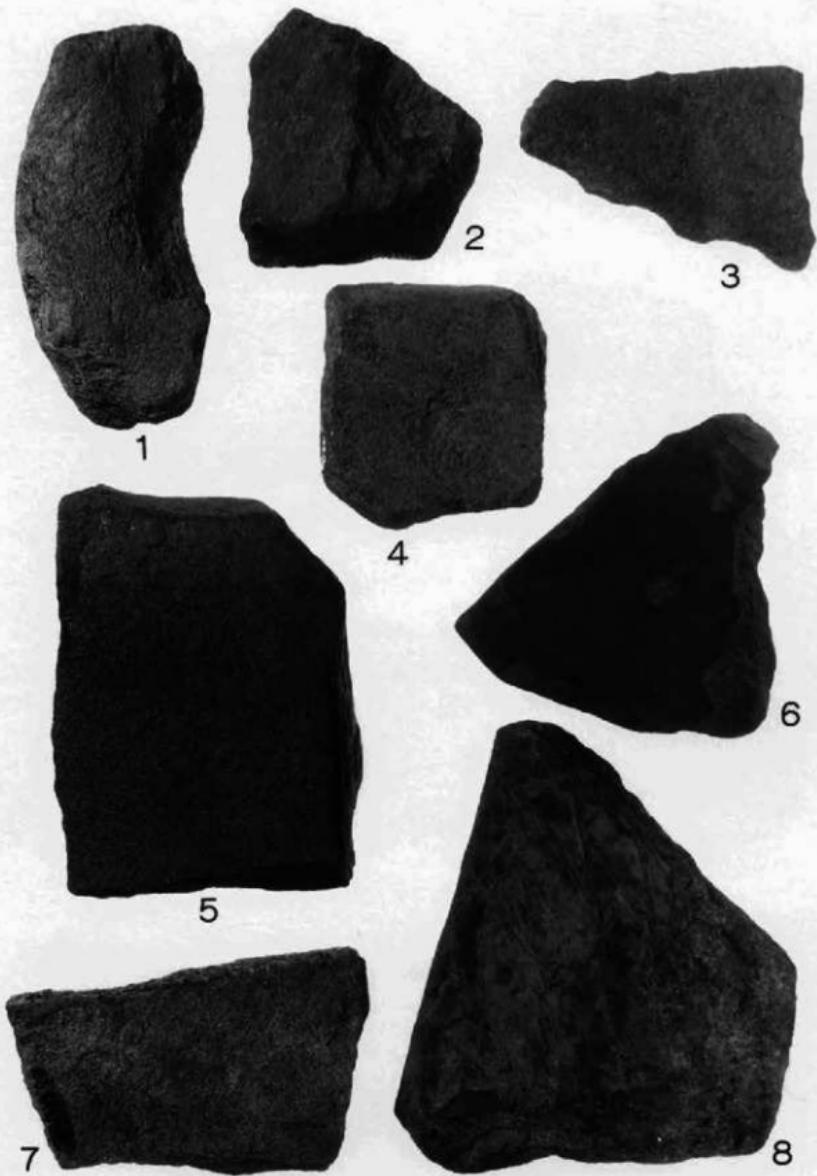
图版-35 石器



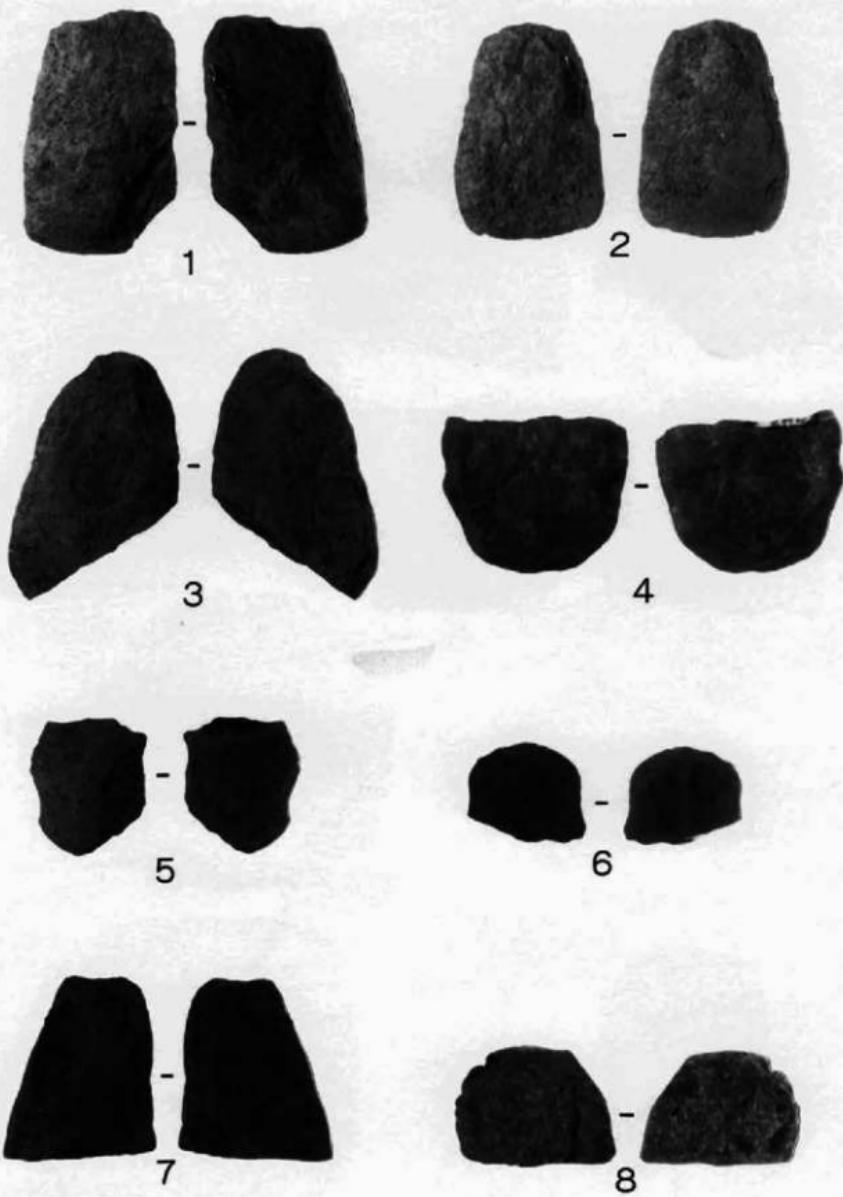
図版一三六 石器



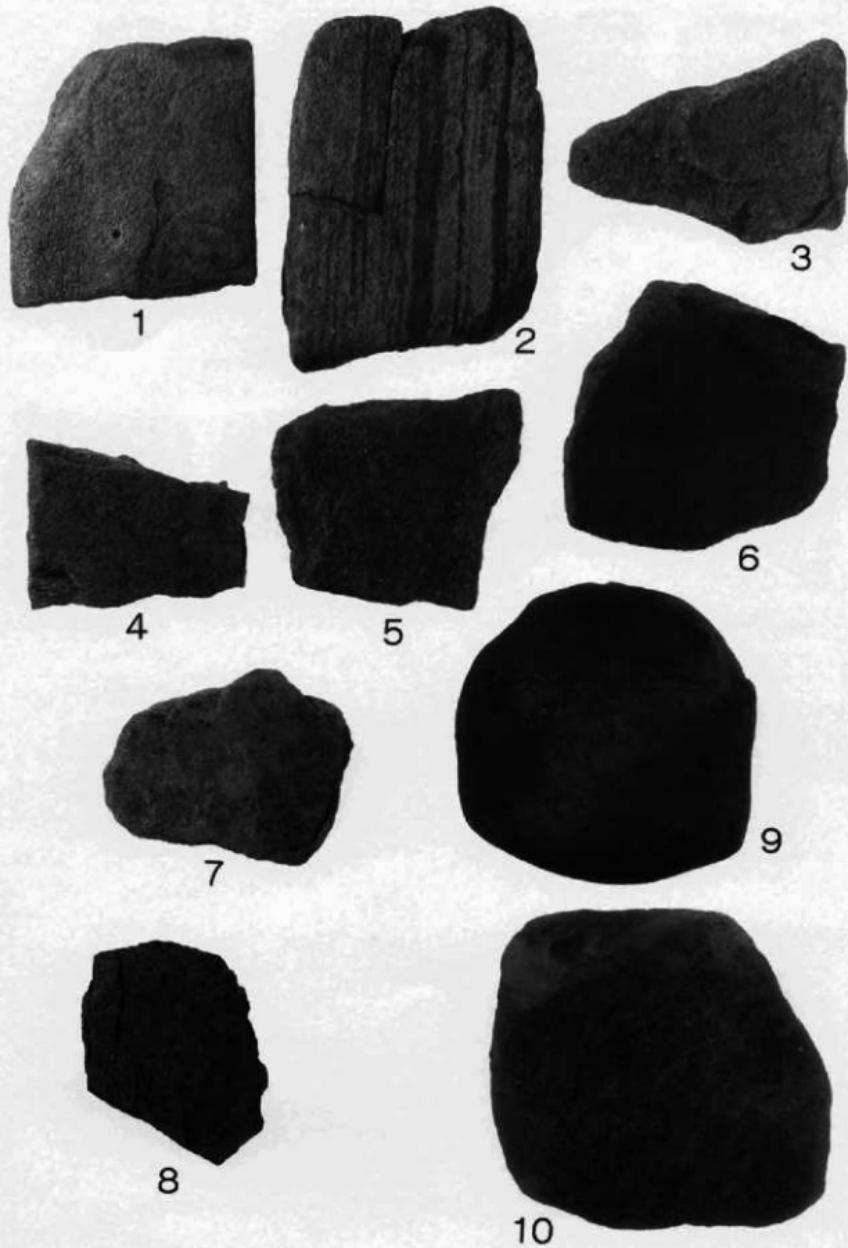
図版-37 石器



図版-38 石器



圖版—39 石器



図版-40 石器

第6章 調査のまとめ

本文は馬上原遺跡記録保存発掘調査だけではなく、室川貝塚と仲宗根貝塚において行われてきた発掘調査成果の「まとめ」とした。先述したように、馬上原遺跡は単独の遺跡ではない。本遺跡一帯には、室川貝塚・仲宗根貝塚・馬上原遺跡・胡屋遺物散布地が連続的に分布している。本遺跡発見の契機が、沖縄市の総合庁舎建設に先立つ室川貝塚の範囲確認調査に起因するように、これらの遺跡は複合遺跡として一つにまとめられる。

4遺跡の中で胡屋遺物散布地は、表面調査が行われただけである。しかし、他の3遺跡に関しては、沖縄県内でも類を見ないほどの発掘・試掘調査が1989年までに12回も実施されてきた。開発などに伴う調査はその後も続いている。

- ① 1965年：仲宗根貝塚発掘調査（琉球政府文化財保護委員会）
- ② 1974年：第1次室川貝塚発掘調査（沖縄国際大学）
- ③ 1975年：第2次室川貝塚発掘調査（沖縄国際大学）
- ④ 1976年：第3次室川貝塚発掘調査（沖縄国際大学）
- ⑤ 1977年：第4次室川貝塚発掘調査（沖縄国際大学）
- ⑥ 1978年：第5次室川貝塚発掘調査（沖縄国際大学）
- ⑦ 1982年：室川貝塚東地区試掘調査（沖縄市が沖縄国際大学に委託）
- ⑧ 1983年：室川市営住宅集会場の建設予定地試掘調査（沖縄市教育委員会）
- ⑨ 1985年：仲宗根貝塚発掘調査（沖縄県教育委員会）
- ⑩ 1989年8月：室川貝塚東地区記録保存発掘調査（沖縄市教育委員会）
- ⑪ 1989年12月：室川貝塚崖下地区記録保存発掘調査（沖縄市教育委員会）
- ⑫ 1989年12月：馬上原遺跡記録保存発掘調査（沖縄市教育委員会）

実施開始年

① 沖縄貝塚時代早期（縄文時代前期）

室川貝塚の第1次発掘調査は1974年に実施された。同調査の最初の目的は、沖縄最古の土器の究明を目指していた。明治に鳥居龍藏氏が沖縄貝塚時代の土器を報告して以来、70年もの年月が過ぎても伊波式土器や荻堂式土器より古い土器は発見されなかった。戦後、沖縄貝塚時代の考古学研究は多和田真淳氏によって進められた。氏の研究は『琉球列島の貝塚分布と編年の概念』として発表され、沖縄の土器編年は多少の修正はあっても縄文時代後期より古くはないだろうと考えられていた。当時はほとんどの研究者は、荻堂式が沖縄最古の土器と考えていた。室川貝塚の発掘調査は、この荻堂式と伊波式の前後関係を層位的発掘によって検証することを課題として実施された。

ところが発掘調査は思わぬ展開となった。「赤連系土器」と呼ばれていた新型式の土器が出土した。この土器は伊波式土器や荻堂式土器よりも古い縄文系土器である可能性が予想された。その後の発掘調査で「赤連系土器」は、予想通り室川貝塚の最下層から出土することが明らかになり、「室川下層式」と命名された。

赤連系土器が発見されたことによって、多くの考古学関係者は土器資料の再検討をはじめた。それから間もなく、比謝川河口の読谷村渡具知東原遺跡から室川下層式に似た土器片が採集され、それを聞いた沖縄国際大学考古学研究会のサークルメンバーが同遺跡から土器を採集してきた。採集された土器の中に、九州の縄文時代前期の曾畠式土器が含まれていた。曾畠式は九州の縄文時代前期(約5000年前)の土器である。沖縄の貝塚時代は縄文時代後期(3500年前)に始まると考えられていたが、縄文中期を飛びこし、一気に1500年も古くなかった。しかし、この発見もその後の新資料続出の始まりに過ぎなかった。

翌1975年12月の渡具知東原の発掘では、次々と新発見の土器が出土した。地表下5mの深さで出土したヤブチ式土器は、C14による年代測定で6700年前と計測された。室川下層式の発見から、わずか2年弱の短期間に沖縄貝塚時代の年代が大きく書きえられた。

土器編年上の問題

本遺跡や室川貝塚では、室川下層式と面縄前庭式が出土しているが、両型式をつなぐ中間型式が出土していない。室川下層式と面縄前庭式の底部が尖底で、本遺跡で次に登場する沖縄貝塚時代前期の伊波式や荻堂式は平底と大きく異なる。室川下層式は縄文時代前期に比定され、次の面縄前庭式が登場するまで、かなりの年月が過ぎたと予想される。器形が面縄前庭式に近い仲泊式などが本遺跡一帯で出土していない。室川下層式は曾畠式と共に伴したが、面縄前庭式は共伴する縄文土器の例が知られていない。面縄前庭式の編年上の位置は、縄文時代中期あるいは後期のどちらに位置するか不明である。

② 沖縄貝塚時代前～中期（縄文時代後～晩期）

土器編年上の問題

復帰前後の頃、沖縄の貝塚時代前期の多くの遺跡が琉球石灰岩崖下や岩陰で発見され、貝塚時代の人々は洞穴や岩陰に住居を営んでいただろうと考えられていた。しかし、復帰後に農地整備事業などに伴って大規模な発掘調査が行われるようになり、貝塚時代前期に堅穴住居の平地集落が存在することが明らかになった。

本報告でとりあえず「宇宿下層式など」と括した土器群がある。以前、このグループの土器は「奄美系土器」と通称されていた。1965年の仲宗根貝塚発掘調査（琉球政府文化財保護委員会）の土器出土状況を見ると、このグループが下層の第VI層で多く出土する傾向が窺える。伊波式から荻堂式へと沖縄の地域色が強まる以前、奄美諸島から沖縄諸島までの広い地域に奄美系と呼ばれたグループが分布した可能性が大きい。

伊波式と荻堂式は、室川貝塚・馬上原遺跡・仲宗根貝塚でもっとも多く出土する。両型式は沖縄諸島の地域色の強い土器で、沖縄貝塚時代を代表する土器として知られている。伊波式に続く土器型式は途切れることなく連続している。

この事を補足する資料として、馬上原遺跡ではカヤウチパンタ式が極端に少ない。この傾向は仲宗根貝塚も同様である。これに対して1975年に沖縄国際大学考古学研究室が発掘した室川貝塚のSトレンチIV層では、カヤウチパンタ式が主体である。SトレンチではIV

層以外でも、「奄美系土器」と仮称した土器グループの出土がほとんどない。「奄美系土器」は、波状の山形口縁器形や口唇部への施文なども考慮すると伊波式・荻堂式土器との相関関係が非常に強く感じられる。

縄文後期から晩期

カヤウチパンタ式から宇佐浜式へ移行する時期は、縄文時代の後期から晩期にかけての頃と考えられている。宇佐浜式は室川貝塚～馬上原遺跡～室川貝塚東地区～仲宗根貝塚と広い範囲から出土している。これに対してカヤウチパンタ式・室川上層式土器・面縄西洞式などは、出土する範囲が限られ、室川貝塚崖下地区から先述のSトレンチにかけての一帯に集中している。

伊波式・荻堂式は、沖縄諸島のどの遺跡から出土する土器も施文具・文様の組み合わせだけでなく胎土まで規格性が認められる。大山式（大山Ⅱ類）以降は、これまで継続してきた伝統的な土器作り技術の崩壊が見られる。下記にその例を示す。

- ① 混和材の質が異なる（石英・チャート系に石灰質粒などが加わる）。
- ② 石灰質粒が溶け、無数の小孔となって残る。通称アバタ状の器面が出現。
- ③ 極端に脆弱な土器が出現。
- ④ 多種多様な肥厚口縁の出現。
- ⑤ 3～4 cmの底径や丸底・尖底が出現。

大山式以降に地域間の移動が困難になったのか、国頭マージ系以外の粘土が使用されるようになる。沖縄本島中南部では石灰岩が内陸まで分布する。そのため、この地域で得られる粘土には、石灰岩粒が含まれる可能性が大きい。また、加熱による強度変化のない石英やチャートが得られないで、貝殻などの石灰質粒を混和材に用いるようになる。

石灰質の混和材は風化しやすい。風雨にさらされた土器片は、溶けた粒の痕がアバタ状になって器面に残される。このような土器片を割ってみると、内部まで粒の痕が空洞になっている。土器の骨材となるべき混和材が失われているので、非常に脆弱な土器となっている例が圧倒的である。

平底から尖底・丸底へ

沖縄貝塚時代の土器は、カヤウチパンタ式以降に底径3～4 cmの平底が出現し、やがて尖底・丸底が出現する。底の形が変化する時期に口縁部を肥厚させた土器が登場する。

縄文から弥生へ

次の仲原式の出土も宇佐浜式と同様に広範囲から出土しているが、最も出土量が多いのは室川貝塚東地区である。伊波式土器の頃から連続してきた土器型式の流れが仲原式で途切れる。室川貝塚の崖下地区で弥生前期初頭と思われる移入土器片が出土している。従来、

弥生時代の土器は海浜地域の遺跡で出土している。室川貝塚のような内陸部の遺跡から弥生時代の土器が出土したのは初めてである。

沖縄貝塚時代中期から後期になると、遺跡が海浜地域に形成されるようになる。従来、九州あたりから移入された弥生土器は、このような海浜地域の遺跡から出土していた。室川貝塚の出土例は遺跡が内陸部にあった時期に弥生文化と交流が始まり、その影響を受けて海浜地域に移住することになった事を明らかにした。弥生文化が沖縄に与えた衝撃は、千年以上も住み続けた室川貝塚一帯の土地を捨て去るほどに大きかった。

③ 《空白期》沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代末）

以前、沖縄貝塚時代の後期を「後期砂丘貝塚時代」と呼ぶことが普通であった。この言葉に明らかなように、後期遺跡の多くが海浜に分布する。その典型的な地域が比謝川から残波岬にかけての読谷村海岸で、南から木綿原貝塚、大当原貝塚・連道原貝塚、高知口貝塚、大久保原遺跡、浜屋原遺跡群と遺跡が連なっている。この地域と対照的に中城湾沿岸には後期遺跡が分布しない。

沖縄本島の北部は山地が険しく、遺跡は海岸近くに限られる場合が多い。中南部では地形による制限ではなく、島尻マージ土壤地域に遺跡が分布する。堅穴住居を営むには排水性の良い島尻マージ土壤が好まれたのであろう。具志川市は沖縄市の北隣であるが、島尻マージ土壤が海岸まで分布し、宇堅貝塚、アカジョンガ貝塚が残されている。勝連半島以南の中城湾沿岸では島尻マージ土壤は内陸部だけで、海岸近くは粘土質のジャーガル土壤である。

室川貝塚は海岸までの距離は約2km、荻堂貝塚は約1kmである。室川貝塚では千年以上も存続していた遺跡が見捨てられた。第1章で先述したように中城湾沿岸は砂泥海岸でゴホウラ、大形のイモ貝が採れない点も遺跡が分布しない大きな要因と考えられる。

④ グスク時代（平安末～鎌倉・室町～安土桃山時代）

室川貝塚崖下地区でフェンサ下層式土器が出土した。この土器は沖縄貝塚時代後期の伝統的な器形や製作技術で作られている。ところが、この土器に統いて登場する土器は器形が大きく変わり、削りによる整形が行われる。フェンサ下層式からグスク時代の土器への変化は、革命的で中間型式は見当たらない。

沖縄各地のグスク時代遺跡から米や麦が出土し、農耕が行われたのは明らかである。グスク時代の始まりについては、貝塚時代後期の久米島北原貝塚など開元通宝の出土状況から10世紀前後の可能性が強いと考えられる。

沖縄市内では現在のところ、フェンサ下層式の出土した遺跡は室川貝塚だけである。しかし、グスク時代になると沖縄市内に11遺跡が分布するようになる。本遺跡の南、仲宗根ウガンの拝所付近に集落が形成されたようである。集落は時代が下るにつれコザ中学校敷地付近へと広がり、仲宗根集落や胡屋集落へ引き継がれていったと考えられる。

⑤ 首里王府時代（仮称）～（安土桃山～江戸時代～近世・現代）

本報告書では「胡屋・仲宗根民俗地図」を作成した。区画整理以前の地籍図をベースに宅地・畠地・水田・墓地・山林・原野・拝所・井泉・水系など記入した。同図で明らかなように馬上原遺跡は、「胡屋ウマイー（胡屋馬場）」の東に位置する。

同図を見ると胡屋・仲宗根集落の旧家や拝所がグスク時代の遺跡や遺跡近くに位置することが明らかである。現在行われている行事も拝所との関わりが深く、グスク時代遺跡の研究には民俗学的な調査を平行して行う必要性を強く感じる。

土器・石器出土一覧表

図13 室川下層式

図13-1	K4-暗褐色土層30~40cm	室川下層式
図13-2	K5-暗褐色土層下部	室川下層式
図13-3	K5-暗褐色土層下部	室川下層式
図13-4	第2号住居址-暗褐色土層	室川下層式
図13-5	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	室川下層式
図13-6	J6-暗褐色土層0~10cm	室川下層式
図13-7	埋土擾乱層	室川下層式
図13-8	埋土擾乱層	室川下層式
図13-9	J3-暗褐色土層下部0~60cm	室川下層式

図14 面繩前庭式宇宙下層式など

図14-1	M3-暗褐色土層	面繩前庭式
図14-2	埋土擾乱層	面繩前庭式
図14-3	K4-暗褐色土層20~30cm	面繩前庭式
図14-4	K5-暗褐色土層30~40cm	面繩前庭式
図14-5	K5-暗褐色土層下部	宇宙下層式
図14-6	K5-暗褐色土層30~40cm	宇宙下層式
図14-7	J5-暗褐色土層	宇宙下層式
図14-8	K5-暗褐色土層下部	宇宙下層式
図14-9	K5-暗褐色土層下部	宇宙下層式
図14-10	K5-暗褐色土層20~30cm	宇宙下層式
図14-11	K5-暗褐色土層20~30cm	宇宙下層式
図14-12	J6-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-13	J6-茶褐色土層	宇宙下層式
図14-14	K5-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-15	K5-暗褐色土層10~20cm	宇宙下層式
図14-16	J6-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-17	K5-暗褐色土層30~40cm	宇宙下層式
図14-18	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-19	K4-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-20	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-21	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇宙下層式
図14-22	K5-暗褐色土層20~30cm	宇宙下層式
図14-23	K5-暗褐色土層下部	宇宙下層式
図14-24	K4-暗褐色土層20~40cm	宇宙下層式
図14-25	クリッド不明-暗褐色土層	宇宙下層式
図14-26	埋土擾乱層	宇宙下層式
図14-27	K5-暗褐色土層	宇宙下層式
図14-28	J6-暗褐色土層下部	宇宙下層式

図15 伊波式

図15-1	K7(P10)-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図15-2	K5-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図15-3	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図15-4	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式

図15-5	J3-暗褐色土層0~60cm	伊波・荻堂式
図15-6	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図15-7	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図15-8	K5-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図15-9	K4-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-10	J6-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図15-11	K5-暗褐色土層下部	伊波・荻堂式
図15-12	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-13	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図15-14	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図15-15	K7(P10)-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図15-16	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図15-17	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-18	K4-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-19	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図15-20	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図15-21	K5-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図15-22	K4-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-23	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-24	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図15-25	第2号住居址-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図15-26	K5-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図15-27	J6-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図15-28	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-29	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図15-30	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図15-31	埋土擾乱層	伊波・荻堂式

図16 伊波式

図16-1	K4-暗褐色土層10~30cm	伊波・荻堂式
図16-2	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図16-3	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図16-4	K4-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図16-5	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図16-6	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図16-7	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図16-8	K5-暗褐色土層下部0~10cm	伊波・荻堂式
図16-9	J3-暗褐色土層下部	伊波・荻堂式
図16-10	K4-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図16-11	K5-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図16-12	K5-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図16-13	J5(P5)-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図16-14	K4-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図16-15	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図16-16	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図16-17	J3-暗褐色土層下部30~40cm	伊波・荻堂式

图16-18	K4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-19	第1号住居址-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图16-20	K5-暗褐色土层30~40cm	伊波·荻堂式
图16-21	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-22	K4-暗褐色土层40~50cm	伊波·荻堂式
图16-23	K5-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图16-24	J3-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图16-25	J3-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图16-26	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图16-27	J3-暗褐色土层0~60cm	伊波·荻堂式
图16-28	第1号住居址-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图16-29	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-30	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-31	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-32	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-33	J3-暗褐色土层0~60cm	伊波·荻堂式
图16-34	K4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-35	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-36	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图16-37	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-38	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图16-39	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式

图17 伊波·荻堂式

图17-1	埋土搅乱层	伊波·荻堂式
图17-2	埋土搅乱层	伊波·荻堂式
图17-3	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-4	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图17-5	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图17-6	J6-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图17-7	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-8	第1号住居址-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图17-9	第1号住居址-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图17-10	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图17-11	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-12	第2号住居址-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图17-13	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-14	J4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-15	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-16	J3-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-17	K5-暗褐色土层30~40cm	伊波·荻堂式
图17-18	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-19	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-20	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图17-21	J3-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-22	J3-暗褐色土层下部0~60cm	伊波·荻堂式
图17-23	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图17-24	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-25	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式

图17-26	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-27	K5-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图17-28	K4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-29	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-30	第2号住居址-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图17-31	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-32	K4-暗褐色土层40~50cm	伊波·荻堂式
图17-33	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图17-34	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图17-35	埋土搅乱层	伊波·荻堂式

图18 伊波·荻堂式

图18-1	K4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-2	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图18-3	I4 I5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图18-4	K5-暗褐色土层30~40cm	伊波·荻堂式
图18-5	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-6	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-7	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-8	K4-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图18-9	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-10	K5-暗褐色土层30~40cm	伊波·荻堂式
图18-11	K5-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图18-12	K5-暗褐色土层40~50cm	伊波·荻堂式
图18-13	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-14	K4-暗褐色土层30~40cm	伊波·荻堂式
图18-15	K5-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-16	K5-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图18-17	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图18-18	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-19	K5(P4)-暗褐色土层	伊波·荻堂式
图18-20	K4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-21	第1号住居址-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-22	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-23	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-24	K4-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-25	K5-暗褐色土层下部	伊波·荻堂式
图18-26	K5-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图18-27	K4-暗褐色土层30~40cm	伊波·荻堂式
图18-28	K5-暗褐色土层下部0~10cm	伊波·荻堂式
图18-29	K5-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式
图18-30	K4-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-31	K5-暗褐色土层20~30cm	伊波·荻堂式
图18-32	第1号住居址-暗褐色土层10~20cm	伊波·荻堂式
图18-33	K4-暗褐色土层0~10cm	伊波·荻堂式

图19 伊波·荻堂式

- 图19-1 第1号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-2 K4-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-3 第2号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-4 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-5 第1号住居址-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-6 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-7 K4-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-8 K4-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-9 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-10 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-11 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图19-12 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-13 K4-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-14 J3-暗褐色土层下部0~60cm 伊波·荻堂式
 图19-15 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-16 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-17 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图19-18 埋土搅乱层 伊波·荻堂式
 图19-19 K5-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-20 K5-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-21 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图19-22 J6-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-23 K4-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-24 K7(P10)-暗褐色土层 伊波·荻堂式
 图19-25 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-26 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-27 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-28 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-29 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-30 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-31 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图19-32 第2号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-33 J3-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图19-34 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图19-35 第1号住居址-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-36 埋土搅乱层 伊波·荻堂式
 图19-37 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-38 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-39 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图19-40 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图19-41 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图19-42 K4-暗褐色土层40~50cm 伊波·荻堂式
 图19-43 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-44 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-45 K4-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-46 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图19-47 K4-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图19-48 K4-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式

图19-49 K5-暗褐色土层下部

伊波·荻堂式

图19-50 K5-暗褐色土层20~30cm

伊波·荻堂式

图20 伊波·荻堂式

- 图20-1 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-2 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-3 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-4 K5(P3)-暗褐色土层 伊波·荻堂式
 图20-5 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图20-6 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-7 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-8 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-9 J4-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图20-10 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-11 J3-暗褐色土层下部0~60cm 伊波·荻堂式
 图20-12 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-13 K4-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-14 J7(P3)-暗褐色土层 伊波·荻堂式
 图20-15 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-16 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-17 第1号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-18 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-19 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-20 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图20-21 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-22 第2号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-23 J3-暗褐色土层下部0~60cm 伊波·荻堂式
 图20-24 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-25 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-26 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-27 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图20-28 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-29 K5-茶褐色土层0~40cm 伊波·荻堂式
 图20-30 J6-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-31 J3-暗褐色土层下部0~50cm 伊波·荻堂式
 图20-32 K6-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-33 埋土搅乱层 伊波·荻堂式
 图20-34 K4-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-35 K5-暗褐色土层10~20cm 伊波·荻堂式
 图20-36 第2号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-37 K5-暗褐色土层20~30cm 伊波·荻堂式
 图20-38 K5-暗褐色土层30~40cm 伊波·荻堂式
 图20-39 K5-暗褐色土层下部 伊波·荻堂式
 图20-40 第1号住居址-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-41 K4-暗褐色土层0~10cm 伊波·荻堂式
 图20-42 第2号住居址-暗褐色土层 伊波·荻堂式

図21 伊波・荻堂式

図21-1	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-2	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-3	K5-暗褐色土層下部	伊波・荻堂式
図21-4	J6-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-5	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-6	K5-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-7	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-8	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-9	K5-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図21-10	K4-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図21-11	J3-暗褐色土層下部0~60cm	伊波・荻堂式
図21-12	K5-暗褐色土層下部	伊波・荻堂式
図21-13	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図21-14	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図21-15	K5-暗褐色土層10~20cm	伊波・荻堂式
図21-16	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-17	K5-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図21-18	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-19	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図21-20	第1号住居址-暗褐色土層上部	伊波・荻堂式
図21-21	J4-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-22	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-23	J6-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-24	K5-暗褐色土層下部	伊波・荻堂式
図21-25	K5(P4)-暗褐色土層	伊波・荻堂式
図21-26	埋土攪乱層	伊波・荻堂式
図21-27	J3-暗褐色土層下部0~60cm	伊波・荻堂式
図21-28	K3-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-29	K4-暗褐色土層40~50cm	伊波・荻堂式
図21-30	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-31	K4-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図21-32	K5-暗褐色土層20~30cm	伊波・荻堂式
図21-33	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-34	K3-埋土攪乱層	伊波・荻堂式
図21-35	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	伊波・荻堂式
図21-36	K5-暗褐色土層30~40cm	伊波・荻堂式
図21-37	K5-暗褐色土層下部	伊波・荻堂式

図22 大山式・肥厚口縁土器・宇佐浜式

図22-1	K4-暗褐色土層10~20cm	大山式・肥厚口縁群
図22-2	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-3	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-4	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図22-5	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-6	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図22-7	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-8	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-9	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式

図22-10	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-11	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図22-12	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-13	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-14	第2号住居址-暗褐色土層	大山式・肥厚口縁群
図22-15	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-16	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-17	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-18	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	大山式・肥厚口縁群
図22-19	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-20	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-21	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-22	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図22-23	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図22-24	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図22-25	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図22-26	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図22-27	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図22-28	K5-暗褐色土層20~30cm	大山式・肥厚口縁群
図22-29	K5-暗褐色土層30~40cm	大山式・肥厚口縁群
図22-30	K5-暗褐色土層20~30cm	大山式・肥厚口縁群
図22-31	K5(P2)-暗褐色土層	大山式・肥厚口縁群

図23 宇佐浜式

図23-1	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-2	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図23-3	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	宇佐浜式
図23-4	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-5	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図23-6	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-7	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-8	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図23-9	客土搅乱層	宇佐浜式
図23-10	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図23-11	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図23-12	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-13	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-14	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-15	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-16	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-17	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-18	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-19	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-20	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-21	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-22	第2号住居址-暗褐色土層	宇佐浜式

図23-23	埋土擾乱層	宇佐浜式
図23-24	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-25	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図23-26	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図23-27	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式

図24 宇佐浜式

図24-1	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図24-2	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-3	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図24-4	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-5	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図24-6	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-7	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-8	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-9	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-10	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-11	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-12	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-13	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-14	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-15	第2号住居址-暗褐色土層	宇佐浜式
図24-16	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図24-17	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図24-18	第2号住居址-暗褐色土層	宇佐浜式
図24-19	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-20	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-21	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図24-22	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図24-23	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式

図25 宇佐浜式・仲原式

図25-1	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-2	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-3	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	宇佐浜式
図25-4	K4-暗褐色土層40~50cm	宇佐浜式
図25-5	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-6	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-7	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-8	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-9	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-10	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-11	K4-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-12	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-13	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	宇佐浜式
図25-14	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-15	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-16	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-17	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	宇佐浜式
図25-18	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式

図25-19	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	宇佐浜式
図25-20	埋土擾乱層	宇佐浜式
図25-21	K4-暗褐色土層40~50cm	仲原式
図25-22	K4-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図25-23	不明-暗褐色土層	大山式・肥厚口縁群
図25-24	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-25	K4-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-26	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	宇佐浜式
図25-27	K5(P4)-暗褐色土層	仲原式・宇佐浜式
図25-28	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-29	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-30	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図25-31	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	宇佐浜式
図25-32	K5-暗褐色土層20~30cm	仲原式
図25-33	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	大山式・肥厚口縁群
図25-34	J3-暗褐色土層下部0~60cm	仲原式
図25-35	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-36	H3-暗褐色土層20~30cm	仲原式
図25-37	客土擾乱層	仲原式
図25-38	K6-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-39	J6-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-40	K4-暗褐色土層10~20cm	仲原式
図25-41	K5-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-42	J6-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図25-43	K5-暗褐色土層20~30cm	大山式・肥厚口縁群
図25-44	K4-暗褐色土層40~50cm	大山式・肥厚口縁群
図25-45	K4-暗褐色土層20~30cm	大山式・肥厚口縁群

図26 仲原式・その他

図26-1	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-2	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-3	K4-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-4	第1号住居址-暗褐色土層10~20cm	仲原式
図26-5	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-6	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-7	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-8	K4-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-9	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-10	K4-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-11	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-12	K5-暗褐色土層0~10cm	仲原式
図26-13	K4-暗褐色土層40~50cm	仲原式
図26-14	K5(P4)-暗褐色土層	その他
図26-15	K4-暗褐色土層40~50cm	その他
図26-16	K4-暗褐色土層10~20cm	その他

図27 底部

図27-1	K5-暗褐色土層0~10cm
図27-2	K5-暗褐色土層20~30cm
図27-3	K4-暗褐色土層30~40cm

图27-4	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-5	K4-暗褐色土层0~10cm
图27-6	K4-暗褐色土层20~30cm
图27-7	K4-暗褐色土层10~20cm
图27-8	K4-暗褐色土层0~10cm
图27-9	K4-茶褐色土层0~40cm
图27-10	K5-暗褐色土层下部
图27-11	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-12	K5-暗褐色土层下部
图27-13	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-14	K5-暗褐色土层0~10cm
图27-15	K4-暗褐色土层40~50cm
图27-16	K5-暗褐色土层0~10cm
图27-17	K4-暗褐色土层30~40cm
图27-18	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-19	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-20	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-21	J4-埋土枕灰层
图27-22	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-23	K5-暗褐色土层下部0~10cm
图27-24	第1号住居址-暗褐色土层0~10cm
图27-25	K5-暗褐色土层0~10cm
图27-26	K5-暗褐色土层10~20cm
图27-27	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-28	K5-暗褐色土层10~20cm
图27-29	K5-暗褐色土层30~40cm
图27-30	K4-暗褐色土层30~40cm
图27-31	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-32	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-33	K5-暗褐色土层20~30cm
图27-34	J3-暗褐色土层下部
图27-35	K5-暗褐色土层下部
图27-36	J3-暗褐色土层下部
图27-37	K5-暗褐色土层下部
图27-38	第2号住居址-暗褐色土层0~10cm
图27-39	第2号住居址-茶褐色土层0~10cm
图27-40	J6-暗褐色土层0~10cm
图27-41	第2号住居址-暗褐色土层0~10cm
图27-42	E3-暗褐色土层10~20cm

图28 石器实测图

图28-1	K4-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩?
图28-2	J3-暗褐色土层下部	安山岩
图28-3	D6-茶褐色土层0~10cm	安山岩
图28-4	K5-茶褐色土层0~40cm	安山岩
图28-5	H5-暗褐色土层下部	辉绿岩or变辉绿岩
图28-6	J6-暗褐色土层0~10cm	辉绿岩or变辉绿岩

图28-7	第2号住居址(N6)-暗褐色土层0~10cm	砂岩
图28-8	E3-暗褐色土层10~20cm	绿色片岩

图29 石器实测图

图29-1	I4-茶褐色土层(耕作土层)	绿色片岩
图29-2	K4-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩
图29-3	K6-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩
图29-4	K6-茶褐色土层(耕作土层)	绿色片岩
图29-5	M4-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩
图29-6	K3-暗褐色土层	绿色片岩
图29-7	埋土·搅乱层	绿色片岩
图29-8	I4-茶褐色土层(耕作土层)	绿色片岩

图30 石器实测图

图30-1	E3-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩
图30-2	J3·K3·L3-暗褐色土层30~40cm	绿色片岩
图30-3	K4-暗褐色土层0~10cm	闪绿岩or辉绿岩
图30-4	K3-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩
图30-5	J4-暗褐色土层10~20cm	砂岩
图30-6	J5·K5·J6·K6-暗褐色土层下部	绿色片岩

图31 石器实测图

图31-1	K6-暗褐色土层20~30cm	绿色片岩
图31-2	K4-暗褐色土层30~40cm	绿色片岩
图31-3	K4-暗褐色土层30~40cm	黑色片岩
图31-4	K7(P10)-暗褐色土层	千枚岩
图31-5	K4-暗褐色土层30~40cm	绿色片岩
图31-6	I3-暗褐色土层	绿色片岩

图32 石器实测图

图32-1	K6-暗褐色土层20~30cm	绿色片岩
图32-2	E7-茶褐色土层(耕作土层)	绿色片岩
图32-3	K3-茶褐色土层(耕作土层)	砂岩
图32-4	J4-暗褐色土层20~30cm	绿色片岩
图32-5	K6-暗褐色土层	绿色片岩
图32-6	K6-茶褐色土层(耕作土层)	火成岩?

图33 石器实测图

图33-1	J4·K4-暗褐色土层下部	绿色片岩
图33-2	I4-暗褐色土层下部	绿色片岩
图33-3	J4-暗褐色土层20~30cm	绿色片岩
图33-4	L4-暗褐色土层0~10cm	砾岩
图33-5	D6-暗褐色土层40~60cm	绿色片岩
图33-6	M4-暗褐色土层40~60cm	绿色片岩
图33-7	I4-茶褐色土层(耕作土层)	绿色片岩
图33-8	L4-暗褐色土层	绿色片岩
图33-9	K5-暗褐色土层0~10cm	绿色片岩

图34 石器实测图

图34-1	K5-暗褐色土层下部	砂岩
图34-2	J7-茶褐色土层(耕作土层)	砂岩

図34-3	K5-暗褐色土層20~30cm	緑色片岩
図34-4	K4-暗褐色土層	緑色片岩
図34-5	J5・K5-暗褐色土層	緑色片岩
図34-6	K3・L3-暗褐色土層30~40cm	緑色片岩
図34-7	J4-暗褐色土層30~40cm	緑色片岩

図35 石器実測図

図35-1	K5-暗褐色土層10~20cm	緑色片岩
図35-2	K7-茶褐色土層(耕作土層)	黒色片岩
図35-3	K5-暗褐色土層下部	火山岩系統
図35-4	J5-暗褐色土層20~30cm	緑色片岩
図35-5	K5-暗褐色土層	千枚岩
図35-6	J4-暗褐色土層10~20cm	緑色片岩
図35-7	K3-暗褐色土層	緑色片岩
図35-8	K4-暗褐色土層	緑色片岩
図35-9	K4-茶褐色土層(耕作土層)	緑色片岩

図36 石器実測図

図36-1	L4-茶褐色土層(耕作土層)	緑色片岩
図36-2	K3-暗褐色土層	緑色片岩
図36-3	K5-茶褐色土層(耕作土層)	緑色片岩
図36-4	J3-茶褐色土層(耕作土層)	緑色片岩
図36-5	I4・I5・I6-暗褐色土層下部	緑色片岩
図36-6	K5-暗褐色土層	緑色片岩
図36-7	K6-茶褐色土層(耕作土層)	砂岩
図36-8	K6-暗褐色土層0~10cm	片状砂岩
図36-9	K7-暗褐色土層下部	砂岩
図36-10	K5-暗褐色土層	砂岩

図37 石器実測図

図37-1	J5・J6-暗褐色土層下部	砂岩
図37-2	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	粗粒砂岩
図37-3	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図37-4	K5-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図37-5	第1号住居址-埋土・擾乱層	砂岩
図37-6	J6-茶褐色土層(耕作土層)	砂岩
図37-7	J5-暗褐色土層20~30cm	砂岩
図37-8	J3-暗褐色土層下部	チャート
図37-9	K4-暗褐色土層0~10cm	チャート
図37-10	J・K(グリッド不明)-暗褐色土層下部	砂岩
図37-11	K3-暗褐色土層	砂岩

図38 石器実測図

図38-1	第2号住居址-暗褐色土層0~10cm	閃綠岩
図38-2	K5-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図38-3	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図38-4	K5-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図38-5	J3-暗褐色土層下部	砂岩
図38-6	K3-暗褐色土層20~30cm	砂岩
図38-7	K5-暗褐色土層0~10cm	砂岩

図38-8 第1号住居址-暗褐色土層 砂岩

図39 石器実測図

図39-1	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図39-2	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図39-3	J5-暗褐色土層20~30cm	砂岩
図39-4	K5-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図39-5	第1号住居址-埋土・擾乱層	砂岩
図39-6	第1号住居址-暗褐色土層	細粒砂岩
図39-7	K6-暗褐色土層20~30cm	片状砂岩
図39-8	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	片状砂岩

図40 石器実測図

図40-1	K5・J5-暗褐色土層	砂岩
図40-2	J4-暗褐色土層	砂岩
図40-3	K5-暗褐色土層20~30cm	砂岩
図40-4	E3-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図40-5	第1号住居址-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図40-6	K4-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図40-7	K6-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図40-8	J6-暗褐色土層0~10cm	砂岩
図40-9	J7-茶褐色土層(耕作土層)	細粒砂岩
図40-10	K5-暗褐色土層10~20cm	細粒砂岩

馬上原遺跡
室川貝塚崖上地区

沖縄市総合庁舎建設に伴う馬上原遺跡
 記録保存発掘調査の報告書

沖縄市文化財調査報告書第22集

2000年3月 印刷
 2000年3月 発刊

発行 沖縄市教育委員会
 沖縄市仲宗根町26-1

編集 沖縄市立郷土博物館
 TEL (098) 904-0031 沖縄県沖縄市土地235番地3
 TEL (098) 932-6882

印刷 社会事業授産施設 沖縄コロニー印刷
 TEL (098) 901-2126 沖縄県浦添市宮城4-9-17
 TEL (098) 877-3344